

立原道造の病跡学的研究
— 結核患者としての側面 —

筑波大学審査学位論文（博士）

2018

木山 祐子

筑波大学大学院
人間総合科学研究科 生涯発達科学専攻

目次

序論	1
第1章：本研究の背景	2
第2章：立原道造の生涯と作品	3
第3章：病跡学的な先行研究	7
1、立原道造の結核に関する病跡学的研究	7
2、思春期の「神経衰弱」に関する研究	10
第4章：本研究の目的	13
本論	14
第1章 研究1：肋膜炎から結核まで	15
(昭和12年9月3日～昭和13年7月上旬)	15
1、目的	15
2、対象と方法	15
3、結果	16
4、考察	32
第2章 研究2：結核診断時の医師による回想録	37
(昭和13年7月上旬～同年7月20日)	37
1、目的	37
2、対象と方法	39
3、結果	40
4、考察	42
第3章 研究3：結核診断から長崎旅行まで	45
(昭和13年7月21日～昭和13年11月23日)	45
1、目的	45
2、対象と方法	45
3、結果	46

4、考察	62
第4章 研究4：長崎旅行	68
(昭和13年11月24日～同年12月15日)	68
1、目的	68
2、対象と方法	68
3、結果	69
I、『ノオト』	69
II、書簡	79
4、考察	82
第5章 研究5：長崎旅行以降	89
(昭和13年12月14日～昭和14年3月29日)	89
1、目的	89
2、対象と方法	89
3、結果	90
4、考察	96
第6章 研究6：詩への影響	98
1、目的	98
2、対象と方法	98
3、結果	99
4、考察	103
第7章 研究7：エッセイへの影響	107
1、目的	107
2、対象と方法	108
3、結果	108
1) 結核診断前	108
2) 結核診断後	109
4、考察	112

結論	115
第1章：総合考察	116
1、結核患者としての実態	116
2、結核という言葉の忌避	120
3、病跡学的な認識	127
4、死の認識と受容	133
第2章：本研究の限界と今後の課題	141
表	142
本論文を構成する研究の発表状況	153
引用文献	154
謝辞	159

序論

第 1 章：本研究の背景

立原道造（1914～1939）は、昭和 14 年に 24 歳で亡くなった昭和初期を代表する抒情詩人の一人である。筆者は、高校時代に現代国語の教科書で立原の『のちのおもひに』という詩を読んで、その詩に表現された世界が凍るように美しいと魂が震えるような感動を覚え、このような美しい詩を書く人は一体どのような人なのだろうという関心を持った。

その後、立原のほとんどの作品を読むようになって、ますますその世界に魅了されてきたが、たまたま『立原道造全集』に収められている彼の書簡や手記を読んだところ、そこには、彼の命を奪った結核という病に関わる記述が数多くみられることに気がついた。

しかし、後述するごとく、これまでの立原に関する研究では、文学畑の研究者が大部分を占めていることもあって、立原の結核や、結核患者としての立原については、ほとんど論じられていないことがわかった。

そこで、本研究では、立原の書簡を中心に、立原が残した手記や周囲の証言なども参照しながら、これまで明らかにされていない立原の結核に関わる事実関係を明らかにするとともに、立原が結核という病をどのように受け止め、どう対処したのかを、病跡学的な観点から検討することにした。

序論では、まず、これまでに明らかになっている立原道造の生涯と病の概要を記し、次に、立原の病に関わる先行研究を概観した上で、本研究の意義と目的を述べる。

第 2 章：立原道造の生涯と作品

最初に、1973年に成田孝昭が『現代日本文学大系 67』に発表した年譜、ならびに2010年9月に中村稔が『立原道造全集 5』に発表した年譜に基づいて、立原の生涯と作品を概説する。

なお、直接、結核に関わる記述については太字で示した。

立原道造は、大正3年（1914年）7月30日、東京市日本橋区橋町3丁目1番地（現在の東京都中央区東日本橋3丁目5番1号）に、父貞次郎、母登免の次男として生まれた。家業は商品荷造り用の木箱の製造業であったが、長男の一郎はすでに夭折していたため、実質的には立原家の長男として育てられた。

大正8年、立原が満5歳の年の8月22日に父親が死去したため、家督を相続して店名を「立原道造商店」と改称するが、家業の実務には母親と番頭があたることになる。

大正10年4月、久松尋常小学校に入学。はにかみ屋で、おとなしい運動嫌いの子供だったが、成績優秀で、開校以来の俊童といわれ、首席を通した。

大正12年9月、関東大震災で、千葉県新川村（現在の流山市の一部）の親戚豊島家に疎開するが、この豊島家は、東部鉄道野田線初石駅まで他人の土地を踏まないで行けるといほどの大地主であった。この頃、母・登免の取り仕切る一家は、総数で、分家や雇い人など50人余を抱える商家であったという。

昭和2年3月、久松尋常小学校を卒業して、4月に東京府立第三中学校（現：都立両国高校）に入学。

昭和3年12月、石川啄木の『一握の砂』などの影響で、三行書きの短歌を作り始めた。

昭和4年3月22日、従妹の立原婦志子が虫垂炎で急逝。

同月20日頃から同年7月まで、中学三年の第一学期間を「神経衰弱」のために休学し、この間、北原白秋、木下杢太郎らの短

歌を愛読した。

昭和6年3月、東京府立第三中学校を四学年で修了して、4月に第一高等学校理科甲類に入学、一年間の寮生活を送る。

10月、『校友会雑誌』第333号に、物語『あひみてののちの』を発表して、一高文壇の寵児となった。この年の秋ごろに堀辰雄の面識を得て、以後兄事する。

昭和8年5月ごろ、詩集『日曜日』（詩11篇収録）を作成。

同年夏ごろ、詩集『散歩詩集』（詩4篇収録）を作成。

昭和9年3月に第一高等学校理科甲類を卒業、4月に東京帝国大学工学部建築学科に入学する。7月に浅間山麓の信濃追分で田舎暮らしを体験する。12月に、詩「村ぐらし」及び「詩は」を『四季』第2号に発表し、この後ほとんど毎号のように同誌に詩を発表する。

昭和10年5月、課題設計「小住宅」で辰野賞（銅賞）を受賞。以後、東大在学中は3年連続して同賞を受賞する。

昭和12年3月、卒業設計で、3度目の辰野賞を受賞して、東大を卒業。4月から石本喜久治の建築事務所に就職する。

同年5月12日に処女詩集『萱草に寄す』（ソネット10篇）を風信子叢書刊行所から刊行する。

夏頃、徴兵検査を受け、痩せすぎのため、丙種不合格となる。（身長175センチ、体重49キログラム）。

10月上旬、肋膜炎により発熱、安静を命じられ、11月上旬まで約1ヵ月間、自宅で静養する。

11月19日に追分の旅館・油屋の火災に遭遇、九死に一生を得る。

12月、第二詩集『暁と夕の詩』（ソネット10篇）を風信子社から刊行する。

昭和13年1月、芳賀檀から『古典の親衛隊』を献本され、その内容に共鳴する。

4月上旬頃、同じ建築事務所に勤めていた水戸部アサイと交際

を始める。6月に、中原中也論「別離」、堀辰雄論「風立ちぬⅠ～Ⅲ」、7月に「風立ちぬⅣ～Ⅵ」を発表する。

7月中旬、肺尖カタルのために、石本建築事務所を休職し、大森で療養生活を送る。

8月上旬、信州の追分に移る。

9月中旬から山形、仙台、石巻、盛岡などへの旅に出たが、10月19日痔ろうの治療のため帰京。その間、水戸部アサイに渡す予定の『ノオト』を記す。

11月下旬に長崎などへの旅に出る。途中、奈良、京都、松江、博多、柳川などに寄る。12月に「風立ちぬⅦ～Ⅷ」を発表する。

12月4日夜に長崎着。翌5日夜に発熱して武医院に入院、咯血したため、13日に長崎を出る。14日夕方ごろ帰京。この間、水戸部アサイに渡す予定の『ノオト』を記す。

15日、東京帝国大学附属病院を受診し、26日、中野区江古田の東京市療養所に入院する。

昭和14年2月13日、第一回中原中也賞を受賞。

3月下旬に病状が急変し、29日午前2時20分、ひとり息をひきとった。24年8ヶ月の人生であった。

以上が、これまでの年譜に記されている立原道造の生涯と作品の概観である。

このようにみてくると、立原は、幼少時に父親を亡くし、14歳の時には従姉の死にも直面するなど、幼い頃から近親者の死に遭遇している。また、昭和12年夏に徴兵検査を受け、痩せすぎで丙種不合格になっているが、親友の杉浦明平（1988）は、立原は既に一高時代から、「身長175センチ（略）体重は40キロから45キロ、時には30キロ代になると言っていた」と回想している。

そして、20代前半に、詩人としても、建築家としても、周囲から高い評価を得ながら、昭和12年10月、23歳の時に肋膜炎を発症し、翌昭和13年7月に肺尖カタルと診断されて、療養生活を始

めるも、それからおよそ8カ月後の昭和14年3月に満24歳で亡くなった文字通り夭折の詩人であることがわかる。

しかし、これまでの年譜では、立原には結核という診断が下されたのか、また、もし下されたのなら、それがいつであったのかなどは明示されていない。

第 3 章：病跡学的な先行研究

1、立原道造の結核に関する病跡学的研究

病跡学については、西丸四方ら（1949）によって「著名な人物や芸術家の、精神医学的観点からの生活史で、主な目的はその人物と作品の精神病理学的に興味のある方面を論ずる」と規定されているが、これまでに発表された立原に関する病跡学的な研究について、医学中央雑誌、CiNii、国文学論文目録データベースの各データベースによる検索の結果と、国文学関係の雑誌の総覧などを参照した先行研究の概要を、以下に示す。

2016年5月7日に、医学中央雑誌で、key word「立原道造」で検索したところ、9件が該当し、その内訳は、山上栄子が1982年と1984年に発表した2件の論文と、筆者自身が2009年、2010年、2011年、2012年、2013年、2014年、2016年に発表した7件の論文であった。

次に、CiNiiで検索したところ、key word「立原道造」では295件が検出され、key word「立原道造」and「結核」では2件検出されたが、この2件はいずれも医学中央雑誌で検出された筆者自身の論文であった。

その他、「立原道造」and「死」では4件、「立原道造」and「病」では3件が該当したが、これらのうち、病跡学的な内容の論文は、小川和佑が1983年に発表した立原の思春期危機について論じた「立原道造—予め設定された短い生涯」と、筆者自身が2011年に発表した「医師からみた立原道造—秋元寿恵夫の『三つの出会い』より」の2件であった。

さらに、国文学論文目録データベースで検索したところ、key word「立原道造」では346件、key word「立原道造」and「結核」では0件、「立原道造」and「死」では3件、「立原道造」and「病」では0件検出されたが、この中には、病跡学的な観点から書かれた論文はみられなかった。

以上の3つのデータベース以外に、文学者の病に関する論文が

掲載されることの多い日本医事新報の総目次から、立原道造を論じた文献を探したところ、吉田繁が1985年と1987年に2本の病跡学的な論文を発表していることがわかった。

また、2001年に刊行された『国文学解釈と鑑賞別冊立原道造』巻末に参考文献目録として挙げられている立原道造に関わる単行本41冊と雑誌特集号21冊を参照したところ、宇佐美斉が1982年に刊行した『立原道造』と、小川和佑が1978年に発表した『立原道造の世界』、1989年に刊行された『立原道造詩集』の中に、病跡学的な記述を見出だすことができた。

さらに、福田真人が1995年に発表した『結核の文化史』においても、立原道造の結核についての言及がなされていることを確認した。

以上の文献検索の結果に基づき、これまで結核患者としての立原道造について論じられた先行研究を、年代順にして表1に示す。

これらの先行研究のうち、筆者以外の研究における知見の概要を発表年順に述べると、下記の通りである。

まず、文芸評論家の小川和佑が1978年に発表した『立原道造の世界』巻末の「立原道造年譜」の中で、具体的な論拠を明示せず、昭和11年9月21日に「雨の街を歩き発熱、発病の前駆症となる」と指摘し、それまでの鈴木亨の角川書店版『立原道造全集』第六巻所収の年譜の中の、「9月20日、雨の中を歩いて体調を崩し、数日寝込む」という事実を発展させて、この体調不良は結核の「前駆症」だったとしている。

また、小川は、同書の中で、「7月以降の立原は、その健康の急速に衰えていくに従って鬱症的な症状が彼を暗鬱の世界に誘っていったのではないかと推測できる」と、昭和13年7月以降の立原は結核を患ったことで「鬱症的な症状」を呈したと指摘している。

しかし、小川は、当時の立原を「鬱症的」とする根拠を、「盛岡での不毛の時間と、その時間に書き遺されたと推定できる詩的断

片は精神の沈滞をあらわにしている」と記しているのみで、立原の「鬱症的な症状」の特徴を具体的に論じているわけではない。

1982年に臨床心理士の山上栄子が発表した「立原道造論（2）—その出会いの在り方」の中で、立原晩年の日本縦断旅行を力動的な観点から分析して、次のような母子関係に注目した推論をしている。

①立原にとって、母親は不確かで不安をかきたてる存在であるため、恋人水戸部アサイに母性を求めつつも、水戸部との関係が現実味を帯びると立原自身の自立性が危うくなるために、すがりつきたいが逃げたいという葛藤が生じた。

②日本縦断旅行は、母の元から離れて旅立つことで母の注意を引くために行われた自虐的なもので、愛着行動を確かにしてそこから自立するために行われた。

文芸評論家の宇佐美斉は、1982年に発表した『立原道造』の中で、立原晩年の日本縦断旅行の動機について、水戸部アサイとの関係が現実的になることを恐れたもので、病状を無視した無謀な旅だったとしている。

基礎医学者の吉田繁は、1985年に発表した「立原道造と長崎旅行」の中で、小川和佑の記した立原道造の年譜（詳細不明）の中の、昭和11年9月21日の「雨の街を歩き発熱、発病の前駆症となる」という記載に基づいて、昭和11年末の寺田透との絶交は、立原の激しい行動の最初であり、結核が発病して気がイライラしていたためでないかと推測している。

また、吉田は1987年に発表した「立原道造と二人の少女」の中で、長崎で喀血後、江古田の療養所に入院した立原を水戸部アサイが昼夜付ききりで看護したが、「主治医であった東大病院の秋元寿恵夫の『若い水戸部アサイにだけは感染させたくない』という意向のもとに、日曜ごとの面会に制限される」、「長崎への旅も、東京の冬を避けて暖かい長崎でゆっくり静養させてやりたいという同僚の武 基雄の勧めが大きい」が、武のもう一つの考えは、

立原からアサイに結核が感染することを防ぐことであった」と、立原の療養生活においては、恋人・水戸部アサイへの感染予防という配慮がなされたことを指摘している。

小川和佑は、1989年6月に発表した『立原道造詩集』の中の「立原道造論」において、「立原の生命の急速な終焉は彼自身の病状に対する過小視によるものである」として、水戸部アサイからの聞き書きとして、「長崎旅行出発前に主治医の秋元寿恵夫の診断を受け、長崎旅行の可能性を問い、その許可を得ていた」という事実を挙げている。しかし、小川は、当時の立原の病状について、「長期の療養生活をするべき病状ではなかったか」という疑問を示しながらも、「秋元の診断と助言については資料は皆無であって、この点に関しては想像でしか論じられない」として、それ以上の議論を中断している。

比較文化史を専門とする福田真人は、1995年に発表した『結核の文化史』の中で、堀辰雄の結核への対応を論じるにあたって、「立原道造は自分の死の直前に堀の夫人多恵子に『僕も堀さんのやうに死と遊んでいたいんだけど』と言った」ということから、堀は、肺病により滅んでいく美しい人々、美しい肺病のイメージとして立原をモデルにしたと指摘している（福田は、立原が堀多恵子に対して前記の言葉を語ったとしているが、それは誤謬で、実際は、堀自身に立原が語り、それを堀から伝え聞いた多恵子夫人がエッセイのなかで触れたというのが正確な事実である）。

2、思春期の「神経衰弱」に関する研究

立原についての病跡学的な研究としては、結核以外にも、彼が14歳の時に陥った「神経衰弱」に関する研究が幾つか発表されている（表2）。

山上栄子は、1981年に日本病跡学雑誌に発表した「立原道造論（1）」の中で、立原の「神経衰弱」について、「基本的な所での不安や絶望はあるのだがそれが抗議や離脱の形をとらない」、「幻

聴様体験や希死念慮、悪夢体験等が彼を襲い、『夜ごと病犬のやうに』徘徊するまでになる」と、不安、絶望、幻聴や希死念慮などの症状を指摘している。

同じく山上は、1982年にやはり日本病跡学雑誌に発表した「立原道造論（2）」の中で、立原の「神経衰弱」について、「不眠、不安、幻聴様体験、相貌的知覚、悪夢体験、希死念慮等で彼を襲い、社会的不適応を余儀なくさせた」、「これらの病理現象は一過的な思春期危機にとどまるのではなく、孤独感、疎隔感、不安感は持続し、時に離人症状、めまい発作、ドッペルゲンガー体験等はなばなしい精神症状を表出させ」たなどと指摘している。

宇佐美斉は、1982年に発表した『立原道造』の中で、立原がパステル画や短歌にのめりこんだのは、観察することによって、行動からの疎外による心理的な傷や渴きを癒したのではないかと推測している。また、立原が昭和6年に発表した「鴉の卵抄(二)」の中の短歌「ライオンはみがきの 広告塔がぱちぱちしていた。そのとき、僕は、自己の存在を疑っていた」という一首を挙げて、「自意識というやっかいな代物を、このようなことばの世界で、解体処理することは一応の成功を見たときに、道造の神経症は病理学上もほぼ完全に治癒した」と指摘している。

小川和佑は、1983年に発表した「立原道造—予め設定された短い生涯—」の中で、立原の年譜の中の昭和4年(1929)3月から7月まで府立三中を休学したという記載から、当時の立原は「心身症」に陥っていたとして、「不眠や不安を伴う強い精神的抑圧による抑鬱症に患っていたものであろう」と推測している。

吉田繁は、1987年に日本医事新報に発表した「立原道造と二人の少女」で、立原が昭和9年、20歳の時に書いた物語『ホベーマの並木道』の記述について、『僕はちひさな手提鞆を持つたきり、この町からさうとほく離れていない E...川のほとりにある伯父の家へ行くことになっていた。(それは少女の死後、あまりがっかりしている僕へ母が処方してくれた手術だつた)』これは、疑いも

なく昭和4年3月の婦志子の死と道造の神経衰弱のことを述べている」と、従姉の立原婦志子が虫垂炎で急逝したことが、立原の「神経衰弱」のきっかけだったと指摘している。

このように、立原が10代に陥った「神経衰弱」については、1980年代に4人の研究者による研究がなされているものの、小川も指摘するように、この時期の立原については残されている資料が少ないこともあって、きちんとした資料に基づいて実証的になされた研究には乏しいのが、実情である。

すなわち、立原の思春期の「神経衰弱」に関しては、現在公けにされている資料から実証的に論じることには困難であるが、筆者(2013)は、立原が昭和3年10月に府立三中の学友会誌51号に発表した戯曲『勝敗』の中で、芥川龍之介をモデルとした主人公の自殺を「勝利」として肯定する自殺讃美の見解を述べていることから、この戯曲は、発表されて5カ月後に立原が陥る「神経衰弱」を予見したかのような作品で、当時から立原には死に対する親しみの感情があったことを示す作品であることを指摘した。

第4章：本研究の目的

以上の先行研究に関する文献的な検討で明らかになったように、これまで発表された立原道造の結核に関する病跡学的な研究では、立原にいつ結核という診断が下されたのかが明らかにされていないのみならず、立原の結核という病がいかなるもので、立原はそれをどのように受け止め、どう対処したかの実態について、具体的な論拠に基づいた検討がなされていないというのが実情である。

しかし、筆者は、全集に収められている立原の書簡や手記には、結核に関わる記述が数多く認められるほか、立原の友人や知人の回想録にも、立原の結核に関する証言が多数残されているが、これらの資料については、従来の研究ではきちんとした検討がなされていないことに、気がついた。

そこで本研究では、結核患者としての立原の実像をできるだけ客観的・実証的な資料に基づいて明らかにするとともに、立原の病と創作の関係についても病跡学的な検討を加えることを目的とした。また、その際、立原同様、抗結核薬が現れる以前、結核が不治の病として恐れられていた時代に結核を患った正岡子規や国木田独歩、長塚節、石川啄木、堀辰雄、梶井基次郎、新美南吉、宮沢賢治らと比較することで、立原道造の結核患者としての特徴を浮き彫りにしたいと考えた。

本論

第 1 章 研究 1 : 肋膜炎から結核まで (昭和 12 年 9 月 3 日～昭和 13 年 7 月上旬)

1、目的

2010 年に刊行された『立原道造全集 5』(筑摩書房)に収められている中村稔による年譜には、昭和 12 年 10 月に、「肋膜炎で発熱、安静を命じられ、以後 11 月上旬まで約 1 ヶ月間、自宅で静養する」という記載がある。この記載によれば、立原が肋膜炎という診断を受けたのは昭和 12 年 10 月のことであり、結核患者としての立原の人生もこの時点から始まったものと考えられる。

また、後述するように、立原の友人で医師でもある秋元寿恵夫の回想『三つの出会い』(1987)によれば、立原は昭和 13 年 7 月上旬に血痰を喀出して、東京帝国大学附属病院を受診したとされている。

そこで第 1 章では、立原の結核患者としての最初期にあたる昭和 12 年 10 月に肋膜炎と診断された前後から昭和 13 年 7 月に血痰を喀出して東大病院を受診するまでの 10 ヶ月間、立原が自らの病にどう対処したのかを検討する。

2、対象と方法

対象：昭和 12 年 9 月上旬から昭和 13 年 7 月上旬までに書かれた立原の全書簡 83 通と、この時期に書かれたエッセイ『追悼』、手記『火山灰まで』と『火山灰』、及び友人たちの証言や書簡。

方法：上記資料から、立原の肋膜炎にかかわる症状や、精神状態、死生観、創作ならびに対人関係などがうかがえる記載を抽出して、精神医学的な検討を加えた。

なお、議論を進めるにあたっては、便宜上、この 10 ヶ月の間に起きた大きなライフ・イベントによって、下記の三つの時期に区分して検討した。

- 1) 肋膜炎発症前後 (昭和 12 年 9 月～11 月 18 日)
- 2) 信州の旅館での火災遭遇後 (昭和 12 年 11 月 19 日～昭和 13 年

3月)

3) 職場の同僚・水戸部アサイとの交際後 (昭和13年4月以降)

略年譜1 ; 研究1の対象とした期間 (下記、網掛け部分)

大正3年	7月	東京都日本橋区橋町で生まれる。
大正8年	8月	22日、父親が死去。
大正10年	4月	久松尋常小学校に入学。
昭和2年	4月	東京府立三中(現、都立両国高校)に入学。
昭和4年	3月	22日、従妹の立原婦志子が虫垂炎で急逝。
		20日頃から同年7月まで「神経衰弱」で休学。
昭和6年	4月	第一高等学校理科甲類に入学。
昭和9年	4月	東京帝国大学工学部建築科に入学。
昭和12年	3月	東大を卒業。石本建築事務所に就職。
		夏頃、徴兵検査を受け、痩せすぎのため丙種不合格となる。
	10月	上旬、肋膜炎により発熱。安静を命じられ、11月上旬まで約1カ月、自宅で静養する。
	11月	19日、信濃追分油屋旅館の火災に遭遇する。
昭和13年	1月	芳賀檀から『古典の親衛隊』を献本される。
	4月	水戸部アサイと交際を始める。
	7月	中旬、「肺尖カタル」のために石本建築事務所を休職し、大森で療養生活を始める。
	8月	上旬、信州の追分に一カ月ほど滞在。
	9月	中旬から盛岡へ旅立つ。
	10月	19日、痔ろうの治療のため帰京。
	11月	24日、長崎への旅に出る。
	12月	4日、長崎着。翌5日夜に発熱して武医院に入院。
		13日、長崎を出る。
		14日、帰京。
		15日、東京帝国大学附属病院を受診。
		26日、中野区江古田の東京市療養所に入院。
昭和14年	3月	29日、病状が急変して呼吸困難で、息を引き取る。

3、結果

1) 肋膜炎発症前後 (昭和12年9月～昭和12年11月18日)

立原が肋膜炎と診断される直前の昭和12年9月上旬から、信州追分の旅館油屋で火災に遭遇する同年11月18日までのおよそ2カ月半に立原が書いた書簡は18通で、そのうち立原が自らの病に触れた書簡は8通あった。

この中で立原が初めて自らの健康に対する不安を表わすのは昭和12年9月3日の田中一三宛書簡で、そこには次のような健

康に関する不安が記されている。「僕には このごろわからなくなっている。僕の健康のことが…。あまり 自信なく いつかひびいりさうな身体を ときをり いたはりたくおもふ、しかしほんとうは いつでも すこし いじめてしまふのだが…」。

また、同日の生田勉宛書簡には、「もう僕の頭はからつぼだ。おそらく疲れが さうしているのだらう」と、疲労感とそれに伴う精神機能の低下が記されている。

これらの記載から、昭和 12 年 9 月初旬という、肋膜炎と診断されるおよそ 1 カ月前の段階で、立原は既に心身の疲弊感を感じて自らの健康状態に自信を失い、身体をいたわりたいと思いつつも実行できずにいる様子がかがえるが、杉浦明平（1988）も、立原が石本建築事務所に勤めてしばらくして、「建築事務所での席が冷房装置の直ぐ下にあって不快だといっているうちに、どうも夏風邪か肺尖カタルにかかったらしいと自ら語るの聞いたが、それが安静を要するほどの肋膜炎だった」と回想していることから、昭和 12 年夏以降、立原は、「夏風邪か肺尖カタル」という体調不良を自覚していたことがわかる。

さらに、立原の親友の生田勉が書いた日記（『杳かなる日の一生 生田勉青春日記』、1983）には、「立原が肋膜炎だというので見舞にゆく」と、10 月 8 日に立原から肋膜炎と伝えられた生田が、立原を見舞ったことが記されている。

したがって、立原が肋膜炎と診断されたのは 10 月 8 日以前のことと思われるが、この日記の中で生田は、「立原軽い肋膜炎、医者が来て水をとって行った」とも記しているため、当時の立原は「軽い肋膜炎」と言われながらも、胸水が貯留するような状態だったことがわかる。

この肋膜炎と診断された後に、立原が自らの症状に触れた書簡としては、10 月 8 日の松永龍樹宛書簡に、「あれからしばらくして病気になってしまひました 今はまだ病臥中です」とあって、肋膜炎と診断された後の立原は、昭和 12 年 10 月上旬には病臥し

ていた様子うかがえる。

また、10月12日の書簡には、「病氣していて、一週間あまりねて、ようやく起きられるやうになりましたので、ちよつとお返事します（略）まだまだ病氣のままですらさねばなりません。もうこれだけ書いてくたびれました」（深沢紅子宛）とあるため、この時点で既に一週間以上病臥していること、したがって病臥開始は10月5日以前であることや、10月中旬には幾分軽快したものの依然として易労感を感じていることがわかる。

さらに、10月14日には、「病氣してねています。このハガキもほんたうは禁められているのだが」（猪野謙二宛）とあって、10月中旬の時点では日常的な活動もかなり制限されていた様子うかがえる。

ただし、11月1日の書簡には、「秋といつしよに病氣して、ようやく快復期にはいったところ、もうすこし身体がしつかりしたら、南の方のどこかへ行かうとおもっている」（田中一三宛）、「九月の末から病氣して、一月近く寝てしまひました。このごろは起きている、ぶらぶらして いろいろな本をよんだりしてくらしている。もうすこし身体がしつかりしたら南のどこかへ行かうとおもっている」（杉浦明平宛）などと記されていて、11月初めには日中起きて読書ができるまでに回復し、南方へ行きたいという希望も持ちはじめている。

以上のように、昭和12年10月上旬（8日以後）に医師から肋膜炎と告げられた立原は、多くの友人に病氣の様子を伝える書簡を書いている。

しかし、これらの書簡のいずれにも、肋膜炎という病名や、臥床に伴う心理的な動揺は書かれておらず、症状も11月上旬には軽快したと記されている。

事実、生田勉が書いた11月4日の日記にも、「立原、経過非常に良好。医者に通っているという。いろいろなことをしゃべる」と記されていて、この時期の順調な回復ぶりがうかがえる。

また、立原は、これらの書簡では肋膜炎という診断には触れていないものの、堀辰雄には肋膜炎という病名が伝わっていたらしく、10月26日に堀辰雄が立原に宛てた書簡（堀辰雄：『堀辰雄全集8』、1979）には、次のような記載がある。「君が肋膜炎を患っている由、はじめて知ってびっくりしている、しかし水のたまる方なら質がいいだらう、僕も最初やったのがそいつだ、まあ僕みたいに呑気にそんな病気を愉しむやうにしながら癒すんだな、これなら僕も責任をもつておれの真似をしろと君にもすすめられる、まあお大事に」。

この堀の書簡を読むと、昭和12年10月時点での立原は、肋膜炎を病んで胸水がたまっているものの、病状については、堀から楽観的な助言を得ていたことがわかる。

なお、この時期の書簡には、死生観に関わる記述はないものの、この年の10月に発表されたエッセイ『追悼』（『四季』11月号（筑摩書房版『立原道造全集3』に収録））には、次のような、死に対する美意識が記されている。「『死ぬときは一人きりだ』といふパスカルの言葉を、ひよつとしたら、僕は辻野さんからお聞きしたのではなかつたかしらとおもふ。『旅の手帳』の一節に T・U 氏の哀しい死のことを書いた文章があつた。辻野さんとその頽廢の画家とは全く異質の芸術人ではあるが、人に知られないやうに秘められた辻野さんの死の瞬間は、『詩人の死ぬや哀し』と何かはつきり予前した芸術人の最後の美しい^{ポーズ}姿勢ではなかつたらうか」。

このエッセイは、立原が昭和12年9月9日に亡くなった辻野久憲への追悼として書かれたものであるが、ここには、「人に知られないやうに秘められた」死の瞬間こそが「芸術人の最後の美しい^{ポーズ}姿勢」であるという、自己の死を予知しながらもそれを他者へ伝えない姿勢こそが詩人として美しいという価値観が記されていて、その後の立原の自らの死に対する態度の予兆とも言いうる記載のように思われる。

2) 油屋火災遭遇後（昭和12年11月19日～昭和13年3月）

このように昭和12年11月上旬までは順調な回復ぶりを見せていた立原であるが、昭和12年11月19日、兄事していた堀辰雄や、堀の弟子である野村英夫とともに滞在していた信州追分の油屋旅館で、火災に遭遇する。

この火災時の体験について、立原は、火災から2日後の昭和12年11月21日に、4通の書簡を友人に書いている。

このうち、津村信夫宛の書簡には、「金曜日の午後三時に油屋が火事になり午後五時には灰となり みななくなり僕は命がたすかりました（略）二日ばかりぼんやりと まだ夢のなかかのやうに信じかねてくらしています」、「堀さんは無一物となり ソログループの少年英夫君は僕と一しよに煙のなかを逃げ そして逃げおくれた僕は 土地の人に救ひ出されたりしました」と書いているほか、田中香積宛の書簡には、「今の僕のすべての気分のもとになつている事件を知らせなくてはならない。あの油屋はどうに焼けてしまつているのだよ。僕が着いて四日目にとりよりの家の心ない火のために、おそろしい火事になつた」と記している。

また、神保光太郎宛書簡には、「十九日午後 油屋火災のために堀さんも僕も焼け出されました 美しい夢も思ひ出も あの古い立派な建物と一しよに灰になつてしまひ 哀しい！」と書き、小場晴夫宛には、「朝からつめたく風の吹く午後 ぼんやりと何か考へていたら 突然に火事ははじまり 煙のなかを右往左往し 二階おもての格子を切りやぶつて 辛うじて救ひ出され一せいに火を吐く青い龍・屋根・を見ているうちに 三百年も長く建つていた建物は三十分で焼けおちてしまひ 僕は 人生の哀しみをあたらしく感じた いま軽井沢の宿屋にて炬燵のなかで いまだにその出来事を信じかねないまま やうやく哀しみのなかから立ちなほらうとしている」と詳述するなど、この日の立原は、しきりに火事の悲惨さと恐怖を友人たちに綴っている。

しかも、「二日ばかりぼんやりと まだ夢のなかかのやうに信じかねてくらしています」、「逃げおくれた僕は 土地の人に救ひ出されたりしました」、「煙のなかを右往左往し 二階おもての格子を切りやぶつて 辛うじて救ひ出され」などの記述を見ると、立原にとってこの火災は、正に九死に一生を得たような危機的体験であり、数日間は茫然自失の状態に陥ったほど衝撃的な体験であったことがわかる。

立原はさらに、翌 11 月 22 日にも、杉山美都枝宛に、「もう油屋はなくなつてしまひました 予想されない死期に近い油屋のなかで 4 日ほどくらししたことが 不思議な夢のやうにおもはれます」と書き、およそ 1 カ月後の 12 月 14 日にも、土井治宛に、「僕は君にまつ先に知らせなくてはいけなかつたのかも知れない。追分のあの出来事の時僕は一番危かつた人間だといふことを。一切が僕のまはりでちがった悲しみの色を帯びている 僕は一度、他人の手でこの命を救ひ出された男だと、かぎりない羞恥が僕を噛む」と書くなど、火災の生々しい印象とその衝撃は、1 ヶ月後にまで及んでいる様子がうかがえる。

しかも、堀多恵子の回想『立原さんの思い出』(1983)には、「油屋さんの火事に遭ってから後、眠ると直ぐに火事の夢を見る、するともうこわくて目が醒めてしまつて、寝ることがとてもこわくなつてしまつた」と、当時の立原にはフラッシュバックを思わせる症状や睡眠障害があつたらしいことが記されているため、立原にとっての油屋炎上という事件は、危うく一命を取り留めた出来事として強い恐怖をもたらしただけでなく、フラッシュバックや睡眠障害などの PTSD 的な症状を引き起こした心的外傷体験とも言うべき出来事だつたのではないかと推測される。

一方、油屋火災直後から 11 月下旬までの書簡で肋膜炎に関わる記載があるのは全 6 通中 2 通のみで、しかも、11 月 21 日に田中香積に宛てた書簡には、「僕の病気の方はもう大丈夫らしい」と記し、11 月 27 日に松永龍樹に宛てた書簡にも、「僕は短かつた

美しい疲れと病ひの季節のをはりの二三日を享けとるために、何か装ひして、どこかに自由にでかけてみようとしています」とあるなど、この時期の立原は、PTSD 的な症状のほうに気をとられていたこともあってか、肋膜炎の方は寛解したと考えて、安心していたようである。

実際、神保光太郎の回想『立原道造の生涯—その覚書として』（1939）によれば、立原は10月初旬に石本建築事務所を休職したものの、油屋火災後の12月初旬には復職していて、一定程度の回復をみたようであるが、復職を果たしたこの12月に肋膜炎の症状について触れている書簡は全8通中3通である。

そのうち、12月15日の猪野謙二宛書簡に、「耐へられない このうすい空気は！」と、呼吸困難感が記されているほか、12月16日の小場晴夫宛書簡には、「疲れているのにもかかはらず、ペンをとらす」、「僕は 疲れている。何者にも」と疲労感が記され、12月下旬の臼井喜之介宛書簡には、「身体がわるかつたり、よくない出来事があつたりして、お手紙や詩集を頂き放しに過ぎてしまひました。京都へはまた行きたいけれども行かれさうもありません」と記すなど、身体症状については楽観的だった11月に比べると、12月に復職した後は、体調はそれほど良くなかった様子がうかがえる。

つまり、復職後の立原の体調はあまり良くなかったようなのであるが、こうした体調不良も反映してか、復職後の書簡で目立つのは、多数の友人たちに死生観を語るようになることである。

たとえば、昭和12年12月上旬の丸山薫宛の書簡には、死を厭い、あくまでも生きたいという思いが、次のように綴られている。「どんな意味でも、死にたくはありません。この夏以来、死が、大気のやうに僕をひたしています。そんなときに、僕は、ただ生きたいとばかりおもひます」。

この書簡を読むと、肋膜炎と診断されてからの立原は、漠然と死を意識して生きたいという思いを抱いていたものの、油屋火災

を経たこの時期になって、初めて「どんな意味でも、死にたくはありません」、「ただ生きたいとばかりおもひます」など、痛切に生きたいという思いを直截的に表現するようになったことがわかる。

また、12月15日に猪野謙二に宛てた書簡には、これから出版する2冊目の詩集に触れて、「中間者の書・暁と夕の詩を 僕を愛するすべての人（しかし僕はすでに彼らを拒絶した）に献ずる。『暁と夕の薄明の それぞれの中間としての夜と昼と、 生きたる者と死したる者との それぞれの中間としての 死人と 人間と。』」と記すなど、自分を生きている者と死んだ者の中間者として位置づけているが、この書簡には、「死の観念は すでに 生の姿にかさなっている。追憶のなかで死んだすべての風景が生きかへるのを見るときに 僕ら 現在の一切が死に行くのを見る。が、汝・死ぬなかれ と叫ばねばならぬ」と、死を切迫したものと感じつつも、その一方で死を拒絶するような心情も綴られている。

さらに、12月16日には小場晴夫宛の書簡で、「生への決意は死にひたされて僕らを包みつくして 永遠にながれる（略）かかる時間のうちに住む人間は おそらく 生きたる者と死したる者の中間者であらう」と、生への決意は生者と死者の中間にある者にこそ強いという持論を展開しているが、それと同時にこの書簡には、「僕は疲れている。何者にも。いつの間にか、僕は自分の晩年に就て 考へている僕を見出す、どんな陽気な問ひからはじまつても、僕は やがて 自分の晩年をロマンのなかに悲しく描きはじめてしまふ」と、自らの晩年を思いながら、疲労感や将来への悲観も記されている。

このように、肋膜炎を患った当初はそれほど死を身近かなものとしては感じていなかった立原であるが、油屋火災で死に直面してからは、激しい口調で死の恐怖を語り、「生きたい」という希望を直接的に訴えるとともに、自らを「生と死の中間者」と規定す

るようになっている。

これは、火災で九死に一生を得た立原が、自らの死を現実のものとして実感をもって受け止めるようになったためと思われ、自らを死に近い生と死の中間的な存在として位置づけることになっている。

翌昭和 13 年 1 月には 9 通の書簡を記しているが、そのうち身体症状が書かれているのは 3 通で、そこでは、「僕は 今 またかぜひいています」（1 月 4 日杉浦明平宛）、「行く約束ばかりして、今度はかぜひいて三日ばかりねて、またうそついてしまひました」（1 月 10 日野村英夫宛）と、「かぜ」と称する呼吸器症状のために病臥していたと記されているが、ここでも肋膜炎という言葉は使われていない。

また、1 月 19 日の中村整宛書簡では、「健康はもうそれらすべてと 労働に 耐へる。労働が義務へのよろこびであるときに、而も同じ瞬間に 僕は 怠惰な国土の光にみちた倦怠に 誘われる」とあるように、倦怠感を感じながらも、勤務に耐えうる状態であることを強調している。

つまり、昭和 13 年 1 月に書かれた書簡では、健康状態に関する記載は減り、症状は「かぜ」によるもので、労働に耐える状態であると、前年 12 月よりも楽観的になっている様子がうかがえる。

一方、自らの死生観や精神状態については、1 月 4 日の杉浦明平宛書簡に、「心身ともに疲れているといふ噂があるさうだが、こんなもの忘れも そのためかも知れない（略）この頃今の身で死んではやりきれないとしきりにおもふ。死にさうにもないが、やはり死にたくはないとおもふのである」といった疲労感や記憶障害とともに、「死にたくない」という思いも表出されている。

さらに、1 月 11 日の小高根二郎宛書簡では、「一羽の小鳥に すぎなくなった 僕のちひさい生命が 夜にだけ それを明るい夜にする ランプのそばで 生きることを かんがへました しかし それは 死なのではないでせうか」と、生と死を同等の

ものとみなす死生感も表明している。

そこには、生も死も同一のものと考えることで、死を受け入れやすいものにしたいという思いが働いていたと思われるが、同じ書簡の中には、「新しく生きたいと おもひます(略)僕は 肉体を拒絶する精神を持ちました しかし 大きなめぐりが来たのではないでせうか 観念化した肉体が 新しい生をいふときに！」と、自らの病める肉体を拒否して、新しい生を生きたいという思いも記すなど、生と死をめぐって様々な思いが立原の心中を駆けめぐっていた様子がかがえる。

そして、この昭和 13 年 1 月に、立原は、芳賀檀という友人から『古典の親衛隊』(1937) という本を献本されるのだが、この本が当時の立原に少なからぬ影響を与えることになる。

というのも、立原は 1 月下旬に芳賀宛に、次のような礼状を送っているからである。「どのやうにして 私があの御本をお受取りしたか あるひは おうけとりしつつあるか おそらく 御想像を超えていることでありませう、私自身にすら 量り知ることの出来ない感謝でいただきました(略)どこの深さで私は この御本をよんでいるのか—ただ ひとつの 大きな 世界との出会いに 驚きと悦びとの涙が溢れるばかりであります」。

ここでの立原は、「量り知ることの出来ない感謝」とか、「大きな 世界との出会いに 驚きと悦びとの涙が溢れる」など、最大級の賛辞をそえて礼状を書いているが、この『古典の親衛隊』がその後の立原に与えた影響を列挙すると、以下のようなになる。

(1)『古典の親衛隊』には、「人生は、騎士道である。各自は武装してあらねばならない」、「詩人は又騎士である」という表現があるが、立原が芳賀に宛てた礼状には、これに同調するかのようになり、「私もまたひとりの武装せる戦士！」という決意が書かれている。

(2)『古典の親衛隊』には、「ヘルデルリンの『危険のある所、救ふ者又生育す。』といふ言葉によつて明るくされた」という記載が

あるが、立原の礼状にも、「『危険のある所、救ふ者又生育す。』とは何といふ美しい言葉なのでせう」と、芳賀によって引用されたヘルダーリンの「危険のある所、救ふ者又生育す」という言葉に賛意を示す表現がある。

また、2月上旬に書かれた杉浦明平宛の書簡にも、「『危険のある所、救ふ者また生育する。』と。これがけふ 僕の詩を書き得る唯一の地盤だ」と書いて、『古典の親衛隊』の中の「危険のある所、救ふ者又生育す」という言葉に、自らの創作の拠り所を見出している。

すなわち、この時期の立原は、『古典の親衛隊』の中のヘルダーリンの言葉に触発されるような形で、人生の危機的な体験こそが創作の源になりうるという、ある種の病跡学的な考え方をしていることがわかる。

(3)『古典の親衛隊』では、「『何の為に』又『どこへ?』 Wohin?を苛責なく訊ねなければならない」、「『どこへ行くのか。』を私達は問はねばならない」など、「どこへ?」という問いが重視されているが、立原も上記杉浦宛の書簡に、「詩は つねにひとつの魂が『どこへ?』と苦しみを以つて 問ひつづけるところにある」と、同趣旨のことを記している。

(4)『古典の親衛隊』には、「文とは歴史と対決するものであり、又自己を省る告白であり、自分より上のものとする告白でもある」という告白重視の文学論が書かれているが、上記杉浦宛の書簡にも、「けふ 僕は 真に詩に値するものが ただ美しい魂の告白にあらねばならないと 知る」と、やはり告白を重視する言葉が記されている。

(5)『古典の親衛隊』には、カロッサの文学について、「死は生に、恐怖は喜悦に変様せられている」という評価が記されているが、立原の2月12日の神保光太郎宛書簡にも、「死は生であつたのです」「すでに一切が 価値転換し(略)僕は 能動態の形で考えています」と、「死は生であつた」や「一切が 価値転換」とい

う類縁の表現が見られる。

このように、昭和 13 年 1 月下旬から 2 月にかけての立原の書簡には、『古典の親衛隊』の影響を受けたと思われる表現が数多く認められる。特に、立原が、『古典の親衛隊』と出会ったことを契機に、時代の危機と自分自身の肉体的な危機を重ね合わせるような形で、自らを「騎士」と称して戦う姿勢を示し、「危険のある所救ふ者又生育する」というヘルダーリンの言葉に従って、人生の危機を創作の源と考えることで乗り越えようとしていることは、立原の病跡学的な見解として注目される。

一方、立原の肋膜炎に関連した身体症状については、その後、昭和 13 年 2 月から 3 月までに書かれた 20 通の書簡のうち、およそ半数の 11 通に記されている。

まず、2 月上旬の杉浦明平宛書簡には、「ただ しづかで しづかで 自分の息や胸の音が 感じられききのがされないやうな張りつめた心なのだ」とあって、張りつめた精神状態の中で自らの呼吸音を意識している様子がうかがわれる。

また、2 月 8 日の土井治宛書簡に、「外科手術や風邪のために 1 週間あまりいやな日をおくっています」と記しているほか、2 月 12 日の田中克己宛書簡には、「僕は また十日ばかり 外科手術や風邪のために やすんでしまひました 小高根さんと冬の夜にお会ひしたときも風邪をひいていました」とあり、2 月 12 日の神保光太郎宛書簡にも、「おかぜの由 いかがですか 僕は もうよくなりました 外科手術をしたあとだつたりしたので わづかな熱が大きくひびいたのでせう」と記すなど、手術や風邪のために会社を休まざるを得ない状態になっている。

なお、土井宛の書簡の中で「外科手術」というのは、『立原道造全集 5』の編者の宇佐美斉（2010）によれば、左頬脂肪腫の摘出術のこととされている。

そして、職場復帰を果たした 2 月 12 日の小場晴夫宛書簡には、「けふ 久しぶりに つとめたせいかわれがひどく 一切の思

考する力は 休んでしまった！」と、久しぶりで勤務をした疲労感が記されている。

さらに、3月22日には、杉浦明平に宛てて、「微熱と疲労感のなかに、つとめにかよっている(略)やすまうとおもふが、やすむことも出来ない(略)何かしら無理な、肉体を弱らせる方向につづいている、自分の生き方をかへなくては！」と、微熱や倦怠感といった体調不良を訴えながらも、休職したくてもできないと嘆くなど、病状が進行している様子が記されているほか、同じ3月下旬の土井治宛書簡にも、「僕は1週間ばかり かげで 咳が出てよわっている いそがしいのでつとめはやすめない ゴホンゴホンと咳をしては毎日毎日たらしている」と、依然として改善されない咳の症状が記されている。

なお、昭和13年に入ってから、油屋火災によるPTSDを思わせる精神症状が散見され、この年の1月から2月にかけての書簡には、「私が不幸な意志のために嘗て招待された高原での孤独な火のした祝祭の追憶が、私を最早眠れなくした」(1月下旬芳賀檀宛)という火災の記憶に伴う睡眠障害のほか、「あの出来事のあとに 今になつてもまだなほりきらない 僕の神経の疲れがする幻覚かも知れません」(2月12日田中克己宛)と、火災後3カ月になったこの時点でも、「神経の疲れ」があると記されている。

この時期の立原は、それまで故郷のごとく感じていた信州追分という土地についても、「秋の午後、すべてが恐怖のために結晶してしまふやうな瞬間に、孤独な火が不吉な祭典をしたあと、僕はもうあの村をふるさとだつたとはいへないのです」(2月中旬深沢紅子宛)と記すなど、「すべてが恐怖のために結晶してしまふやうな瞬間」を経験してからは、それまで創作の心象風景であった追分村を「ふるさとだつたとはいへない」と語るほど、油屋火災の影響は尾を引いていたことがわかる。

そして、3月下旬の高尾亮一宛書簡には、昨年9月以降の病の日々を振り返った、次のような記載がある。「去年の9月から11

月までの間病気で寝ていました。それから 11 月 19 日に、転地先の信濃追分油屋が火事になり、焼け出され、あまり驚いたため病気はなほり、そのかはり別の病気になりました。最初の病気は呼吸器をわづらひ、別の病気は神経系統です。そして風邪は、1 月 1 日から 5 日ばかり、2 月 1 日から 10 日ばかり、今また今年 3 度目の風邪で、ノドがいたくて困っています」。

ここには、油屋の火災に遭遇して神経系の病が生じたために、むしろ呼吸器の病気は改善したと記されている。

これは、この時期の立原には、油屋火災による PTSD 的な症状の方が、肋膜炎に伴う身体症状以上の重要性を帯びていたことを示唆する記載であるが、その一方で、昭和 13 年 1 月からは「風邪」と称する呼吸器症状が慢性化している様子もうかがえる。

なお、昭和 13 年 2 月以降の立原の自らの感情に関する記載には特徴があつて、「僕は 日常の 消える動作に 微笑に 祭典を営まうとする、むしろ悲哀の上に一」（2 月上旬杉浦明平宛）や、「何かしらなくなつたものことから あなたにおはなしはじめる」（2 月 12 日田中克己宛）など、この時期の書簡には、否定的な感情をもとに出発するという、『古典の親衛隊』の影響を受けたような表現が見られるようになる。

また、昭和 13 年 1 月下旬から 3 月までの書簡に書かれた死生観にも、『指導と信徒』が 私を生かしてくれた日のあと、私は突然に暴力的に死なねばならなかつたのです、 私は ふたたび、限界なしに、新しい生にいそぎます」（1 月下旬芳賀檀宛）と、生から死に行き着き、その死から新たな生を求めるという経路や、「僕は深い内部で ただ 時間とともにいる、 人間として、死なねばならない 生きた人間として一」（2 月上旬杉浦明平宛）と、死を不可避で身近なものとして受け取めるような死生観も記されている。

さらに、2 月 12 日神保光太郎宛書簡では、死や危険というものについて、『墓のある所にだけ復活がある』とニイチエがうたひ

『危険のあるところ、救ふ者又生育する』とヘルデルリンがしるすとき 僕は『無限の断念』を 永遠性への騎士の決意を知りました、「ここに 僕の生はあたらしい端緒をひらかなくてはなりません すでに限界は出口であり 死は生であつたのでした」、「限界のなかで勇敢さを勝ち得 そして限界がひとつの深みにかはるとき、飛翔のうちに不死が得られると おまへはいふのか」というような、死や限界を自らの深みとして変える時に不死が得られ、「死は生だ」というような、死を新たな生への出発として肯定的に捉える死生観へと変化している。

このように、昭和 13 年 1 月下旬から 2 月にかけての立原は、『古典の親衛隊』の影響下に、死や悲哀といった一般には否定的に捉えられているものを肯定的に受け止めるという、いわば障害受容的な価値観の転換を行っているが、特に、昭和 13 年 2 月中旬に深沢紅子に宛てた書簡には、『古典の親衛隊』から受けた影響を総括する形で、次のように記している。「美しいもののためには、もう、たたかひをおもはねばなりません。僕らの一人が、それを古典の親衛隊と名づけました。いちばん美しいもののためには、死ななければならない、その光栄と誇りのために！」。

これは、立原が、美のために闘い、美しいものとの引き換えの死という形で、死の受容に至ったことを示唆する記載であり、この時期の立原の死に対する思索が格段の深まりを見せたことを示すものである。

3) 水戸部アサイとの交際 (昭和 13 年 4 月以降)

『立原道造全集 5』(2010)に収められている中村稔の年譜では、昭和 13 年 4 月上旬に、立原が、石本建築事務所のタイピストとして働いていた水戸部アサイと愛し合うようになることとされているが、水戸部と交際を始めてからの立原の書簡には、次のような変化が現れる。

まず、身体症状に関する記載としては、4 月 14 日に「僕は非常

に健康になった。会って、いろいろはなしをしませう」(杉浦明平宛)とあって、健康状態の改善が記されている。

また、この時期の書簡でそれまでと異なるのは、直前まであれほど書かれていた死生観に関する記述がほとんど見られなくなることで、その代わり、それまで書かれたことのない新しい仕事や旅への夢、健康な肉体を持つ夢想などが目立つようになる。

たとえば、4月上旬に深沢紅子に宛てた書簡には、「どこかとほくとほく、知らない光と色とにほひの世界へ行きたいと灼きつくやうにねがひます(略)あたらしい夢が、もつと慕はしいのです。僕の身体も心も健康になり、清らかになる世界、だれもがありがたうとほほえむだけの世界」と記されているほか、4月27日や5月29日の書簡にはそれぞれ、「もう、とほい思ひ出はいらなくなつた。夢がひとりでやつて来て、そのたそがれをやさしくする」(土井治宛)、「僕は 夕ぐれに 燈を ともすときに 燈が片隅に つくりだす世界の幸福を 信じたいとおもひます」(笹川美明宛)とあるように、この時期の立原は、過去を振り返るよりも未来の希望に満ちた書簡を書くようになっている。

さらに、6月15日の武基雄宛書簡には、「君の病ひがあつたやうに美しい日々を君に与へていること、僕もうれしくおもふ」、「幼年といふ時間の位置が君にいまどんなにはたらきかけているか。(略)君の場合のやうに、心が深い淵をひらく。そのとき、キラキラする幼年、その秘密に僕はたいへん近い」と、病める日々こそが幼年時代のような感受性を与えてくれると、ここでも病に肯定的な意味を見出す病跡学的な認識を述べている。

これらの書簡の内容の変化や、病に対する肯定的な感情の背後には、『立原道造全集5』の宇佐美斉の指摘(2010)にあるように、立原にとっては初めての現実的な女性との関わりとされる水戸部アサイとの交際が影響していたものと考えられる。というのも、立原は、6月27日の土井治宛書簡に、水戸部のことを、「僕のなかには優しい小鳥が住んでいます。ピンク色の微笑や草よりも

つよいにほひのする髪の毛を持つていて、かの女は僕によいものを与へ、またよいものを奪ひ去つて行きます」と記しているからで、こうした水戸部アサイとの交際によって、それまで彼の思索の中心を占めていた死生観の代わりに、新しい旅への夢想や穏やかで優しい感情が書かれるようになったものと思われる。

すなわち、水戸部アサイとの交際が、それまで生と死を同一視するような状態にあった立原を、未来の希望や夢を語り、心身ともに健康に生きて行こうとする現実的な前向きな姿勢にさせたと推測される。

しかし、その一方で、前記 5 月 29 日の笹川美明宛書簡には、「僕は 夕ぐれに 燈を ともすときに 燈が片隅に つくりだす世界の幸福を 信じたいとおもひます これを言ふためには僕は たくさんの あれを捨てなくてはなりませんでした そして この言葉も 僕とおなじに絶えず 脅かされるでせう」とあり、また、6 月 14 日と 15 日には、自分同様に病氣療養中の武基雄に宛てて、「このごろ身のまはりにはさわがしい 何かしらおちつかないで 君にもゆつくりとたよりがかけないで くさっている(略)君の病の方が僕をかへつてなぐさめてくれるくらいだ あげくれは かなしい色ですぎてゆく」、「あの日の安心にくらべて、たいへんにたよりなく、切破つまっている。だがこの種類の友情を、僕に危機だといはないでくれたまへ。何よりも先にこの傷の位置を僕がよく知っている」とも書かれているため、本当に精神が明るいというよりは、特に水戸部には無理に明るさを装っているようなところも見受けられる。

この時の立原は、新しい恋人を前に、「つよい男であることを要求されている」(6 月 14 日武基雄宛)と感じていたものと考えられる。

4、考察

以上、立原が肋膜炎と診断されてから血痰を喀出して結核と診

断されるまでの 10 カ月間の書簡を検討して、今回の研究で新たに判明した結果をまとめると、次のようになる。

1) 立原は、肋膜炎と診断される約 1 カ月前の昭和 12 年 9 月初旬には既に自らの体調に不安を感じており、立原の結核患者としての人生は昭和 12 年 9 月から始まった可能性がある。

2) 肋膜炎と診断されたのは昭和 12 年 10 月 8 日前と思われるが、それから 1 カ月間、立原は、多くの友人に病気の様子を伝える書簡を書いているものの、肋膜炎という病名や臥床に伴う心理的動揺については書かれていない。

3) 昭和 12 年 11 月 19 日に油屋火災に遭遇してからは、睡眠障害やフラッシュバックなどの PTSD を思わせる症状が出現するとともに、肋膜炎による身体症状は改善した様子が見られるが、これは立原が当面の精神症状に注意関心が向くあまり、身体症状については意識する余裕がなくなったためと考えられる。

4) 昭和 12 年 12 月上旬に復職後、身体症状は、復職前に比べて悪化し、死を厭って生を願う気持ちが書簡中に表現されるようになるとともに、自らを「生と死の間者」と規定したり、生と死を同等のものとみなすなど、死との心理的な距離を縮めている。

5) 昭和 13 年 1 月下旬に芳賀檀から献じられた『古典の親衛隊』を契機に、立原は、死を肯定し、死から始まる生という概念を打ち出すことで、死を受容しようとしている。

6) 昭和 13 年 4 月に同じ職場の水戸部アサイとの交際を始めてからは、死生観に関する記載はほとんどなくなり、それに代わって新しい仕事や旅の夢、健康な肉体を持つ夢想など、現実の中で生きる喜びが記されるようになっている。

これらが、昭和 12 年 9 月から昭和 13 年 7 月にかけての今回の検討を通して明らかになった肋膜炎患者としての立原の姿であるが、これらの結果に基づいて、以下、当時の肋膜炎という病気のイメージと、立原の病跡学的な認識という観点を中心に検討を加える。

1) 肋膜炎のイメージ

昭和 24 年 3 月に刊行された隈部英雄の『結核の正しい知識』（1949）によれば、肋膜炎を病むことが結核の初期症状であることは、この本が出版される 20 年近く前に小林義雄が明らかにしたとされているが、筆者が調べところ、昭和 6 年に雑誌「結核」に発表された小林義雄の総説「『ツベルクリンアレルギー』ト肋膜炎」（1931）がこれに該当すると思われる。

また、隈部によれば、昭和 24 年当時も、肋膜炎と結核の発病は違う意味で用いられていて、肋膜炎は、結核に感染してはいるものの、あくまで一過性のもので予後は良好と考えられていたとされている。隈部は、「肺に空洞ができるか、できないかが、結核症という臨床的の病気になるか、ならないかの境目です。感染にひきつづき、発病して結核になるか、ならないかの問題も、最後はここに戻ってくる」とも記しているため、立原が生きていた昭和 10 年代において、肋膜炎は、結核に進みかねない危険性を帯びた状態ではあるものの、あくまで治癒可能な初期的な病と考えられていたことがわかる。

その一方で、新美南吉が昭和 11 年に書いた『帰郷』（1980）という小説には、肋膜炎で療養のために帰郷して、「もうほとんどいいのだ」と言う息子に対して、両親は、「肋膜炎がそんな生やさしいものでないことは彼らは眼で見て知っていた。炭や皿を売る家の長男は町の郵便局の電信技師であったが、去年の秋三月ばかり病んで死んでしまった。その弟が今年の秋はやられたが、これも噂はもう死を待つばかりだ」と不安になったとされているため、昭和 11 年当時、世間の一部には、肋膜炎は恐ろしい死病というイメージを持つ人もいたことがわかる。

以上のような状況を踏まえて、立原の言動をみると、昭和 12 年 10 月に肋膜炎と診断されてからも、病気や臥床に伴う心理的な動揺は書かれていないことや、堀からの助言も肋膜炎に関しては楽観的であるなど、この時期の立原は、当時の一般的な常識に従う

形で、自らの肋膜炎も予後良好な疾患としてみていたために、書簡の記載も比較的楽観的になったものと考えられる。

2) 立原の病跡学的な認識

上記のように肋膜炎と診断されても楽観的だった立原であるが、油屋で火災に遭遇してからは、迫りくる死に直面した恐怖を多数の書簡に記すようになる。そんな立原に大きな影響を与えたのが芳賀檀から献じられた『古典の親衛隊』である。

これまで、立原と芳賀の関係に関しては、芳賀は当時右傾化した人物の代表的な存在であったために、杉浦明平が、1950年に発表した「立原道造における進歩性と反動性」の中で、立原の右傾化という観点から批判的に論じているのをはじめ、両者の関係は否定的な立場から論じられることがほとんどであった。

また、1994年に坪井秀人は、「芳賀の口吻が『別離』『風立ちぬ』そして『何処へ？』において本歌取りされていることは間違いない」と指摘し、2012年には名木橋忠大も、「立原は芳賀への接近によって、古典世界との交感たるべき本歌取りを、未来への（『以上へ』の）能動的行為に置き換え、『出発』の一形態として発現させていた」と、立原と芳賀の関係を本歌取りという観点から論じているが、『古典の親衛隊』の中の言葉が、立原の疾病観や病跡学的な認識に影響したことを指摘した研究は、これまでに見当たらない。

しかし、『古典の親衛隊』の中の「危険のある所救ふ者また生育する」というヘルダーリンの言葉をヒントに、立原は、油屋火災によって死に瀕した体験も創作の源にしようという肯定的な意味を見出しているほか、中村稔の年譜（2010）によると、肋膜炎を発症する直前の昭和12年夏の徴兵検査で丙種不合格（身長175cm、体重49kg）となった立原が、病を患いながらも「救ふ者」となって創作をすることこそが、詩人としての戦いだと思うなど、『古典の親衛隊』によって得られた病跡学的な価値観で、立原は油屋火災によるショックから立ち直るきっかけを得たと思われ

る。

すなわち、立原は、油屋火災による死の恐怖に直面し、PTSD 的な症状が出現する中で、『古典の親衛隊』によって病跡学的な思想を知ることによって一定の心理的安定を得たものと考えることができる。

第2章 研究2：結核診断時の医師による回想録 (昭和13年7月上旬～同年7月20日)

1、目的

立原の結核に関する医師側の資料はほとんど公けにされていないこともあって、医学的な資料に基づく立原の病跡学的な研究は、これまでなされてこなかったというのが実情である。

事実、立原に関する最も詳細な年譜である小川和佑の年譜（1989）でも、結核発症時の状況については、出典が明示されないまま、昭和13年の「7月20日石本建築事務所を病氣休職、下旬、魚眠洞に移り静養」、「8月 医師より肺尖カタルと診断され、一か月の安静を命じられる」と記されているのみである。また、山上栄子（1982）、吉田繁（1985）、杉浦明平（1988）、田代俊一郎（1989、2016）、郷原宏（1997）らの研究者が参照している年譜も、上記の小川の年譜か、1973年刊行の角川書店版『立原道造全集』に掲載された鈴木亨の年譜のいずれかで、その鈴木亨の年譜の記載も、結核発症時の状況については立原が友人に宛てた書簡に基づく、次のような簡単なものである。「21日、事務所を一か月ほど休みたいと、石本喜久治に突然申し出る（書簡、生田勉宛）ただし、当時彼は医師から肺尖カタルと診断され、一か月の安静を命じられていた（書簡、8月1日・書簡深沢紅子宛）というから、その申し出は必ずしも思いつきの、唐突なことではなかったのかもしれない」。

こうした記載から、立原は昭和13年7月20日もしくは21日に肺尖カタルという診断で休職したらしいことまではわかるが、2010年9月30日に筑摩書房から出版された『立原道造全集5』に掲載された中村稔による最新の年譜における昭和13年7月21日の記載には、次のように書かれている。「石本喜久治所長に申し出て事務所を休むことにする。『自然に、唐突に、それを喜久治先生のまへでしやべりはじめていた』と同日の生田勉宛書簡で知らせている。8月1日の深沢紅子宛書簡によれば、当時医師から肺

尖カタルという診断をうけていたので、申し出は唐突であったかもしれないが、それ以前に十分に考えていた期間をおいた上での決心であったと思われる」。

すなわち、2010年に刊行された最新の全集における中村の年譜にも、小川や鈴木の年譜の内容を超える新たな事実の記載はなく、やはり肺尖カタルという診断にとどまっている。

もっとも、この『立原道造全集5』（2010）の604ページにある昭和13年8月1日の深沢紅子宛書簡に関する解題には、「7月中旬に血痰が出たという立原の病状を案じた一高文芸部の先輩で医師でもある秋元寿恵夫の計らいで、東大病院で長畑一正医師と吉利和医師の検査を受け、肺結核と診断された。本来ならば入院が必要であったこの病を『かるい肺尖カタル』と受け止めた立原の認識は、いかにも楽観的に過ぎたと言うべきだろう」と記されているが、この宇佐美斉による解題でも、その出典は明らかにされておらず、当時の詳細な状況は不明のままである。

このように立原の結核発病当時の状況については不分明な部分が多いのだが、筆者は、1987年3月に麦書房から出版された雑誌『風信子；立原道造を偲ぶ会会報第6、7輯』に掲載されている秋元寿恵夫の『三つの出会い』という講演録の中に、立原が結核と診断された当時の事情が記されていることを確認することができた。

秋元はこれまで立原の主治医とされてきた医師であるが、秋元が1985年3月31日に東京都中央区立日本橋公会堂で行ったこの講演では、立原の結核発症当時の状況が、友人であると同時に医師でもあるという秋元の視点から具体的かつ詳細に述べられている。しかも、今回発掘した『風信子；立原道造を偲ぶ会会報第6、7輯』という雑誌は、国会図書館や全国の大学図書館、都道府県立図書館などにも所蔵されていない稀少誌であり、筆者が調べた範囲でこの講演録に言及しているのは、唯一、小泉美佳の『見開かれた眼』（2001）の中の、「昭和13年7月、立原は職場を休

職し日常の外に投げ出される舞台背景を創り上げる。この時、医師から肺結核と即刻安静の診断結果を下されたにも関わらず、8月、療養を理由に信州へ向けて旅立つ」という文章の参考文献として、「もうはっきり左の肺葉と右の肺の上部に大きな空洞がある、とにかく即刻安静にしなければいけないと、肺結核の診断結果を言い渡された」と引用されているのみであるため、本章では、秋元の『三つの出会い』の記述を中心に、病跡学的な検討を加える。

なお、秋元は昭和 13 年に東京帝国大学医学部を卒業した医師であるが、『風信子；立原道造を偲ぶ会報第 6、7 輯』では、秋元のことを次のように紹介されている。「秋元さんは明治 41 年生れで、昭和 5、6 年度の文藝部委員を勤められ、立原の持込んできた小説『あひみてののちの』の才能をいち早く認めた方です。東大医学部を卒業後、病体生理学を専攻する一方、ローザ・ルクセンブルグの『獄中からの手紙』（岩波文庫）などの翻訳を世に送っています。また日吉の秋元邸は立原さんの設計によるもの。詩人夭折の原因となった疾患について苦慮されたと伺っています」。

秋元は、立原が設計した家に住んでいた医師でもあったのである。

2、対象と方法

対象：秋元寿恵夫の講演録『三つの出会い』。

なお、この『三つの出会い』は、『風信子；立原道造を偲ぶ会報第 6、7 輯』の 21 頁から 26 頁にわたって掲載された、字数にしておよそ 6300 字、原稿用紙にして 16 枚程度の回想である。

方法：『三つの出会い』の記載の中から、立原の結核に関わる記述や、立原がどのように結核という診断に対応したかが記された記述を抜粋・整理して、立原が結核と診断された前後の状況を検討した。

略年譜 2 ; 研究 2 の対象とした期間 (下記、網掛け部分)

大正3年	7月	東京都日本橋区橋本に生まれる
大正8年	8月	2日、父親が死去
大正10年	4月	久松尋常小学校入学
昭和年	4月	東京府立三(現、都立両国)高校入学
昭和年	3月	2日、従妹の立原婦志が虫垂炎急逝
		2日頃から同年月まで「神経衰弱」休学
昭和年	4月	第一高等学校理科甲類
昭和年	4月	東京帝国大学工学部建築科
昭和年	3月	東大を卒業。石本建築事務就職
		夏頃徴兵検査受け、痩せすぎのため2種不合格なる
	10月	上旬肋膜炎よ発熱安眠命じられ1月上毎で約1カ月、自宅で静養する。
	11月	1日、信濃追分油屋旅館災に遭遇する。
昭和年	1月	芳賀櫓に古典の親衛隊を献本される
	4月	水戸部サイを隣始める。
	7月	中旬「肺炎のため石本建築事務疎職、大森で療養生を開始する。
	8月	上旬信州の追分一カ月ほど滞在
	9月	中旬から盛岡へ旅立つ。
	10月	1日、痔ろうの治療のため帰京
	11月	2日、長崎への旅に出る。
	12月	4日、長崎着翌5日夜に発熱して武医院入院
		1日、長崎を出る。
		1日、帰京
		1日、東京帝国大学附属病院
		2日、中野区江古の東京市療養所入院
昭和年	3月	2日、病状が急変して呼吸困難、息を引き取る。

3、結果

秋元の『三つの出会い』には、秋元が自宅の設計を依頼してからおよそ3カ月後の昭和13年7月上旬に、立原の家を訪れた時の様子が、以下のように記されている。「その前の日ですか、血痰が出たと憔悴しきって何を私が話かけてもろくに受け答えができない、元気もない、ぐったりしているのに驚きまして、ともかく一刻も早く診察を受けるように話して、彼が嫌がるのを無理矢理に診察させたんです」。

この記載によれば、この時の立原は、前日に血痰を吐いたことに動揺して、その事実を他者に伝えようとせず、また、病院に行

こうともせず、一人自宅で憔悴していたことがわかる。

秋元は、そんな立原を受診させた経緯について、「私は昭和 13 年に卒業して、臨床には行かずに基礎医学に進んで血清学教室にいたんですが、同期生に柿沼内科の長畑一正君と吉利和君（現在は浜松医大の学長）がいましたので、この二人に頼んだわけです」と記している。

こうした記載を見ると、これまでは秋元が立原の主治医とされてきたが、実際は、秋元は血清学を専攻していた基礎医学者であったために、立原を診たのは、『立原道造全集 5』の記載にある通り長畑一正と吉利和という二人の東大病院の内科医だったことがわかる。

秋元はまた、立原の診察が東大病院で行われた時の状況を、次のように回顧している。「7月の中旬だったと思いますが、大学の第二食堂というところで待ち合せて、その時は偶然だったのか、杉浦明平君も一緒だった。その頃の大学病院は大正 14 年とは違ってレントゲン検査も喀痰検査もやっていたので、それをお願いして帰りました」、「結果は 3 日後というのでまた長畑君のところ聞きに行きますと、もうはっきり左の肺葉と右の肺の上部に大きな空洞がある、とにかく即刻安静にしなければいけないと、肺結核の診断結果を言い渡されたわけです。入院という言葉はなかったと思いますが、入院が必要だったんです」。

すなわち、昭和 13 年 7 月の東大病院でのレントゲン検査や喀痰検査などの結果、立原には、両肺に大きな空洞のある肺結核で入院が必要という診断が下されたのである。

こうした結果を受けて、秋元は立原に入院を勧めたが、それに対して立原は、次のような行動をとったという。「日本縦断旅行と言って、深沢紅子さんの盛岡とか北九州の方まで出掛けてしまいました。(略)入院しなければならないという私の忠告、サディションは空耳で、旅に出ちゃったわけです。それで 12 月、長崎でまた喀血して入院」。

東大病院の医師の判断は即刻入院して安静を要するというものだったのに対して、立原は、秋元の忠告を無視する形で旅行を強行し、その挙句、結核と診断されてから5カ月後には旅先の長崎で咯血して入院するという事態に立ち至っているのである。

こうした当時の事情を踏まえて、秋元は、立原が結核と診断された後の昭和13年9月から12月にかけて敢行したいいわゆる日本縦断旅行については、次のような感想を述べている。「何かそれには死を急いだという印象があります。もっとも死を急いだと申しましても、覚悟の自殺というのとはちょっと違って、あの旅によって肺結核の症状が急速に進んだということですね」。

後年、「無謀な旅」(宇佐美斉、1982)とか「自虐的」(山上栄子、1982)と評される立原の日本縦断旅行は、当時の医師にも「死を急いだ」という印象を与えるものだったのである。

その一方で秋元は、結核に対する当時の医療状況を、次のように説明している。「現在のような化学療法剤もありませんし、ただ大気療法、開放療法といえますか、窓を明け放して安静に寝ているだけなのです。私が力を尽くしたいとしてもどう仕様もないことで、肺結核と診断された時、彼の死はもう決定されたと言っていっくらいで、彼はそれをどのように受け止めていたのでしょうか」、「結核療養所の悲惨な一日一日が思い出されて、立原君がどんな思いで息を引き取ったかと胸がつまるような思いがいたします」。

秋元は、立原の結核に「手をこまねいているより仕方がなかった」当時の医療事情を、悔恨の情を込めて語り、立原が結核と診断された時点で、その予後は不良なものであると予見できたとしているのである。

4、考察

今回発掘した資料『三つの出会い』によって、立原が結核と診断された当時の事情で明らかになったことは、以下の通りである

。

1) 立原は昭和 13 年 7 月上旬に血痰を喀出したが、血痰喀出後も、誰にも相談せず、また、病院にも行こうとせずに自宅で憔悴していた。

2) 昭和 13 年 7 月中旬に秋元の説得で東大病院を受診した立原は長畑一正と吉利和によって診察されて、レントゲン検査と喀痰検査が施行された。

3) 検査から 3 日後、左の肺葉と右肺上部に大きな空洞がある結核と診断された。

4) 秋元は立原に入院を勧めたが、立原はそれには従わずに日本縦断旅行を強行し、その結果、結核は悪化した。

このような秋元の回想に基づくと、これまで定説とされてきたことには少なからぬ修正が必要であることがわかる。

たとえば、昭和 13 年 11 月 24 日から行われた長崎への旅について、小川の年譜（1989）には、「主治医で東大医局員の秋元寿恵夫の診断を受け、旅行の許可を得る」と書かれているし、2008 年 12 月に刊行された田代の『立原道造への旅—夢はそのさきにはもうゆかない』にも、この記載がそのままの形で引用されている年譜を掲載しているが、秋元自身の回想によれば、秋元は立原の主治医でもなければ診察もしておらず、旅行に対しても否定的な態度をとっていたというのが事実のようである。

なお、小川はこの年譜の記載について、1989 年 6 月刊行の『立原道造詩集』の中で、「水戸部アサイよりの聞き書き」とであると記しているから、立原は水戸部に対しては、事実と異なる説明をしていた可能性もある。

また、立原は、昭和 13 年 8 月 1 日深沢紅子宛書簡では、「かるい肺尖カタルといふのでしたけれど、ほんたうにかろくてもうなほつてしまっています」として自らの病を肺尖カタルと称しているが、秋元の回想には、「とにかく即刻安静にしなければいけないと、肺結核の診断結果を言い渡されたわけです」、「肺結核と診断

された時、彼の死はもう決定されたと言っていいくらいで、彼はそれをどのように受け止めていたのでしょうか」とあることから、立原は結核と診断された後も結核という言葉は使わずに、周囲には肺尖カタルと説明していたことになる。

肺尖カタルについては、隈部英雄が『結核の正しい知識』(1949)の中で、「ひと昔まえは、なんでもかでも『肺尖カタル』と診断されて、診断した医者の方、診断された患者の方、わかつたような、わからないような気持ちで、しかもその肺尖カタルという診断名でひとまず安心していたものです」、「肺尖カタルは結核ではない、肺尖カタルをこじらせると肺病になるのだ、というような甘つちよろい気分のために、療養にも気がはいらず、感傷的な、放縦な生活のため、どれほど害を流したかわかりません」と記しているため、当時、一般的には肺尖カタルは、まだ安心な状態で、まだ結核ではないと捉え療養に専念しない患者も多かったようである。そのため、立原は、結核という診断を友人には肺尖カタルという軽い病名をつかって曖昧に説明していたことになる。

第3章 研究3：結核診断から長崎旅行まで (昭和13年7月21日～昭和13年11月23日)

1、目的

本章では、立原道造が東大病院で結核と診断された昭和13年7月中旬から、同年11月24日に長崎へ旅立つまでの約4カ月間の資料に基づいて、結核と診断された後の立原が自らの病をどのように受け止め、どう対応したのかを検討する。

2、対象と方法

対象：立原が東大病院で結核と診断されたショックが記された昭和13年7月21日の生田勉宛の書簡から、同年11月24日に長崎へ旅立つまでの約4カ月間に書かれた全書簡103通と、この時期に書かれた立原の手記『火山灰』ならびに、盛岡滞在中に水戸部アサイに渡すことを前提に書かれた『ノオト』と当時の立原に関する友人の回想録。

方法：上記資料の中から、立原の身体症状や精神状態に関する記述をはじめ、死生観や運命論、創作に関連した記載などを抽出して、その特徴を検討した。

なお、東大病院で結核と診断された後の立原は、その後、大森、追分、盛岡、東京と、各地を点々としているため、滞在場所によって以下の5つの時期に分けて、検討を加えた。

- 1) 結核診断直後 (昭和13年7月21日～7月26日)
- 2) 大森滞在期 (昭和13年7月27日～8月9日)
- 3) 追分滞在期 (昭和13年8月11日～9月6日)
- 4) 盛岡滞在期 (昭和13年9月15日～10月19日)
- 5) 東京滞在期 (昭和13年10月20日～11月23日)

略年譜 3 ; 研究 3 の対象とした期間 (下記、網掛け部分)

大正3年	7月	東京都日本橋区橋町で生まれる。
大正8年	8月	22日、父親が死去。
大正10年	4月	久松尋常小学校に入学。
昭和2年	4月	東京府立三中(現、都立両国高校)に入学。
昭和4年	3月	22日、従妹の立原婦志子が虫垂炎で急逝。
		20日頃から同年7月まで「神経衰弱」で休学。
昭和6年	4月	第一高等学校理科甲類に入学。
昭和9年	4月	東京帝国大学工学部建築科に入学。
昭和12年	3月	東大を卒業。石本建築事務所に就職。
		夏頃、徴兵検査を受け、痩せすぎのため丙種不合格となる。
	10月	上旬、肋膜炎により発熱。安静を命じられ、11月上旬まで約1カ月、自宅で静養する。
	11月	19日、信濃追分油屋旅館の火災に遭遇する。
昭和13年	1月	芳賀檀から『古典の親衛隊』を献本される。
	4月	水戸部アサイと交際を始める。
	7月	中旬、「肺尖カタル」のために石本建築事務所を退職し、大森で療養生活を始める。
	8月	上旬、信州の追分に一カ月ほど滞在。
	9月	中旬から盛岡へ旅立つ。
	10月	19日、痔ろうの治療のため帰京。
	11月	24日、長崎への旅に出る。
	12月	4日、長崎着。翌5日夜に発熱して武医院に入院。
		13日、長崎を出る。
		14日、帰京。
		15日、東京帝国大学附属病院を受診。
		26日、中野区江古田の東京市療養所に入院。
昭和14年	3月	29日、病状が急変して呼吸困難で、息を引き取る。

3、結果

1) 診断直後 (昭和 13 年 7 月 21 日 ~ 7 月 26 日)

東大病院で結核と診断された直後の昭和 13 年 7 月 21 日に立原が親友の生田勉に宛てた書簡には、東大病院で結核と診断されたショックが書かれている。

この書簡はまず、「たいへんに自然に、僕のまへには危機がひらけている。夢のなかでは幾たびもくりかへしたことだが、たうとうたいへんに自然に。それゆえ、けふ君に向つてかうして書きはじめるたよりも、僕自身にとつてはなかなか大きな手紙なのだ」という、危機感や緊張感にあふれた書き出しで始まる。

そして、「けさ僕は突然に事務所を休むことにした。(略)しかしそれは一月のことでなく、もつと長く……あるひはあの事務所

をやめることになるかも知れないまでに。なんかの理由は健康のこととなつている」と、健康上の理由で建築事務所を休職もしくは辞職する意思を示している。

ここで示唆されている休職もしくは辞職は、当然のことながら結核と診断されたためと考えられるが、この書簡では、「たいへんに自然に、僕のまへには危機がひらけている」、「なんかの理由は健康のこととなつている」などといった曖昧な書き方に終始していて、親友であるはずの生田にも、結核という診断名は漏らしていない。

また、この書簡では、「キエルケゴオルが婚約をやめる場合に、責をどうかんがへていたか、僕の夏中の大森での生活は、責のことに就てばかりだらう」と、キルケゴールの婚約破棄を引き合いに出して、水戸部アサイとの関係についても今後どうするか考えている様子もうかがえる。

そして、「けふの夕映はほんとうに、旗のやうに赤く美しかった。僕の頬には涙がすぢをひいていた。(略)追憶がみなこはれて、ただ、ゆくすえが約束もなしに、とほくまで見渡せる」と、これから始まる闘病生活に思いをはせ、自分の人生の末路を考えて涙しているが、ここには、「夕映はほんとうに、旗のやうに赤く美しかった」と、悲しみゆえの感受性の高まりのような現象もみられる。

さらにこの書簡には、「若さとは、つねに疾風怒濤のなかのものでなければならない。そして風景を無限に拡大すること。しかし今、僕の旅の予定をいふことは、むしろけふの愚行の合理化にすぎない」と、「風景を無限に拡大する」とか「旅の予定」という言葉が記されていて、この時すでに後の日本縦断旅行のことが念頭にあった様子もうかがえる。

このように、昭和13年7月21日の生田宛書簡では、結核と診断された直後の心理的な動揺が語られているが、この7月21日以後、大森に行く7月27日までの間に、これ以外の書簡は残され

ていない。

一方、この書簡を受け取った生田勉の日記（1983）には、立原の書簡について、「事務所をしばらく休むという」と記されているだけであるため、立原の休職の背後に結核という病があることを、この時点での生田は想定していなかったようである。

つまり、立原の書簡では、曖昧な表現がされていることもあって、親友の生田ですら立原が結核と診断されたことは知らずにいるのである。

なお、立原の手記『火山灰』には、「僕はおまへとこの部屋にいて、あの日以来すっかり僕をめちやめちやにした出来事を語りあひながら、あの傷からやうやくのがれ出る。そして明日はこの部屋にはいない。僕がすっかり見ちがへるやうになつてかへつて来るときまで。（略）おまへがいなかつたら僕はどうなつていたかわからない」という記載がある。

『火山灰』中のこの記載の執筆時期は、この文章が記される直前に「旅立ちの前の夜だ」と記され、また、「見ちがへるやうになつてかえつて来る」と、病の治療を目的とした旅であることが示唆されるために、おそらくは、大森滞在直前もしくは追分滞在直前のことと思われるが、「あの日以来すっかり僕をめちやめちやにした出来事」とは、時期的にも、結核診断のことを指すと考えられるため、この手記からも、結核という診断によるショックの大きさがうかがえるが、この手記にも結核という病名は記されていない。

その一方で、この手記では、自分は「見ちがへるやうになつてかへつて来る」という楽観的な見通しを述べており、また、「おまへがいなかつたら僕はどうなつていたかわからない」と記されていることから、第1章で述べたように水戸部の存在が立原の心情に少なからぬ影響を及ぼしていることがわかる。

2) 大森滞在期（昭和 13 年 7 月 27 日～8 月 9 日）

立原はその後、大森にあった室生犀星の留守宅で昭和 13 年 7 月 27 日から 8 月 9 日まで療養生活を行うことになる。

大森滞在中の 2 週間に書かれた全書簡 18 通中、身体症状に関する記載は 11 通、精神状態に関する記載は 11 通、死生観についての記載は 2 通、創作についての記載は 3 通にあって、その内容は以下の通りである。

まず、身体症状については、7 月 27 日の津村信夫宛の書簡に、「お医者様は 2、3 週間したらすつかり見ちがへるやうになるだらうといひます。だから来月のころにはまた『風立ちぬ』やなんか仕事が出来ます」と、事実とは異なる形で、医者から病は 2～3 週間で軽快すると言われたと楽観的な見通しを述べている。

また、7 月 28 日に神保光太郎に宛てた書簡でも、「長い夏休みをつとめ先から奪つて、ここで毎日ひるねしてくらしています。それに、身体がすこし疲れすぎているので、静養が必要だつたのです」と、ここでも結核という診断には触れず、ただ疲労のために静養が必要と、曖昧な表現で伝えている。

さらに、7 月 30 日には室生朝子に、「病気は大したことなく 毎日 ぼんやりしてくらしています」と書き、7 月 31 日にも小場晴夫に、「大森に移り、潤沢な眠りと快い忘却のなかで、静かな日々を営んでいる。恢復といふ言葉のままのあけくれである。疲労も傷も みな すつかり僕から癒え去るだらう」と書くなど、いずれも結核という病名を出すことなく、病状は軽いという書簡を、立て続けに送っている。

この頃の立原は、医師によってなされた深刻な診断とは反対に、周囲には回復への期待に満ちた明るい書簡を送るなど、病の否認とも思えるような行動をしているが、そこには、友人・知人に余計な心配をかけまいとする配慮も働いていたのかもしれない。

ただし、7 月下旬の小山正孝に宛てた書簡では、「あれから僕は夜も昼もごわごわするベッドのなかで眠りと夢のあひだをさま

よっていました」と書いているため、実際には、睡眠障害を伴う臥床中心の療養生活を送っていた様子が見えてくる。

そして、8月1日の深沢紅子に宛てた書簡では、「ばかな僕と、ばかなお医者とが、僕を一月ばかりじつとしているやうにきめてしまひました。(略)かるい肺尖カタルといふのでしたけれど、ほんたうにかろくてもうなほつてしまつています」と、休職したことを後悔するような発言をしているだけでなく、自分の病を「かるい肺尖カタル」と称するなど、病の軽さを強調しているが、これらの発言も、結核という病を否認するような表現と考えられる。

なお、鈴木亨（1973）や中村稔（2010）をはじめとするこれまでの年譜作成者が、立原の建築事務所休職の理由を「肺尖カタル」としたのは、この書簡の表現によるが、上記のごとく、結核と診断されて間もない大森滞在期の立原の書簡は、病は軽く順調な回復を期待するという趣旨のものがほとんどで、本当のことは誰にも告げていないのである。

もう一つ、この時期の立原の書簡の記載で目立つのは、「いろいろなことをかんがへてはすぐに忘れます」（7月27日津村信夫宛）、「忘れることはいいことだ」（7月28日生田勉宛）、「いろいろなことをかんがへてはすぐにわすれます。わすれているのはほんたうにいいことだとおもひます」（8月1日深沢紅子宛）、「自分の病んでいる身体をときどき忘れてしまふくらい僕のころはいま生き生きとしているやうだ」（8月2日中村真一郎宛）など、忘れやすさと忘れることの肯定的な意味を立て続けに書いていることである。

これも、忘れるという形での現実否認的な心理と解釈することもできるため、当時の立原は、結核の診断を受けたショックを一時的にでも忘れて暮らすことで、精神の平穏を得ようとしているように思われる。

その他に、この時期の立原の精神状態で目立つのは、「すなほに

しづかになつています。しかしいへんにさびしく」、「いつかおはなしに来て下さい。さびしがつていますから」（7月27日津村信夫宛）、「何かしらさびしくて、おくらずにはいませんでした」（7月28日神保光太郎宛）とあるような「さみしさ」の感情であるが、これは、結核という死の宣告を受け、他者との別れを意識しながらも、結核という診断を誰にも言えずにいることによる孤立感からくるものと考えられる。

一方、油屋火災後のPTSD的な症状に関しては、8月2日の野村英夫宛書簡に、「追分の雲と空と小鳥たちは、追憶の風景のせいか僕には魅力がないこともない（略）だがそのくりかへしはけふの心にはすこし傷のやうにいたむのだが」、「僕のさまざまな（追分の）記憶はたうとうひとつの大きな花のやうな傷になっている」と、追分の魅力を語りつつも、同じ被災者である野村と再会することを躊躇するなど、未だに火災の記憶が心の傷になっていることが記されている。

また、創作に関しては、7月下旬の小山正孝宛書簡に、「さびしいたをフルウトでうたひたいやうな気がします（略）僕はそれとおなじことをこの紙の上に音色のやうに早くあらはれ早く消えることの出来ない文字で出来たなら！とおもひます」、「君がさびしいよりも僕はきつともつとさびしいそして悲しい けれども 僕の悲哀は君の悲哀を慰さめる…そんなメエルヘンを考へています」と記されていて、この時期の立原は、「僕の悲哀は君の悲哀を慰さめる」と、病を得た自分の悲哀こそが人を慰める力になり得るという病跡学的な見解を述べている。

以上、大森滞在中の立原の特徴をまとめると、身体症状に関しては、結核という言葉を避けて、楽観的な態度を装いつつも、漠然とした悲しみや淋しさは友人に書いている。これは重い病を得たことの自覚によるものと思われるが、その一方で、こうした病気を患った悲哀こそが、創作を通じて人を慰める力になりうるといふ病跡学的な見解を持つことによって、自らを支えようとして

いる。

また、PTSD 的な症状については、油屋火災という外傷体験から 9 カ月を経たこの時期にも、火災の記憶が依然として心の傷となっているものの、その一方で、大森滞在後は火災があった信州・追分で静養することを決めていることを考えると、この頃はかなりの改善傾向にあったのではないかと推測される。

あるいは、かつて肋膜炎の症状が PTSD 的な症状によって軽快したように、結核診断の衝撃が大きかったために、PTSD 的な症状の占める比重が軽減したというような心理規制もあったのかもしれない。

3) 追分滞在期（昭和 13 年 8 月 11 日～9 月 6 日）

大森で 2 週間の療養生活を送った立原は、火災後再建された追分の油屋旅館で 8 月 11 日から 9 月 6 日までのおよそ 1 カ月を過ごすことになる。

追分滞在中に書かれた書簡は全 28 通で、その中で身体症状に関する記載は 12 通、精神状態に関する記載は 13 通、死生観についての記載は 9 通、創作についての記載は 7 通にあって、その内容は以下の通りである。

まず、身体症状に関する記載は、8 月 14 日に書かれた杉浦明平や武基雄宛の書簡にそれぞれ、「もう秋らしくなった風のなかで、僕はうつらうつらしています。すこしかぜひいたやうな気持です」、「すこしかぜの気味でうつらうつらとくらしています（略）おちついたらすこし疲労が出たけれどこちらに来てすっかり調子はいい」とあって、追分でも、「風邪気味」とか「疲労」と書く程度で、体調の良さが強調されている。

このように、追分滞在中も、身体症状がありつつも、友人たちには元気なことを強調しているが、8 月 25 日の小場晴夫宛書簡には、「僕は ふたたび この憩ひから もつととほくに！ とほくに出て行かうとおもふ」と、秋から始める旅をほのめかす表現

がみられるほか、9月3日深沢紅子宛の書簡では、その旅行の目的を、次のように述べている。「秋はあたらしい僕を待っています。ずっと健康な力づよい僕を半年かかっつてつくりあげる夢が（略）盛岡のこといろいろありがたうございます。その夢のはじめの踏み出しとして一日も早く行きたいとおもひます」。

ここでの立原は、旅行に出かける目的を、「健康な力づよい」自分を作り上げるためと、あくまでも健康目的のためと説明しているのである。

また、9月5日の矢山哲治宛書簡には、「心のままの漂泊や放浪が、僕の青春の形式といふためには僕はあまりに病ひや弱さに近い、かへつて僕の心も身体もつくりなほすための旅といひたい。旅のなかで『身心改善』がなされねばならないといふこと自体たいへんにイロニイである」と書かれていて、この書簡にも、「心も身体もつくりなほす」ことや「身心改善」が、旅行の目的と書かれている。

以上のように、後世の研究者からは「無謀」（宇佐美斉、1982）とも「自虐的」（山上栄子、1982）とも評される最晩年の旅行であるが、立原自身は精神と身体健康の回復を旅行の目的に挙げているのである。

しかし、その一方で、この時期の立原は、8月22日の水戸部宛書簡に、「僕の 生きていることは こんなときにはつきりとふたしかだ（略）僕が 危いことをえらんだのでもない この風景自体が危いのでもない しかし ここに僕が この風景のなかにいるとき それは 危険なことになる」と、自らの身に危険が迫っていると記し、8月25日には小場晴夫宛書簡にも、「君と この高原で 僕の生涯のひとつの 危機に 美しくされた風景のなかで 対話し得なかつたことはもう 悔いまい 何者にも癒されない哀愁の淵は この光のなかに ひらけはしない」と記して、生の基盤に危険が生じて癒すことができない哀愁を抱えているとも伝えている。

また、9月1日には同じく水戸部アサイに宛てて、「僕たちの、この朽ちてゆかねばならない日々。僕たちの たったひとつの日々。(略)僕は 心のふるへなしには、おまへに告げることが出来ない。僕の漂泊の たうとう 最後の意味を」と記すなど、自分と水戸部との日々が滅びゆく運命にあることを伝えている。

このように、立原は、追分滞在の終わりの頃になって、自分の生の危機をほのめかすような記述を、曖昧な表現ながらも、3通の書簡に残している。

そして、追分での生活を振り返った9月4日の水戸部宛書簡には、「僕に信じられないくらいの 不思議な美しい夏。それは、もうふたたびはくりかへしも出来なければ語ることもできないだらう」「では、けふよ、僕の夏よ、さよなら!」とあり、9月7日の深沢紅子宛書簡にも、「こんなにたのしくうれしく過ぎた日はなかったといまではとりかへしのつかない日々のやうにおもはれます。たのしかつたし、美しかつた風景や気候や人たちの心ばえなど、僕の夏がこの夏で最後であつたとしても、もう悔いることはありません」とあるように、「さようなら」や「僕の夏がこの夏で最後」などの言葉を使って、死の予感めいた思いも記している。

一方、生田勉が8月12日に書いた日記(1983)に、「夜中一時頃迄立原と床の中でおしゃべり。立原は鋭い悲観的と思われるいろいろの歎息をもらす」とあるほか、生田は別の回想録『立原道造の建築—リリズムと人間の息吹と』(1978)にも、「死ぬ前年の夏、その頃未だ輝しい元気な顔をしていたが、不吉な予感を身に感じてか『死ぬと決まればそれ迄に徹夜を続けて傑作をつくり置かねばならぬ』と洩らしたが、僕はそのとき、その仮定を一笑に附した」と記しているため、追分での立原は、親友の生田勉には、さりげなく悲観的な思いを漏らしているが、ここでも曖昧な表現をしているため、この時点でも生田は事態の深刻さを理解していなかったようである。

もう一つ、追分滞在中の立原の行動で特記すべきは、追分に多数の友人を招いていることである。

それは、8月13日の小場晴夫宛の「君も休暇がとれたら やつて来ない？ いま 生田がここにいる」という書簡に始まり、8月29日の柴岡玄佐雄宛の「昨夜はこの部屋に、武、小場、小場君の弟さんと、4人でねむった。建築家の合宿のやうな風で、なかなかたのしい」という報告に至るまで、立原は、11通に及ぶ書簡の中で、15人以上の友人を追分に集めている。その中には、一高や大学時代の友人と妻、恋人、萩原朔太郎の会の文学者、建築家の知人など、さまざまな友人が含まれているが、立原がこれほど多くの知友を追分に集めた理由としては、「僕には ひとつの魂が課せられている。どこか 無限の、とほくへ行かねばならない魂が、愛する者にすら別離を告げて」（9月1日水戸部アサイ宛）、「僕らはずねに別離を生きることの形式のやうにすらかんがへています」（9月3日深沢紅子宛）などとあることから、自らの死を意識した立原が、「みんながやつて来た 僕は みんなに もうけふで お別れだといふ挨拶をした」（8月22日水戸部アサイ宛書簡）と語る夢に反映されるような、それとは悟られない形での「別れの儀式」というような意味もあったのではないかと考えられる。

このあたり、旅行をして心身の健康を回復したいとする希望とは矛盾する行動で、当時の立原には、もう一度健康な体を取り戻したいという希望と、実際には無理かもしれないという不安が、同居していた様子がうかがえる。

4) 盛岡滞在期（昭和13年9月15日～10月19日）

信州追分での生活を1ヶ月足らずで切り上げた立原は、一旦帰京するものの、それから一週間後には盛岡に向かい、9月15日には、山形を經由して石巻に赴き、9月19日からおよそ1カ月、盛岡の深沢紅子宅に滞在しているが、深沢紅子とは立原より11歳

年長の画家の友人である。

1カ月間の盛岡滞在中に立原が書いた書簡は全部で31通あるが、その中で身体症状に関する記載は8通、精神状態に関する記載は26通、死生観についての記載は19通、創作についての記載は6通にあって、それらの内容は以下の通りである。

まず、9月21日には母親と弟に宛てて、「きのふ一日は雨で、しづかに休みました。5日間のあちらこちらの旅はやはりつもりつもつて疲れたのでせう」「身体の方はひきつづきずつと元気です」と、長旅の疲れはあるものの元気であることを伝え、9月26日には水戸部アサイに宛てて、「身体の方は 非常にいい」と記し、9月28日にも勤務先の石本建築事務所に宛てて、「からだの方はその後順調に非常に元気になりつつあります」と書くなど、この時期にも、以前同様、順調な回復ぶりを強調している。

その一方で、10月1日の生田勉に宛てた書簡では、「僕はこの夏以来、毎日これが僕の最後の幸福な日々になり終るやうな気がしている」と、やはり、生田には悲観的な死の予感めいたものを書いている。

また、10月17日には、水戸部アサイに宛てて、「ちひさな病ひが僕のかへりを早めることになつた（略）心配することはいらないちひさな病ひだが」と書いているが、ここに小さな病とあるのは、年譜作成者の鈴木亨（1973）や全集の編者である宇佐美斉（2010）によれば、結核性の痔ろうのことで、医学的には決して小さな病とは言えないはずだが、水戸部宛の書簡の中では結核との関連は書かれておらず、心配ないものと記されている。

こうした盛岡滞在中に書かれた書簡の中で、身体症状に関する記載で最も注目されるのは、堀辰雄に宛てた次の書簡である。

この書簡は、「あなたの今までのお仕事の意味が、僕をふかくとらへています。どんな仕方ですか？ 僕はむしろにくしみで！とおこたへしなければならぬのです。『風立ちぬ』との対話は、たうたう僕をそこへみちびきました」という書き出しで始まる、

いわば堀辰雄への挑戦状とも言える書簡であるが、この書簡では、「たいへんに空気がうすい、呼吸が苦しいやうな気分です。(略)僕の肉体が、青い翼の疲れきつた鳥のやうに、この机に向っているのでせう」「しばらく、濃い空気を吸ひたいとおもひます。僕の呼吸が楽になるやうに。死なない方がいいとだけは、このごろ、しみじみおもっています」(10月19日)と、多くの友人に健康状態は良好と書き続けた立原も、結核患者としての先輩である堀には、疲労感とともに呼吸が苦しいと訴えて、病状の悪化を伝えるとともに、「諦念」をテーマにしている堀に対して、「死なない方がいい」と相対立するような見解を伝えている。

以上のように、盛岡滞在中に書かれた書簡では、健康状態への言及は、それまでの大森滞在期や追分滞在期に比べると少なくなり、その内容も、病は心配ないとする楽観的なものがほとんどだが、唯一堀には呼吸困難という病状の悪化を伝えている。

その一方で、盛岡滞在中の書簡には、死生観や創作に関する記載が多くなり、9月末頃の書簡には、次のように書かれている。「こちらに来て僕は全体に非常に肯定的になつている たとへば不毛の美しさよりも もつと多く fruchtbarkeit(注; 豊穡の)の美しさを信賴する(略)ただその美しさは僕にとって全く異質であり あたらしい誕生だ、おそらくこんな生き方の信賴が僕をつくりかへる」(9月27日小場晴夫宛)、「僕はこちらへ来て毎日、夢のなかでのやうに自分を感じている。しかし、僕はこの小さい丘の麓にあたらしく生れたのではないだらうか。昨日でないならば、けふたつたいま! そのためには僕の一切の過去を抹殺するがよい。僕は生れ出たばかりの幼児のやうに、ここにあたらしい日をきづく」(9月28日猪野謙二宛)。

盛岡で生命力に満ちた豊穡の美に触れた立原は、それまでの過去を抹殺して、幼児のように新しく生まれ変わったと記しているのである。

この盛岡での豊穡の美との出会いは、「僕は泪をながして、『僕

は生きられる、生きられる』とつぶやいていました。それほどにあの町が美しかったのです」（9月28日深沢紅子宛）とあるように、この土地の美しさに触れることで、詩人として新たに生き続けていく可能性を感じているが、創作との関連で注目されるのは9月28日の深沢紅子宛の書簡で、そこには、自らの望む創作のあり方が以下のように記されている。「いつはりのきづいた美しさよりもちがつたものがいまは欲しいのです。僕の今までの歌は何とшыれていて美しいいつはりの花だったかと、ひとのもののようにそのまへに僕は立っています。しかし、あれには僕が大切な僕がない。今の僕はもつとちがつた歌をうたひたいとおもひます（略）何かほんとうのもの、僕たちのいつはりをさへほんとうにかへてしまふことの出来る不思議なもの、僕たちの内部にながれているもの、それがうたひ出したらとおもひます」。

このように、盛岡で新たな美の世界に遭遇した立原は、これまで書いてきた作品を「いつはりの花」とみなし、作中に、これまでとは違った「ほんとうの自分」や「内部にながれているもの」が存在するような作品を書くことを目指すようになっていく。

なお、前記9月28日の深沢宛書簡には、「僕はひとのまへにいと、とめどなくうその僕をつくり出してしまひます。そして僕はそのかげにかくれてしまひます。そんな僕でなくなりたい。ほんとうの僕が気持のいい僕になりたいとおもひます」とも記されていて、立原は、「ほんとうの僕」は人の前に出ると「うそ」の僕に隠れてしまおうと考えていたことがわかる。

こうした記載を見ると、立原晩年の謎とされてきた日本縦断旅行の目的には、前述の「身心改善」という健康回復のほかに、結核と診断されて、本当の自分は何を望んでいるのかを、他者への気遣いをする事なく、一人になって見極めたいという思いもあったのではないかと推測される。

以上のように、盛岡での豊穡の美との出会いは、油屋火災で詩の心象風景を失くし、遠くない死を意識していた立原にとって、

詩人として新しく生きられるという可能性を感じさせる契機となったことがうかがえる。

5) 東京滞在期（昭和 13 年 10 月 20 日～11 月 23 日）

盛岡に 1 カ月余り滞在した立原は、盛岡で悪化した痔ろうの治療のため、昭和 13 年 10 月 20 日に帰京する。

立原が帰京してから、長崎に出かけるまでの約 1 カ月間に書かれた書簡は全 17 通であるが、その中で身体症状は 7 通、精神状態は 7 通、死生観は 3 通、創作については 7 通に記載があって、その主な内容は、以下の通りである。

まず、帰京を余儀なくされた痔ろうの治療については、「お医者様がけふはお休みの日で、明日手術だらうとおもひます」（10 月 20 日加藤健宛）と語っているように、最初は手術を予定していたものの、11 月上旬の加藤健宛書簡に、「おできはきらずにいいことにして くすりつけやうやくけふあしたあたりでをはりになります ずいぶんうみの出るときいたくて つらくてくるしました」とあるように、結局は保存的な治療に留まっている。

この時期の身体症状については、10 月 22 日の加藤健宛書簡に、「僕はいまこのちひさな部屋で、忘却と追憶のまざりあつたけだるいやうな苦痛に近い甘さ」と記されているが、「けだるいやうな苦痛」の背景には、11 月上旬の加藤健宛書簡に、「けふは ゆつくりしたいとおもひながら いつもいつも だれかと一しよにいます そして何かしらしやべり 日がくれ夜が更けて うちにかへるとくたくたになつて ほんたうに僕はばかです(略)なにをかいていいんだかわからない」と、判断力の低下を伴うほどの疲労感が記され、11 月 19 日の加藤健宛書簡にも、「ここでは孤独でなく、僕はあまり人のために、自分を疲れさせすぎました」とあるように、多くの人々との交渉による疲労の蓄積があったようである。

また、11 月 12 日の水戸部アサイ宛書簡には、「すこしけふは

かぜひいたらしいが 明日までになほる」とあるものの、翌 11 月 14 日に再び水戸部アサイ宛に、「また咳が出て かぜをひいてしまった 早くなほさなくては 長崎に いつまでしても 行かれないので だいじにして このかぜをなほしてしまはなければならぬ（略）早く僕は 南のあたたかい方へ行って 安心してかぜをひかないやうにしたいとおもふ」とあって、あくまで「かぜ」としながらも、2 日間の休養では治らず、咳が出ている様子が書かれているなど、この時期の病状の進展を思わせる。

このように、東京時代の書簡には、痔ろうの症状以外は、倦怠感が 3 通、「かぜ」という表現を含めた呼吸器症状が 2 通に記されているのみで、盛岡滞在期よりも、身体症状に関する記載は減っている。

また、友人の小場晴夫（1983）は、この時期に立原と会った時の様子を、次のように伝えている。「彼の身体のことを心配して尋ねると、彼は親戚の医者に診てもらって、一寸肋膜が悪く、お尻におできが出来ていると答え、おできの方は手当てしながら行くだ、何でもないのでと言っていました。それを今思ってみますと、それは嘘ではなく、身体の異常を承知の上で、何でもないんだと言ひ聞かせなければ、計画していた南への旅が成立しなくなる自分への納得と考えられ、彼自身生き続けてゆくための証でもあり、また私に対する構えであったろうと思われます」、「この時、結核は肺ばかりでなく、ほかの内臓もひどく侵していたはずで、常識的には旅行できる状態ではなく、精神力がかりうじて身体を引きずって、旅へ向かわせたのでしょう」。

このように、友人から面と向かって健康状態を尋ねられた時にも、立原は、「肋膜」とか「おでき」と答えるのみで、結核という言葉は使っておらず、実際の会話でも、書簡同様、結核という言葉の使用を避けていたことがわかる。

一方、この時期の精神状態は、10 月 22 日加藤健宛書簡に、「失神への一歩手前の危機のやうに、僕の憂愁は高まっています。こ

れはひとつの優しい拷問のやうだ！」とあるように、「失神の一步手前の危機」とか「拷問」という言葉を使うほど、憂鬱な感情の高まりがみられる。

もう一つ、この時期の書簡で注目されるのは、盛岡で知り合った年少の友人・小山正孝に宛てた 11 月 11 日の書簡で、その中には、「僕は自分の身体をこつそりとひとりでひどくいぢめてそれに酔ふやうなときがある」「ひよつとしたら、僕は死に近いのかも知れない。そんなことは考へも信じもしない事だが！僕はむしろ、ジョルダノ・ブルノオや小林多喜二の死に方が美しく僕を誘惑するのを感じる」と、自分には自虐性があつて、火刑に処されたジョルダノ・ブルーノや拷問死した小林多喜二の死に方に魅力を感じると書きながら、「死に近いのかも知れない」と、これまでよりも、はっきりと死の予感を記している。

そして、その死の予感に関連して、同じ書簡には、「僕は純粹に、光のなかで、美しい花でありたい。花でありたいといふねがひが人間の僕にどんな意味があるのか。ひよつとしたら死ぬかも知れない、といふことばはおそらく僕を殺さない。人間が花になる。人間が小鳥になる」とあつて、死ぬことは美しい花や鳥になることだと述べている。

これに加えて、同書簡には、「僕のこの 2・3 日まへまでつきまどつていた痛みさへ、僕は愛していた。(略)しかし、だれにも嫌悪と反撥だけでその痛みを語つた(略)僕のそんな秘密を僕はかくすよりほか、まだ、出来さうにない。なぜ、君にそれを知らせているのだらう。それを僕は拒まない。君のまへで、僕は裸にされる。僕は裸になれない。こんなあはれな人工があるものか」と、自分は痔ろうの痛みさえ愛していたが、そのことは誰にも隠していたと記して、立原が他者の前で演技する人工の自分というものを捨てることができないとしている。

さらに、10 月 28 日の丹下健三宛書簡には、盛岡での仕事を「敗北」として、「闇中模索といふ言葉もたよりにならないし、また

はじめからやりなほすとして何をやりなほすのかも知らないし、具体的なものにぶつかるとしてそれがどこにあるのか見あたらないし、空漠としたところに出て来てしまったやうです」と、自らの創作の行き詰まりを記しているが、11月に入ると、「僕は、また、いいらしを、しづかにひとりきりでして来ようとおもっています」（11月6日加藤健宛）、「ここでは孤独でなく、僕はあまり人のために、自分を疲れすぎました」（11月19日加藤健宛）と記しているように、孤独で静かな暮らしを求めて、長崎旅行を執行するのである。

4、考察

以上が、東大病院で結核と診断されてから長崎旅行に出かけるまでのおよそ4カ月間の書簡にみる立原の結核への対応である。

これらの書簡で注目されるのは、この間の経過を通じて、症状はかなりの進展を見せながらも、ほとんどの書簡で、具合はいい、順調に回復していると強調していることである。したがって、書簡を普通に読む限りでは、東大病院で結核と診断された病の重さは見えてこないが、しかし、その一方で立原は、受け取った側もそれとは分からない程度に死の予感を書いている。それも、追分では「危機」、「危険」という表現だったのが、盛岡では「最後の幸福な日々」、東京では「死に近いのかも知れない」と表現するなど、次第に、暗喩のような形で死の予感を書簡の中に記すようになっていく。

すなわち、この時期の立原は、内心では自らの死の予感に脅えつつも、書簡では、結核という言葉を使わず、友人たちには重病であることを気づかれないように気を配りながら生きていた様子が見えてくるのである。

なお、友人の小場晴夫（1983）は、立原の病に対する態度を、次のように回顧している。「健康のことで話し合ったことがありますが、立原は、植物でいえば葉には餘り関心がない、花が大事

なんだと言い、立派な茎や葉がなければ立派な花が咲かないじゃないか、と私は言い返す。すると彼は、肉体や身体は頭を支える最小限でいいのだと言い、先生である堀辰雄さんのことを引合いに出しながら、身体が弱って来たら、富士見高原のサナトリウムにでも入院して、身体を休ませ回復させながら仕事をすればいいじゃないか、などと言っていました」。

このように、立原には、「花」、すなわち精神を重視して、「葉」、すなわち身体を軽視する傾向があったために、医師から「即刻入院が必要」と言われるほど重症でありながら、「身心改善」と称する武者修行的な措置で病へ対処しようとする非現実的な療養方法を選んでしまった可能性がある。

もう一つ、立原の実際の病状と周囲への説明の乖離の理由として考えられるのは、詩人としての美意識である。

第1章で示したように、立原は、肋膜炎と診断された段階で、エッセイ『追悼』に、「人に知られないやうに秘められた」死の瞬間こそが、『詩人の死ぬや哀し』と何かはつきり予前した芸術人の最後の美しい^{ポーズ}姿勢」であると記すように、自己の死を予知しながらもそれを他者へ伝えない姿勢こそが、詩人や芸術家として美しいという価値観を持っていた。事実、昭和12年4月2日の神保光太郎宛書簡にも、「僕が 詩人でありたいとねがふ日に僕は詩人だと信じます いかなる意味ででも この志向が決める世界こそ詩人の場所だと信じます（略）僕はその場所で 詩人でなしに死ぬ日にさへ 詩人であつたと信じ得ます」と記すなど、詩人としての美しい人生でありたいという思いが、結核患者としての立原の言動に影響を与え、結果として、他者に病の苦悩や悲惨さを表出しないという態度をとらせたのではないかと考えられる。

さらに、立原の結核への対応で注目されるのは、結核を患って医師から安静を勧められながらも、各地を転々としていることである。

岡西順二郎(1951)によれば、結核患者の心理として、安静を守
ることは愉快的ことではなく、安静によって食欲がなくなり、憂
鬱になるなどのために、反撥を示す者が少なくなき、高熱や咯血
などの症状があれば安静を守るものの、自覚症状がない場合に安
静を実行させることは難しいとされている。

立原の場合も、結核と診断された直後こそ大森で療養生活を送
っていたものの、大森では、発熱も治まり、血痰も無かったこと
を考えると、若き立原にとって安静を守ることは困難だったので
はないかと考えられる。

また、大西信正(1960)は、環境の影響として、周囲の人間が
、患者への心配や悲しみを隠しえない場合、病人は不安に、恐怖
に襲われるため、人によっては、努めて病気が軽症であるかのよ
うに振舞うことによって、自分に与えられる不安や恐怖から逃れ
ようとする指摘しているが、これは、『結核』診断後に大森や追
分に滞在していた最中、事実と反する形で軽症の病気であることを、
周囲に強調したり、忘却することに意義を見出していた立原に
そのまま当てはまるような特徴で、各地への旅行も、立原は親
しい友人や知人に心配されるのを避けるために家を出て、旅立っ
たとも考えられる。

もっとも、滞在場所を頻繁に変えたということは、立原が結核
の感染性をどのように考えていたかということとも関わる問題
である。秋元寿恵夫の立原の結核発病時の回想には、「左の肺葉と
右の肺の上部に大きな空洞のある」結核という診断が下りたと記
されているため、立原の結核は排菌のある開放性結核だった可能
性が高いが、立原が自分の病の伝染性についてどのように考え、
理解していたかについては、今回調べた限りでは資料が残されて
いない。しかし、当時は40歳を過ぎると結核に対する免疫が成立
しているという見解があったことも考えると(田澤鎌二、西川義
方ら、1930)、各地への旅行は、東京に在住していた当時19歳の
許婚者水戸部アサイへの結核感染を恐れての旅だったという見

方もできるし、また、結核を患いながら旅行をした正岡子規や長塚節、堀辰雄などの例もあることから、当時の結核の感染防御は、同室居住などの濃厚感染を避けるといった程度の対処で済まされていたのではないかと考えられる。

だが、その一方で、自らが召集した若い友人たちと追分で静養し、東京滞在期にも多数の友人と会って、その中の一人である小場晴夫も、盛岡から帰京後の立原と、「二人でオレンジジュースとレモンスカッシュを別々にとって、半分ずつ飲み」あったと、記していることを考えると、立原は、やはり、他者への感染防御という点については無頓着だったのではないかと考えられる部分もある。

さらに、当時の結核に対する治療としては、空気の良いところで、安静にして日光浴などを行い、栄養のあるものを摂取することのほか（福田真人、1995）、転地療法としては、夏は北の山岳、冬は南の海岸が推奨されていたとのことである（田澤鐮二、西川義方ら、1930）。

これを踏まえて、盛岡滞在中に水戸部アサイに渡すことを前提に書かれた『ノオト』をみると、「みな健康さうだ、こんなところにいたら健康になるよりほかに 仕方がないのだらう」という北方の盛岡という土地に対する期待や、「泡立てたオムレツ 無花果の砂糖煮 苺のジャム 家で焼いたフランスパン 熱いココア」といった栄養物の摂取などが記されていて、立原が当時の一般的な闘病法に従っていた記載が見られるし、立原が8月から9月にかけて北方の山岳に近い信州や盛岡に向かい、その後11月から12月にかけて南国の海辺の長崎に向かったというのも、当時の転地療法の原則に従った行動と考えることもできる。

この他、この時期の書簡で注目されるのは、心理的に危機的な状況において自然が美しく見えるという、立原独自の感性をうかがわせる表現である。

たとえば、上記のように結核と診断されたショックが書かれた

7月21日の生田勉宛書簡に、「けふの夕映はほんとうに、旗のやうに赤く美しかつた。僕の頬には涙がすぢをひいていた（略）追憶がみなこはれて、ただ、ゆくすえが約束もなしに、とほくまで見渡せる」と、心理的に危機的な状況における風景の美しさへの言及があるほか、8月2日の中村真一郎宛書簡では、「自分の病んでいる身体をときどき忘れてしまふくらい僕のこころはいま生き生きとしているやうだ」と、ここにも、病によって賦活される独特の心理状態が書かれている。

また、8月6日の柴岡亥佐雄宛の書簡に、「僕は病気するとき、空や雲にこんなに親しい」とあり、8月16日の神保光太郎宛書簡でも、「病ひと回復の日にはいつも世界が無力になり、美しく高められます」とあるなど、病によって自然に対する感受性や親和性が増している様子うかがえる。

事実、このような感性に基づいて書かれたと思われる書簡には、「夕空に雲のかけていた美しい色の営みは夏の死にふさはしい飾でした」（9月7日深沢紅子宛）とか、「僕の肉体が、青い翼の疲れきつた鳥のやうに、この机に向っている」（10月19日堀辰雄宛）などがあって、これらの書簡では、書簡自体が美しい詩的な表現に満ちている。

もう一つ、結核患者としての立原の支えとなったと思われるのは、当時の戦時下という状況である。

第1章で「私もまたひとりの武装せる戦士！」（昭和13年1月下旬芳賀檀宛書簡）と自らを規定していたように、立原は、自分は創作によって戦いに参加する戦士であるという態度を、10月1日の深沢紅子宛書簡に、次のように記している。「このごろどうやら落ちついた、といふより、ここで僕のたたかひが前進しはじめました。北京よりもつととほいところへ、僕は行かねばなりません。而もあやぶんだりためらつたりは、もう出来ません。僕も一しよ懸命にたたかひたいとおもひます。たたかひはどこでもいまはある。北京の方にも、こちらにも」。

このように、立原は、戦地に赴く友人の戦いと、自分の病との戦いを、「死に近い」という同一の観点からみることで、結核という当時の死病と戦う姿勢を強めているのである。

第4章 研究4：長崎旅行

（昭和13年11月24日～同年12月15日）

1、目的

立原は、昭和13年11月から12月、すなわち結核で亡くなる4ヶ月前から3ヶ月前の20日間、医師であり友人でもあった秋元寿恵夫の制止を振り切って、長崎への旅行を断行している。立原は、その間、自ら『ノオト』と呼ぶ手記と全26通に及ぶ書簡を書いているが、これらの資料に基づいて、立原の病を論じた研究は見当たらない。

そこで本章では、立原の最後の旅行となった長崎旅行について、上記の資料に基づいて検討を加える。

2、対象と方法

対象：長崎へ旅立った翌日、すなわち昭和13年11月25日に始まり、長崎から帰京した翌日、すなわち同年12月15日までの約20日間の見聞や心身の状態を日記形式で記した『ノオト』及び長崎旅行中に書かれた全書簡27通。

なお、この『ノオト』は、恋人水戸部アサイに渡すことを前提に、中版のノートブックに色鉛筆で書かれたもので、字数はおよそ5万4千字、原稿用紙に換算すれば130枚程度の量である。筑摩書房版の『立原道造全集』では、第3巻の119頁から175頁までの57頁にわたって掲載されている。

方法：上記の資料を、『ノオト』と書簡に分けて、それぞれの記述の中から、身体症状、精神症状、死生観、創作に関する記述を抽出して、長崎到着前の10日間（昭和13年11月25日～12月4日）と、長崎到着後の11日間（12月4日～12月15日）の2つの時期に分けて検討した。

略年譜 4 ; 研究 4 の対象とした期間 (下記、網掛け部分)

大正3年	7月	東京都日本橋区橋町で生まれる。
大正8年	8月	22日、父親が死去。
大正10年	4月	久松尋常小学校に入学。
昭和2年	4月	東京府立三中(現、都立両国高校)に入学。
昭和4年	3月	22日、従妹の立原婦志子が虫垂炎で急逝。
		20日頃から同年7月まで「神経衰弱」で休学。
昭和6年	4月	第一高等学校理科甲類に入学。
昭和9年	4月	東京帝国大学工学部建築科に入学。
昭和12年	3月	東大を卒業。石本建築事務所に就職。
		夏頃、徴兵検査を受け、痩せすぎのため三種不合格となる。
	10月	上旬、肋膜炎により発熱。安静を命じられ、11月上旬まで約1カ月、自宅で静養する。
	11月	19日、信濃追分油屋旅館の火災に遭遇する。
昭和13年	1月	芳賀檀から『古典の親衛隊』を献本される。
	4月	水戸部アサイと交際を始める。
	7月	中旬、「肺尖カタル」のために石本建築事務所を退職し、大森で療養生活を始める。
	8月	上旬、信州の追分に一カ月ほど滞在。
	9月	中旬から盛岡へ旅立つ。
	10月	19日、痔ろうの治療のため帰京。
	11月	24日、長崎への旅に出る。
	12月	4日、長崎着。翌5日夜に発熱して武医院に入院。
		13日、長崎を出る。
		14日、帰京。
		15日、東京帝国大学附属病院を受診。
		26日、中野区江古田の東京市療養所に入院。
昭和14年	3月	29日、病状が急変して呼吸困難で、息を引き取る。

3、結果

I、『ノオト』

1) 長崎到着前 (昭和13年11月25日～12月4日)

『ノオト』の記載によれば、立原は、昭和13年11月24日に東京を出発して、翌25日には奈良と京都、27日舞鶴、28日松江、12月2日博多、4日佐賀、12月4日長崎と、主に友人宅を訪ねながら、10日間かけて長崎に到着している。

この時期の『ノオト』には、身体症状に関する記載が10カ所あるが、そのうち呼吸器症状に関する記述は、11月30日の「傷はやぶれたまま、不安なたよりない身体を旅に駆っている。このごろは咳がやまない、咽喉がどうかなっているのだらうか」という一カ所があるのみである。

一方、呼吸器以外の身体症状を見ると、「すこし疲れているやうな気もする」（11月26日）と、出発間もないころから疲労感を訴えているのをはじめ、「僕はけふはかなり疲れている」、「僕は今極端に疲れている」（11月28日）、「夕ぐれに、またあたらしい疲れがかさなる」（11月29日）、「すこし疲れて、頭は重い」（11月30日）、「いま僕は疲れたのだらうか」（12月1日）、「疲れはうづたかく積ってしまつて、朝になつてもまだそれは消えやらない」、「頭はぼんやりしていて眠いやうな疲れた気持だ」、「僕の疲れは僕を神経質にし行動をとりとめなくしている。すこし不安だ」、「こんなくらい心で疲れた心で、たうとう行き着くのだらうか」（12月4日）など、頭重感や覚醒時の不快感を伴う疲労感が繰り返し記されている。

こうした疲労感は、基本的には重症化した結核によるものと考えられるが、この時期の『ノオト』における精神症状に関する記載をみると、11月25日の「僕はさびしい。そしてすべてがむなし。何かささへるものを失つたやうな気がする」、「こんなにむなし、あせつた心」という喪失感を伴う虚しさや焦燥感や、11月27日の「ゆふべ夜中に眼がさめて、どんなによるべなく僕の心はふるへていただろう」という不安を伴う睡眠障害、12月3日の「僕の悲しみがいつか虹のやうに空にひろがつて行つてしまつた。おそらく頬に涙のながれたまま」という嘆きや涙もろさなどの記述がみられるため、この時期の立原は抑うつ的な精神状態にあったことが推測される。

つまり、長崎到着前の『ノオト』に、繰り返し記される疲労感は、結核による身体症状であると同時に、抑うつ症状の一つとしても考えられるが、その一方で、思考・行動の抑制や希死念慮などの記述がみられないことから考えると、いわゆる内因性のうつ病とは異なる反応性・一過性のものと思われる。

もう一つ、この時期の『ノオト』で目立つのは、「どこかへかへりたい」（11月25日）、「もうかへれない、いつかかへることがゆる

される日の来るまでは」、「僕はかへりたい。旅が落ち着かない」（11月27日）と、家に帰りたいたいという思いが繰り返し記されていることである。長崎旅行は医師の制止を振り切って断行されたものであるにもかかわらず、立原は、旅行当初から旅に出たことを後悔するような記述をしているのである。

特に注目されるのは12月1日の山陰滞在中の記載で、「いま僕はこの地方の人たちに対して極端に不信である。無智で残忍な容貌と、その聞きとれない会話と、他人のことをふみにじる行為とで、事実のなかでそれらの悪徳の一切が、この地方の人たちから僕に与えられる」と、山陰の人々に対するの不信と嫌悪感を募らせている。

立原は本来、「人の悪口を一つも云ふ事なくして美しい事許りが彼の周りに輝いていた」（小場晴夫、1939）とか「優しくて親切で、思いやりが深くて」（中村真一郎、1971）と評されるような人柄だったとされているが、この時の立原は被害妄想を思わせるような他者への不信を語っているわけで、これらは、当時の立原が平素とは異なる精神状態に陥っていたことを示唆する記述である。

なお、立原の性格については、友人たちが、「痩せ型、長細い声の好青年」（江頭彦造、1973）、「幼い時から、羞にかみ屋で、温順しい、運動嫌ひな子供であった」（神保光太郎、1939）、「教授を始め級友皆から親しまれていた。又親しい柴岡君や僕等とはよく歩いた」（小場晴夫、1939）、「自意識は人一倍つよく感受性は鋭い、それでいて何かしら憑かれていた」（江頭彦造、1939）などと証言しているため、細長型の体格をした統合失調気質ではあっても、孤独や非社交性が目立つタイプではなく、温和・善良・敏感などの特徴が目立つようなタイプだったようである。

いずれにしても、長崎到着前の立原は、抑うつ的な精神状態をベースに、一時的ながら周囲に対して被害妄想的な不信感を抱くようになっていたのだが、長崎に到着する12月4日には、「長崎は、今、たいへんに高い意味を持つて僕の身邊にやつて来た」、「わ

すれていた希望や夢がはげしく波立つて来る」と、長崎という土地への期待からか、それとも被害妄想的になっていた山陰から逃れたという思いからか、いささか気分が高揚している様子がかがえる。

しかし、こうした長崎という土地と仕事への期待は、それほど永くは続かなかった。

2) 長崎到着後 (12月4日～15日)

(1) 身体症状

前記のように、長崎到着前の『ノオト』には、身体症状としては、疲労感以外には、一カ所、咳嗽の症状のみしか記されていなかったのに対して、長崎到着後は、呼吸器症状を含む多彩な症状が記されるようになる。

まず、長崎に到着した12月4日には、「疲れてしまっていて何をすることもかんがへない」と、倦怠感と精神機能の低下が記され、翌12月5日にも、「眠りにくかった一夜のあと、はげしい疲れのなかで眼をさます(略)疲れてしまつて起き出る元気がない」と、強い倦怠感や睡眠障害、覚醒時の不快感などが記されている。

さらに同日、「熱っぽくつかれた身体」を引きずりながら、憧れの異人館を見た立原は、「もし僕がこのなかでくらすなら僕の身体はめちやくちやになつてしまふ。僕が長崎まで、あれほど夢みながら自分で出来ると信じてやつて来たこの生活の夢が僕の身体につきあたつてくだけてしまつた」、「待つていたものは、僕の肉体の限界だつた。そしてその限界は残酷に僕を拒絶する」と、自分の病んだ身体ではこの異人館で暮らすことは出来ないと、落胆している。

そして、この12月5日、「夕方、熱をはかると、38度5分あつた。一急に出たのではないらしい。疲れたとばかりおもつていたのが熱だつたのだらう。病人になつてしまつて武医院に入院する

」と、38度台の発熱をしたために、石本建築事務所の同僚である武基雄の実家である武医院に入院することになるが、この入院については、「おそろしくばかばかしいことだ。そしてアスピリンをのんで汗をいっぱいかいて寝ている。なぜこんなところへ来ているのだらう。そしてなぜかうして寝ているのだらう」と、立原にとっても、長崎到着直後の入院という事態は想定外の出来事だったようである。

武医院に入院した後の『ノオト』には、発熱の状況や自覚症状が細かく記されているが、入院2日目の12月6日には、「朝、熱は7度6分にさがつている。食欲はすこしもない」、「熱は7度2分。ひるよりも2分高い」と、微熱や食欲不振などの症状が書かれている。

また、この日の夜間になると、「はげしく咳入ると、また咽喉がやぶれたらしい。たくさんに血が出てやまない。山陰から出つづけた咳が、いつか、かういふことになるだらうとおもっていたが、おもっていただけでことなく過ぎるやうにもうきめていた」と、大量の咯血があったことを記している。

なお、ここには、「山陰から出つづけた咳」と記されているため、『ノオト』には記されていないものの、実際には長崎到着前から咳嗽に悩まされていたことがわかる。

そして、この長崎での咯血については、「はじめてのときよりもずっと分量が多いが、もうおそれていない。しかしなかなか止まらないので不安だ。あまりに赤く鮮やかなので見とれるくらいだ。気泡はひとつもはいつていない」、「出たあと一時咳がとほのいている。咳が出かけたりまたつい咳をしてしまふと不安だが、だんだん分量がすくなくなつてただ唾のやうなものだけになる」と記されているように、「あまりにも赤く鮮やかなので見とれる」、「気泡はひとつもはいつていない」など、5カ月前の昭和13年7月に初めて血痰を咯出して憔悴しきっていた時に比べれば、自らの咯血を冷静かつ客観的に観察できるようになっている。

入院 3 日目の 12 月 7 日には、「朝の熱は 7 度一なかなか下つてくれない。咽喉の血もまだすこしづつ出る。困ったことだ。それから気がつくと、関門海峡をこえてから一度も便通がない。下関のデパートの便所であの朝いい気持に大便をして以来九州ではまだ一度もないから、一週間近くなるのだらう。それからもうひとつ、あの傷が、このごろすこし痛んでいることだ」と、発熱、喀血、便秘、痔ろうなどの症状が記されているが、この時の立原は、「身体のいけない側はそれですべてだ。…このどれかがひとつなくなればそれだけ元気になるだらう。自分で病人らしくなつてしまつて意気消沈して寝ているのでいけないのだ。しつかりと立ち上りさへすれば元気にすぐなれるだらう」と、どれか一つの症状でもなくなれば元気になるのと、この時点でも事態を楽観視して、精神力でこの危機を乗り越えようとしている。

入院 4 日目の 12 月 8 日には、「熱が朝から 7 度 6 分ある、ゆふべねむれなかつたからだらう」と、不眠と発熱があるために「ぢつとしていた」が、「夕ぐれ 8 度も熱がある。それに今までにないくらいにたくさん血痰が出る。これも咽喉かららしく、気泡ははいつていないから、それ程心配はない」と、かつてないほど喀血しているが、喀血は咽頭からのもので、肺からのものではないから心配はないと記すなど、ここでも事態を楽観視する姿勢を崩してはいない。

こうした状況の中で、立原は、「僕はここへ来て病気になるはなし何度も何度もおもひ出していた」と、実は彼自身も長崎旅行前から病が悪化する予感を持っていたと記し、「東京で病気をしたい、こんなところで病気をしているのはやりきれない」と、病氣療養のためには東京の方がいいと考えて、帰京する意思を示している。

入院 6 日目の 12 月 10 日には、「けさは熱が 6 度 9 分一きのふとおなじ経過をくりかへしてくれればいとおもっている。だが、ゆふべも夜中にまた血が出つづけて、一時たいへんに不愉快だ

った」と、朝には微熱になったものの、前夜は喀血して苦しんだと記している。

そして、入院7日目の12月11日以降は、体温に関する記載は無くなるが、12月13日に長崎を発って帰京する電車の中の状態について、「今は疲れきつて、かうして書いていると腕のつけねのあたりがかすかにだるい、あまり身体にはよくないだらう」、「僕の眼はしつこく景色を追ふがどこかやはり疲れはじめてしまった！腕がうまく動かない」、「平野のなかをいま佐賀に向つて走っている。こんなところでもう疲れはかなりはげしい」と、激しい倦怠感が記される一方で、「僕はいまかうしているとそんなに弱っているのだとは信じられない」と、自分が弱っているという自覚には乏しい。

翌12月14日には、やはり東京へ向かう電車の中で、「夜つびて不眠と、かすかな胸の疼痛と、夜中ごろまでは奇妙な寒気に苦しめられていた」、「疲れきつている」と、不眠や胸部痛、悪寒、倦怠感に苦んだ様子が記される一方で、「ぢつとしてうちにいて元気になれたらなるまで待たう。そしてあたたかくなつてから盛岡へ行かう」と書くなど、一時的に休養した後は新たな旅に出たいと、やはり楽観的な見通しを述べて、自分が衰弱しているという自覚は乏しい。

立原が病の重さを自覚するのは東京駅に着いた後で、「これほどみんなが心配しているとはおもはなかつた（略）僕の病気はひよつとしたらあれに値するくらい十分に心配なのかもしれない」と、周囲の心配を目のあたりにして初めて事態の深刻さを実感し、12月15日には「僕はおとなしくして早く健康にならう。それよりほかには何もない」と、静養する覚悟を決めている。

(2) 精神状態

上記のように、長崎でかなりの喀血をしながらも、結核の症状にはあくまでも強気だった立原だが、その一方で、当時の精神状態をみると、長崎到着翌日の12月5日の『ノオト』には、「眠り

にくかった一夜のあと、はげしい疲れのなかで眼をさます」、「疲れてしまつて起き出る元気がない。不安にさびしい」と、睡眠障害や覚醒時の不快感などが記されている。また、「心も身体にまけないくらい、疲れてしまっているのではないかしら」ともあるため、やはり、憧れの長崎に到着した後も、身体症状の悪化も影響してか、抑うつ的な精神状態が続いていた様子うかがえる。

また、ようやく長崎にたどりついたというのに、「母のところへかへりたい」という、帰京願望も述べられている。

そして、前述のように異人館に失望した立原は、「僕には冬枯れの南方のすべてが索漠として見えはじめた。この町のメインストリートに出たとき、いらだたしいまでになしなかつた(略)しかし、やはり僕はこの町で自分が生活出来るかどうかわからない」と、長崎で生活を営む自信を喪失している。

さらに、入院3日目の12月7日には、「僕は光を失っている」、「救ふ者の地盤をさへ失つたことは暗黒だ」という暗鬱とした気分や、「木枯らしの音が頭をかきむしつてすぎて眠られない」という不眠、「僕の生はもうをはりに近いのではないだらうか」という将来への悲観も記されるなど、依然として抑うつ的な状態が続いていたようである。

しかし、入院4日目の12月8日に、「僕は、もうすこししたらかへつて行かうとおもふ」と、帰京することを決めた後は、翌9日に、「さまよひはもうをはつた。家郷のない者は家郷をさへつくらねばならない。そのつくり出す愛情の世界を信じるがいい」と、安定した精神状態になり、10日には、「ゆふべ久しぶりに眠りがふかく」という不眠の改善も記されているため、このまま旅行を続けるか否かをめぐる迷いが大きかつたようである。

さらに、12月12日には、「明後日の夕ぐれにはおまへをびつくりさせることをたのしみに描きながら、出来るかぎり心も身体もしづかにしている」とあるなど、立原の抑うつ症状は帰京を決意した後には急速に改善している。

ただ、長崎を発った12月13日に、「僕は疲れから気持がすこし高ぶっているのか。すべてに憤りに近い反発を感じる。とりわけ長崎の言葉に一異質のこの言葉で表現されるものは何か僕には悪意にみちている」とあるように、山陰同様、長崎の人々に対してもやはり言葉遣いを直接的な契機とした被害妄想的な不信感を抱いている。

(3) 死生観・創作

長崎時代の『ノオト』で、上述のような抑うつ症状に加えて注目されるのは、およそ10日という短期間のうちに、様々な死生観が記されていることである。

まず、入院した翌日の12月6日には、それまでの人生を振り返って、「僕は愛されてばかり生きて来た。—ほんとうにわがままに！ 愛されないことなんかゆめにもおもはなかつた」と、これまで自分は愛されて生きて来たことを認めた上で、長崎旅行は、そんな自分の「気取ったしやれた観念的な夢想」だったと否定的に捉えている。また、「何ゆえのさまよひ、何ゆえのこの不安、それを自分で人工してはいないか、もつともつとしつかりと生きることをわすれて、これに来たのではないか。生きることはこのやうな仕方ではあり得ないのだ。人はさまよふことをゆるされた生物ではない」と、これまでの彷徨の人生を否定するような記載もみられる。

加えて、立原自身が帰京を決意した翌日の12月9日には、「かへつてひとつの家をつくつて、そのまはりに庭をつくり、その内に家具をおき、つつましやかな愛情で、生活をきづくことにあるのだとおもふ。宇宙的なさすらひや大なる遠征よりも、宇宙を自分のうちにきづくこと。せまい周囲に光を集注すること、それが僕の本道だとおもふ」と、彷徨よりも家庭を作ってその中でささやかな生活を築くことが大切であるとして、「きづつき破れ去る浪漫家の血統にはつひに自分は属さない」と、自分は彷徨してロマンを追い求めるような存在ではないという自覚に至って

いる。

さらに、翌 12 月 10 日には、長崎で得た創作観の結論として、以下のような文学観・人生観が記されている。「しづかな、平和な、光にみちた生活！ 規律ある、限界を知つて、自らを棄て去つた諦めた生活、それゆえゆたかに、限りなく富みゆく生活—それを得ることの方が、美しい。そしてそのとき僕が文学者として通用しなくなるのなら、むしろその方をねがふ」。

ここでの立原は、平和や愛情のうちに生きることを求めるようになっていたが、それから 2 日後の 12 月 12 日には、「東京に今帰つてゆくことも自然で何の滞りもない…僕のかはいさうな運命！ しかしそれもかはいさうといふよりはなつかしく僕は信じる」と、やはり彷徨するよりも家郷である東京へ帰ることに、肯定的な意味を見出している。

以上のように、立原は、それまでの盛岡や長崎への彷徨を否定し、家庭を築いて身近な人々の中で愛情に包まれて生きていくことこそが自分の生きるべき道だと考えることで、自分が東京に帰らなければならないという運命を肯定的に受け止めるようになっていたが、そこには、家族や恋人と離れ、周囲の反対を押し切って長崎旅行をしたものの、長崎でも抑うつ的な症状に悩まされ、入院を強いられるほど身体状態も悪化したという、自分の病に対する認識の甘さへの後悔の念がはたらいていると思われる。

その他、創作に関する記載としては、12 月 7 日の喀血の後に、「この病室をすこし離れて、中庭に、楠の樹が風に鳴り棕櫚の樹が生えているのを見るときに、この南方をもつと知りたいたと、おもひはじめる…楠の樹のよく光る細い葉のなかには見知らない音楽がかくれているやうにおもはれる」とか、「僕の生はもうをはりに近いのではないだらうか、不吉なおもひが僕を暗がりのなかで責め立てた。ときどき、それとは全く関係なしに自分の書きたいとおもっている作品が明るい文体で読むやうに過ぎて行つた」と記すなど、自らの生の終わりを予感するような状況の中で、自

然に対する親和性が増し、自分のあるべき創作の姿がほの見える様子がうかがえるなど、ここにも危機的な状態で創作意欲が向上するという病跡学的な現象が認められる。

Ⅱ、書簡

1) 長崎到着前

長崎到着前の全書簡16通の中で身体症状は6通に記されているが、11月25日の小場晴夫宛書簡に、「すこし 疲れている」と、疲労感が記されているのをはじめ、「僕は疲れていてうとうとと眠い」「僕は疲れながら 海を見ることを望みつづけた しかしそのうちに待つことにさへもう疲れてしまった」（11月28日水戸部アサイ宛書簡）、「気持は何か疲れていてすこし暗澹としている」（12月1日武基雄宛書簡）、「山陰では何かしら疲れてしまった」（12月2日入江雄太郎宛書簡）、「山陰ではへんに疲れてしまっていた」（12月2日武基雄宛書簡）など、長崎に着くまでの書簡には、『ノオト』と同様、ほぼ毎日のように疲労感が記されている。

また、「山陰の旅は悲しく、北方の海は激しく僕を打つ」（11月30日武基雄宛）、「旅は切なく悲しい」（11月30日生田勉宛）、「気持は何か疲れていてすこし暗澹としている」（12月1日武基雄宛）、「一日一日心ぼそい旅だった」（12月2日入江雄太郎宛）と、悲しみや心細さ、暗澹とした気持、不安なども記されていて、これらの記載も、『ノオト』にみられた抑うつ的な症状と合致する。

すなわち、『ノオト』に見られた呼吸器症状はほとんど記されず、疲労感や抑うつ的な心情が強調されるという傾向は書簡にもそのまま当てはまるのだが、その一方で、12月3日の水戸部アサイ宛書簡には、「きのふの夕ぐれから 不意に 身体のなかに力が湧いて来て何かいい仕事をしたくてたまらなくなつた 長崎に着いて 部屋を片づけたら 何か大切な仕事をはじめようとおもふ それをおもふと 胸がわくわくして来る 何かいいことが出来さうだ」と、仕事への意欲を記し、同日の深沢紅子宛書簡

にも、「いつもいつもやりそこなつては、そこから立ち上らうとしています。立ち上れもしないままやりそこなひます。しかし元気だけではなくしません」と、元気である旨を伝えているなど、女性宛の書簡では、おおむね健康状態は良好であることが強調されている。

2) 長崎到着後

長崎到着後の書簡には、身体症状は全 11 通中 10 通にされているが、まず、到着翌日の 12 月 5 日の武基雄宛の書簡では、「けふはすっかり元気なく、何する気力もない」、「僕はだいぶ不安な身体を持ちあつかっている。下宿がきまつたら一週間はすくなくとも静かにしていようとおもふ」と書きながらも、「すぐ元気をとりもどせる自信はあるから心配しないで下さい。君が帰省するころには山へでもどこへでものぼる」と、身体的な不安はあるものの、すぐに回復するという自信を記している。

12 月 5 日の夜中に武医院へ入院した後には、入院 2 日目の 12 月 6 日に 3 通の書簡を書いているが、その内容は、「こちらへ来て熱を出してねてしまつています、心ぼそいかぎりです」、「熱を押して風の強い、こちらでは珍しい暗澹たる曇天の下を訪ねたことも、拒絶される理由でした。西山手の平凡な下宿にきめるか、ひよつとしたら東京へかへるかも知れません」（矢山哲治宛書簡）、「疲れきつて今は熱を出して臥ている」（小山正孝宛書簡）、「すっかり疲れきつていて熱が出て今は臥てをります」（山根薫宛書簡）と、発熱や倦怠感といった症状のために帰京する可能性を示唆しているものの、入院したことは記していない。

入院 3 日目の 12 月 7 日には、生田勉宛に、「長崎に着いて、病気になる、武君のお父様にたいへんなお世話になつている。来た次の日、熱のあるのをむりに、大浦の方へ家を見に行つたのがいけなかつたらしい」、「観念的な夢想が肉体の限界でくづれたやうな感じだ」と、発熱がありながらも無理して異人館に行ったため

に身体を悪くしたとは書かれているが、ここでも武医院に入院したことまでは書かれていない。

そして、それから3日間の空白の後、帰京を決意した後の12月11日の本田茂光宛書簡には、「十日あまり山陰を旅して来たのが、むりだつたらしく、こちらに来てずっと発熱して病床に控えています」、「春まで滞在のつもりでしたが、もう引上げなくてはなりません。こちらではやはり病気のことが心配なのです。早く元気になりたいものです」と、山陰を旅して無理をしたために発熱して帰京することを伝えながらも、「元気になりたい」という希望も記している。

さらに、長崎を発つ当日の12月13日には4通の書簡を記しているが、そのうちの3通に身体症状が書かれている。

まず、猪野謙二宛書簡には、「鎮まりたいとねがひながら、(略)毎日を病床に控えている」「疲れて唇が乾いて眼が覚める。咳と熱に苦しめられる」と、疲労、口渇、咳嗽、発熱などの症状を記し、太田克己宛書簡には、「長崎に来て一週間あまり病床にいる一友人の家で手厚く看護されてほかにだれ一人知つたひとなくあはれに寝ている」と、孤独で臥床している状態が記されている。さらに、杉浦明平宛書簡には、「長崎に着いて次の日に発病—以来熱と血痰に苦しめられて日が過ぎる(略)疲れがはげしく、唇は乾いている」と、発熱、血痰、口渇感などを書くなど、長崎で咯血した後の書簡は9通あるものの、最も重篤な症状である血痰に触れているのは、この杉浦宛書簡のみである。

一方、こうした状態に関する見通しとしては、入院2日目の12月6日の小山正孝宛の書簡に、「なほつたら、また、たよりする」とあくまで治るという見解を記し、入院3日目の12月7日の生田勉宛の書簡にも、「起きられるやうになつたら家さがしをしなくてはならない」とあるなど、これはあくまでも一時的な病であるとして、事態を楽観視する姿勢を崩していない。

さらに、長崎を発つ12月13日の猪野謙二宛書簡は、「僕は僕

の運命を愛する」と結び、同日の太田克己宛の書簡も、「僕の奇妙なゲニウスのみちびきのままに僕の生は変転してやまない」と結ぶなど、自らの運命に従うという考えを表明している。

そして、立原最後の書簡である 12 月 13 日生田勉宛書簡でも、「のりこえのりこえして生はいつも壁のやうな崖に出てしまふ」、「たうとう この南方は僕に何ものも与えてくれなかつた しかし僕は何かを自分のなかにきづき得た」とあるなど、ある意味では挫折に終わった長崎旅行も肯定的に捉えようとしている。

このように、長崎での立原の書簡は、激しい症状にさらされながらも、喀血という事態には一書簡でしか触れず、その代わりに、希望や意欲を掲げる姿勢が顕著で、こうした危機的な状況における楽観的な態度は、『ノオト』の記載と一致している。

4、考察

以上が、長崎旅行前後の立原の『ノオト』と書簡に記された身体症状と精神状態、死生観、創作観の概要であるが、これらの記載からうかがえる抑うつ的な傾向と結核患者としての側面に検討を加える。

1) 抑うつ患者としての側面

今回の検討を通して明らかになったのは、立原が長崎旅行の当初から、従来考えられていたよりもはるかに抑うつ的な精神状態にあったという事実である。

これまで、晩年の立原の精神状態についてはほとんど論じられておらず、わずかに小川和佑（1978）の「7月以降の立原は、その健康の急速に衰えていくに従って鬱症的な症状が彼を暗鬱の世界に誘っていったのではないかと推測できる」という指摘があるのみである。

しかし、この小川の指摘にしても、立原を「鬱症的」とする根拠を「盛岡での不毛の時間と、その時間に書き遺された」と推定でき

る詩的断片は精神の沈滞をあらわにしている」と記しているだけで、長崎旅行中の具体的な病状を示して論じているわけではなく、今回筆者が試みたように、『ノオト』や書簡の記述に基づいて、長崎旅行中の立原が抑うつ的だったことを指摘した研究は、見当たらない。

しかし、今回の『ノオト』と書簡の分析を通じて、そもそも長崎旅行は、結核の悪化を危ぶむ周囲の反対を押し切って強行されたものであるにもかかわらず、立原は出発当初から心身の疲弊感を中心とする抑うつ的な精神状態にあって、それは憧れの長崎に着いた後も変わっていないことが明らかになった。特に、長崎に着くまでの立原は、『ノオト』では、呼吸器症状には1回しか触れていないのに、抑うつ的な精神状態には繰り返し言及するなど、この時期の立原は、少なくとも主観的には、結核患者というよりも、むしろ抑うつ患者であったことがわかる。

こうした立原の抑うつ的な傾向は、前述のごとく思考・行動の制止や希死念慮がみられないという特徴からしても、内因性のものとはみなしがたいが、それでは小川の言うように、健康状態の悪化に伴うものかと言えば、結核の病状が比較的落ち着いていた長崎到着前の方が悪く、長崎で結核が悪化してからはむしろ改善していることを考えると、単純に結核の悪化ばかりが原因とは言い切れないように思われる。

また、小川は、立原の抑うつ的な時期を主に盛岡滞在期と捉えているが、実際に盛岡滞在中に書かれた書簡をみると、「そんなにこの町は いいところだった！ 近かつたら なほいいのかしら とほいから こんなにいいのかしら」（10月17日水戸部アサイ宛）、「こちらに来て一月あまり、たのしい日をすごしました」（10月19日石中象治宛）などとあって、そこに抑うつ的な様子は見られない。

さらに、盛岡から帰京した昭和13年10月15日から11月24日までの東京滞在期に書かれた書簡をみても、「うれしくて、歩いて

います。僕の一日はうるさい位、大勢の友人と会ふのです」、「僕の胸はそのだれにもまけないくらい高鳴つています」（昭和13年11月6日加藤健宛）とあるように、ここでも抑うつ的とは言いがたい様子うかがえる。

つまり、立原晩年の抑うつ的な状態は、従来指摘されていたように盛岡滞在期ではなく、長崎旅行を始めてから長崎で結核が悪化して帰京することを決めるまでのおよそ2週間に生じたものというのが、今回の検討を通しての結論である。

なお、立原が、医師や友人の制止を振りきって長崎旅行を断行した理由について、『ノオト』には、「夢みていた、そしてはつきりとそれが僕の夢だと気づかずに、大切に大切にしていた、こんなひとつの生活の夢を、しとげようといふねがひ」（12月5日）というロマン的な願いや、「東京でのくらしのことをなつかしがつて思ひ出さなければ、あのくらしはあまりにもよくないくらしだったともいへる」（12月6日）という東京での暮らしが健康に良くないという理由が書かれている。

しかし、その一方で、12月8日の『ノオト』には、「僕はここへ来て病気になるはなし何度も何度もおもひ出していた」とあるように、長崎旅行は秋元の再三の制止を振り切って断行されたもの（小場晴夫、1973）であり、立原にあっては、旅行前から長崎で病が悪化する予感もあったことを考えると、立原の心の中では、行きたい気持ちと止めたい気持ちが併存していたというのが実情に近いと考えられる。

事実、松原一枝の回想『立原道造さんと矢山哲治さん』（1971）によると、九州で識り合った同病者の矢山哲治に対して、立原は病気の療養に就いて、「屈力点の問題なんだよ」と語り、矢山も「臨界点の範囲内だったら、どんな仕事をしたって構やしないんだ」とその言葉に同調したものの、立原はそれに対して、「ぼくは近頃、ちょっと自信をなくしちゃった」と語っていたように、九州へ渡って、矢山と会った12月2日の時点で、すでに立原は自信の喪失

を打ち明けている。(なお、この回想からは、立原が結核性の病があることを同病の矢山に伝えていたことが示唆される)

しかも、立原は、旅行開始早々から、「かへりたい」と記し続けているほか、12月10日には、「長崎に辿り着かずに途中でかへつた方が一層よかつたにちがひない」と、旅行を後悔する記載もあり、一旦帰京を決意した後は抑うつ症状が改善している。

以上を考慮すると、立原の抑うつ状態には、長崎行きに対する不安を無理に抑え込んで旅行を強行したことから生じた部分もあったのではないかと推測される。

また、もう一つこの時期の精神状態で注目されるのは、山陰や長崎の人々に対する被害妄想を思わせる不信感である。これは、「その聞きとれない会話」(12月1日)とか、「異質のこの言葉で表現されるものは何か僕には悪意にみちている」(12月3日)などの記載があることから、立原の言葉に対する鋭敏な感性が影響しているのかもしれないが、『ノオト』には、「柑橘類を口にするとその冷い液にも悪意を感じた」(12月7日)、「僕の静かな観照は移動警察の人に妨げられた。何かこの病人がとりわけわるいものに見えるのだらうか」(12月13日)など、当時の立原が妄想的になっていたことを示唆する記述も認められるため、非定型的ながら、抑うつ状態に伴って一過性に被害妄想が出現した可能性も考えられる。

2) 結核患者としての側面

以上のように、長崎旅行中は抑うつの的になっていた立原であるが、当時の『ノオト』や書簡からうかがえる立原の結核への対応の特徴は、結核に対してはあくまでも強気かつ楽観的で、結核と闘うという姿勢が顕著なことである。

深津要(1975)によれば、抗結核薬のなかった戦前の我が国では、「精神力」で結核菌に立ち向かうという考えが主流をなしており、立原のような、結核を気持ちで乗り切ろうとする対応は、当時としては必ずしも珍しい対応ではなかったようである。

しかし、立原にこのような姿勢を持たせた背景には、立原が、結核を患って命を脅かされながらも創作することを、自分の中で「たたかい」と位置付けていたことも影響しているのではないかと考えられる。というのも、12月9日の『ノオト』には、「ノヴァリスの青い花より、むしろゲーテのマイスターに本道を見つける。僕が戦士としてあるのもさういふ場所に於てではないだらうか」と、自分はノヴァーリスのように個人的な夢の中で生きるよりも、ヴィルヘルム・マイスターのように社会の中で働き、戦う「戦士」であるという自覚が記されていて、昭和13年1月下旬の書簡に書かれた「私もまたひとりの武装する戦士！」(芳賀檀宛)という自覚を、この時期になっても持ち続けていたことがうかがえるからである。つまり、立原は創作による戦いを社会の中に位置付けているのだが、その一方で、長崎で入院した後の『ノオト』には、毎日詳らかに、結核の症状が記されている。

当時の立原が入院しなければならないほど激しい病状にさらされながらも、毎日『ノオト』を記していた理由としては、12月8日に、「このノオトをつけるのをすこしやすんでしづかにしていよう。これをつけるとついろいろなとほくへ行つてしまふかんがへを知らず識らずに育ててしまふ」、「いつから僕はこのノオトを持つやうになつたか、なぜ持たずにはいられないのか—をかんがへるとそれが簡単にはやめられさうもない」と記しているように、『ノオト』は、自己管理の道具として、自らの心身の変化を客観的に記して把握することでそれに対抗し、孤独の中で自らを奮い立たせる心の拠り所として重要なものであったためと考えられる。

しかし、こうした重要な意味を持つ『ノオト』でも、立原は、「結核」や「咯血」という言葉を一切使っていない。

『ノオト』をみると、12月9日に「けふ医者に正確に診断してもらふことになつた ひよつとしたらしばらくこのノオトを書くことも禁じられるやうになるかもしれない」と書かれているた

め、長崎の病院でも、医師から結核という診断が伝えられなかったとは考えにくい。『ノオト』には、病気について医師が何と説明したかや、それを聞いて立原がどう思ったかなどは、一切書かれていない。また、ここまではっきりした症状が現われれば、立原自身が結核についてあれこれと考えるのが自然であろうが、この段階に至っても、立原は「喀血」や「結核」という言葉を使っていないのである。

その理由として考えやすいのは、「喀血」や「結核」と書くことによる周囲からの差別や偏見に対する恐れや、自分を結核患者として認めたくないという心理、『ノオト』を渡す直接的な相手である恋人水戸部アサイを心配させたくないという配慮などであるが、もう一つ考えなければならないのは、いわば結核患者であることを売りにしていた堀辰雄に関する評論でも、立原が「結核」という言葉を一切使っていないことである。また、立原が梶井基次郎や長塚節などの結核を患った文学者を評する文章や、結核を患っていた知人に関する書簡をみても、「結核」や「喀血」という言葉は使われていない。

さらに、立原自身の詩の中でも、死や病に関わる表現をみると、「あなたのしづかな病と死は 夢のうちの歌のやうだ」(『みまかれるうつくしき人に』)、「死ぬ朝は、母が彼のためにうたつてきかせた。(略)母が、うたひやめたとき、窓かけが風に揺れてゐた。少年は死んでゐた」、「かなしみはしづかであれ」(『初冬』)、「外の昼間の光で甘い死のなかに休む姿は美しくかがやく」(『不思議な川辺で』)など、死はあくまでも静かで美しく、しかも、漠たる病によってもたらされると記されているだけで、そこに具体的な病名などは出てこない。

つまり、立原の詩には、病や死というものを描く際にも具体的な病名を挙げないという特徴がうかがえるのであって、こうした立原の特徴を考えると、『ノオト』という小川和佑(1978)が指摘するような創作ノートの側面を持つ作品にも、結核や喀血という

言葉を使わなかったと考えるのが、自然ではないかと考える。

第5章 研究5：長崎旅行以降

(昭和13年12月14日～昭和14年3月29日)

1、目的

本章では、昭和13年12月14日に長崎から帰京後、翌昭和14年3月29日に亡くなるまでの約3カ月半、立原がどのように自らの結核や死と向き合ったかについて検討を加える。

2、対象と方法

対象：長崎から帰京した後に書かれた立原の全書簡1通、ならびにこの時期の立原を見舞った友人たちの回想録10篇と書簡3通。

方法：上記資料の中から、立原の結核の症状や精神状態、死生観や運命論、創作などに関連した記載を抽出して検討を加えた。

略年譜5：研究5の対象とした期間（下記、網掛け部分）

大正3年	7月	東京都日本橋区橋町で生まれる。
大正8年	8月	22日、父親が死去。
大正10年	4月	久松尋常小学校に入学。
昭和2年	4月	東京府立三中(現、都立両国高校)に入学。
昭和4年	3月	22日、従妹の立原婦志子が虫垂炎で急逝。
		20日頃から同年7月まで「神経衰弱」で休学。
昭和6年	4月	第一高等学校理科甲類に入学。
昭和9年	4月	東京帝国大学工学部建築科に入学。
昭和12年	3月	東大を卒業。石本建築事務所に就職。
		夏頃、徴兵検査を受け、痩せすぎのため丙種不合格となる。
	10月	上旬、肋膜炎により発熱。安静を命じられ、11月上旬まで約1カ月、自宅で静養する。
	11月	19日、信濃追分油屋旅館の火災に遭遇する。
昭和13年	1月	芳賀檀から『古典の親衛隊』を献本される。
	4月	水戸部アサイと交際を始める。
	7月	中旬、「肺尖カタル」のために石本建築事務所を退職し、大森で療養生活を始める。
	8月	上旬、信州の追分に一カ月ほど滞在。
	9月	中旬から盛岡へ旅立つ。
	10月	19日、痔ろうの治療のため帰京。
	11月	24日、長崎への旅に出る。
	12月	4日、長崎着。翌5日夜に発熱して武医院に入院。
		13日、長崎を出る。
		14日、帰京。
		15日、東京帝国大学附属病院を受診。
		26日、中野区江古田の東京市療養所に入院。
昭和14年	3月	29日、病状が急変して呼吸困難で、息を引き取る。

3、結果

1) 昭和 13 年 12 月～昭和 14 年 1 月

立原は、長崎から帰京した翌日の昭和 13 年 12 月 15 日に東大病院で診察を受けて直ちに絶対安静を命じられ、12 月 26 日には中野区江古田にある結核専門病院・東京市療養所に入院した。

この時期の立原自身の資料としては、12 月 25 日の口述による小山正孝宛の書簡が 1 通あるのみで、そこには、「写真ありがたう今は返事が書けない 強くしつかりとする様に 光の方に顔をむける様に すべてが よくいく様に願っている（注；小山は内々に、立原に悩みを相談していた）僕も早く一さう元気になる」と記されている。

この書簡の宛先の小山正孝は、立原が盛岡滞在中に識り合い、11 月 11 日に東京滞在中の立原から「死に近いのかも知れない」という死の予感が記された書簡を受け取った友人であるが、これを見ても、立原は、絶対安静の状態ですぐ江古田の療養所に入所した翌日に書いた書簡でも、「元気になる」という希望を記していることがわかる。

療養所での立原は、絶対安静の状態ですぐ読書や手紙も禁じられ、また日記なども現存していないために、上記の最後の書簡以外に立原自身によって書かれた資料は明らかになっておらず、立原の病への処し方は、友人たちの回想録や書簡などからうかがう以外にない。

そのうち、小場晴夫の回想『立原のこと』（1973）からは、水戸部や家族に対する江古田の療養所の医師や、第 2 章で検討した友人で医師の秋元寿恵夫の立原の病状に対する説明の一端をうかがうことができる。

江古田の療養所に入院した最初の頃の立原は、小場に、「症状が落ち着き、5 月になったら暖かい房州にでも転地療養するのだ」と話し、小場も「それを期待していた」と、入院当初の立原は 5 月には退院して房州に転地療養するという心づもりでいたようだ

が、そんな小場に、1月のある日、水戸部アサイから急に呼び出しがかかる。水戸部は、小場に会うと、「医者の方で家族も自分も楽観していたが、看護婦などの話では彼の容体はとても悪いようで心配でならない」と語って、小場に「立原の身体を良く知っている東大医学部の友人（その友人とはトラブルがあり、絶交状態である）に、本当のところをきいて貰いたい」と依頼したという。

そのため小場は、水戸部からの要請に応じて、東大医学部の友人のいる「東大の病理教室に訪ね、率直に立原の病気のことをきいた」。

ここで水戸部が立原の病状への説明を求めたという東大の病理教室にいる東大医学部の友人とは、この回想では明らかにされていないが、血清学先行の基礎医学者で結核診断時から立原の病状を知っている秋元寿恵夫のことを指すことは間違いないが、この時、秋元は、小場に対して、「彼の病気は2年前頃からすでに始まり、療養を幾度もすすめたがだめだった。今となっては、結核菌はおそらく彼の全身をおかしており、回復はとても考えられない」と説明し、「現代医学の最善をつくしてもか」と念をおしても「だめ」との答えで、「今は立原の気持を押しきっても付添っている水戸部さんへの感染を避けることが、ヒューマンなことだと思う」と語ったとされている。

この言葉を受けた小場は、立原と小場の共通の友人である柴岡亥佐雄と生田勉に相談をした。小場としては、「残るわずかな日の間に、死と直面して、彼に書かせたかった」が、それについては柴岡と生田の反対でやめ、秋元の語った立原の病状を家族には知らせずに、水戸部にはすべてを話すことにして、その役目を小場が引き受け、小場からの説明を聞いた水戸部は「一日中泣きつづけ、承知した」と記している。

なお、この小場の回想では、秋元が「2年前頃」から立原の病気が始まったと語っていたと記しているが、同回想録には、昭和13年4月から始まった水戸部との交際も「2年前」からと回想さ

れているため、秋元が立原の病気が始まったとする「2年前頃」とは、水戸部との交際が始まったのと同様、昭和13年7月に、立原が血痰を喀出した時のことを指すと思われる。

一方、水戸部アサイは、その回想録『療養所にて』（1939）の中で、江古田の療養所での立原が、「御自分の身体を心配しない様に心配しない様にと心掛けて居らっして熱が高かったりして私が心配さうな顔を見ると『これは病気の波なんだよ。心配する事はないよ暖かくなれば元気になるから』などとおっしゃっていました」と、高熱に悩まされながらも、水戸部を安心させるような言葉を掛けていたと記している。

しかし、1月14日頃に附添の小母が来て、水戸部と看護を交代した後から、「だんだん病状は悪くなって行くばかり」だったため、水戸部が医師に尋ねたところ、医師からは「既に手おくであった事やもうほとんど絶望である事」を、告げられたと回想しているが、小場の回想と照合すると、この時、水戸部が相談した医師とは、水戸部や家族に楽観的な言葉を語っていた江古田療養所の医師ではなく、秋元寿恵夫であったことになる。

さらに、水戸部は同じ回想録の中で、立原が、「御自分では『よくなる』と強く信じて居らっしゃる」と、あくまでも回復の希望を持ち続けていたと記しているが、こうした立原の楽観の背景には江古田の療養所の医者の楽観的な説明も影響していたものと思われる。

しかし、立原が師と仰いでいた詩人の室生犀星は、回想録『立原道造』（1958）の中で、昭和13年末に立原の痩せ衰えた手を見せられた際の様子を、「それは命のたすからない人の手であって、たすからないことを相手に知らせるための手であり、本人はそれでいて未だ十分にたすかる信仰を持っている手でもあった」と記して、立原は希望を掲げていたものの、客観的に見れば絶望的な病状であった様子を見抜いている。

一方、長崎旅行中に立原に会った矢山哲治は、昭和14年1月1

日の立原宛書簡（矢山哲治、1987）に、「お母様からお手紙頂きました（略）あなたは病気になるんじゃないかと ぼく そればかりあんじていたのですでした でもお手紙にて安心しました」と書いているため、立原の母が矢山に出した書簡には、江古田の療養所の医師の説明にしたがって、友人を安心させるような文面が記されていたことになる。

しかし、盛岡で立原と共に過ごした深沢紅子(1950)は、立原の母から、昭和13年12月に、「道造こと重病にて今日午頃中野療養所に入院いたします。是非お会いいたしき由本人にかわつてお願い申し上げます」という手紙をもらったと回想しているため、実際は、立原の母は、立原が重病であることは承知しながらも、立原の意思に沿う形で、相手によって手紙の書き方を微妙に変えていた様子うかがえる。

2) 昭和14年2月～3月

神保光太郎は、『立原道造の生涯』（1939）の中で、昭和14年2月に立原が第一回中原中也賞を受賞したことについて、「この病床の間に彼を喜ばした最大のもののひとつは中原中也賞第一回が彼に決定した報せであつたらう。その賞金百円をどう使はうかと彼の母と話し合った時、『さうだ、恢復祝ひにしよう。一人一円なら百人も呼べるね。』と云っていたさうだ」と、回想している。

立原は、2月に入っても快気祝いのことを語るなど、楽観的な姿勢を持していたことになるが、さらに、この回想には、「療養所では、医師は殆んど絶望と、見舞に行ったわれわれに語ったが、本人は案外元気で、いろいろなわがまを云ったり、お菓子の注文をしたりしていた」ともあって、この証言によれば、水戸部に立原の正確な病状が知らされたこの時期になると、療養所の医師も立原の友人らに「殆ど絶望」ということを伝えていたことになるが、立原はそんな病状の中でも、少なくとも友人に対しては元気に振舞っていたことがわかる。

そして、盛岡での滞在先を提供した深沢紅子は、回想録『風立

ちぬ』(1950)の中で、付添婦が深沢に向って、「御病人はとてもお悪いのですよ」と、立原の病状の悪化を伝えたことや、2月中旬に堀辰雄が立原を見舞った際にも、「昨日は立原さんの先生がいらしたので御食事もおいしいと言つて沢山めし上りましたが、もう御腹もひどく悪いので普だんはほんのちよつぱりしかお上りにならない」と、食欲も低下していたという付添婦の言葉を伝えている。

また、深沢は、2月以降に、「元気のいい看護婦さんが来て『立原さんしつかりしなくちやだめよ。』等と慰めたりすると『ああくたびれる。』と弱いため息をついていました。其頃は見舞の人達に会うのもほんとうに耐えられない風にみえました」と、立原の衰弱著しい様子を記している。

ただし、そうした状態になっても、深沢には、『頭が痛い、鼻がつまる、手をあててください』とたった一度そう言った事がありました。それから次第に咳や痰が激しくなつて見るからに苦しうになつても其後は病気の苦しさをうつつたえた事は有りませんでした」と語る様に、病状が重くなつても辛いという訴えはほとんどなかったという。

このように、終末期に近い状態になつても、周囲の人たちには元気で気丈な側面を示していた立原だが、堀辰雄に対してだけは、「僕も堀さんのやうに死と遊んでいたいんだけど、とても苦しくて…」(堀多恵子『たった一年のおつき合ひ』、1959)と話していたことは、注目される。

堀辰雄が昭和14年4月3日に葛巻義敏に宛てた書簡(堀辰雄、1978)には、「立原君がもう絶望だときいてから3度しか見舞に行けず、しかもその一度は安静時間で面会できずに帰つてきてしまった」と記されているため、堀が入院中の立原と話すことができたのは2回のみと考えられるが、堀多恵子の回想では、立原が上記の言葉を堀に語ったのは、「ドイツ堇の花束と西欧菓子の折箱」を土産に持ってきた時とされている。また、深沢紅子の回想では

、2月中旬に堀が立原を見舞った時には、バラの花と鳥をお見舞に持ってきたと記されているため、堀が立原からこの言葉を聞いたのは、堀の書簡(堀辰雄、1978)に、「きのふ女房と一しよに立原君を見舞にいつてきた 大へん悪いらしいのでびつくりした」(昭和14年2月9日津村信夫宛堀辰雄書簡)とあることから、バラの花を持ってきた2月中旬ではなく、2月8日のことと推定されるが、立原が病床で苦しみを語ったという資料はこれのみである。

3) 昭和14年3月

水戸部は、『療養所にて』の中で、昭和13年末から昭和14年3月までの立原を振り返って、「三月の間絶対安静のまま居らつして咳と痰で夜お眠りになれなかつた事なども度々あつた様でしたけれど一言も苦しい等とはおっしゃらず『僕は病気になつてから何かしらえらくなつた様な気がする』などとおっしゃいました」と、立原は最期まで苦しいとは言わずに、「病気になってから何かしらえらくなつた」と、病の明るい側面を見続けたと伝えて、この回想録を「御自分では『治らない』などとは少しもお考へにならなかつたでせうに…」と結んでいる。

また、神保光太郎は、『立原道造の生涯』(1939)の中で、「病臥中、一日、鏡で外を見るたのしみのあまり夢中になり、容態をわるくした」と、この時期にも無茶をして病状を悪化させたと述べているが、そうした無茶のせいもあってか、「医師の予想では、早くも、夏までは保つといていたさうだが、その予想を裏切り」、3月には亡くなったとしている。

一方、『古典の親衛隊』の著者の芳賀檀も、『リルケと立原道造』(1958)の中で、「中野の病院に訪ねて行つてみると、もう手のつけられぬくらい病気が昂進していることがわかりました。高熱の上に、絶えずこみあげてくる痰をひつきりなしに吐いていました」と、高熱や激しい喀痰に苦しむ様子を記して、「死はもう『地獄』のやうな現実で、苦しみは見ていただけませんでした」と、立原

の末期の様子を回想している。

そして、亡くなる一週間前の昭和 14 年 3 月 22 日に、若林つやが立原に何か欲しいものはないかと尋ねた時、立原は次のように答えたという。「一度づつでおしまひになる小さな缶詰をいくつも欲しいのです。(略)それがサンタクロースのおぢいさんが持って来るやうな袋の中に入っていると一さううれしいな」、「それからもう一つ欲しいものがあります。五月のそよ風をゼリーにして持って来て下さい(略)非常に美しくておいしく、口の中に入れると、すっととけてしまふ青い星のやうなものも食べたいのです」(若林つや『野花に捧ぐ』、1939)。

この若林つやの証言をみても、立原は亡くなる一週間前にも「五月のそよ風をゼリーに」という、それ自体が美しい詩のような言葉を遺すなど、最後まで詩人として生きたことがわかる。

また、この頃の立原の死生観については、亡くなる数日前に会った杉浦明平が『立原道造の思い出』(1956)において、立原は、「やっぱり生きているのはいい」と、結核末期の症状に苛まれながらも、生を肯定する見解を最期まで示し続けたと記している。

そして、3月29日の午前2時20分、立原は、親類にも友人にも看取られることなく、息を引き取ったのである。

4、考察

以上のように、立原は、昭和 13 年 12 月 26 日に江古田の療養所に入院して 3 月 29 日に亡くなるまでの間も、殆どの人に病に対する楽観的な見通しを述べて未来に希望を掲げる姿勢を貫いていたが、唯一、堀辰雄に対してのみは、死を予覚した苦しみを口にしている。

こうした堀には病の苦しみを語りながら、水戸部や深沢らには弱味を見せなかったという事実は、堀に兄事する心の深さと共に、水戸部らに対する配慮を思わせる態度で、立原は死を目前に控えた重い病の中でも、親しい知人への配慮を怠らなかったことがわ

かる。

深沢紅子が、「元気のいい看護婦さんが来て『立原さんしつかりしなくちやだめよ。』等と慰めたりすると『ああくたびれる。』と弱いため息をついていました」と語るように、看護師には弱音を吐いていることから、立原が特に友人・知人たちには殊更元気な様子を見せていたことがうかがえる。

このような結核末期の症状を呈しながら、友人らに弱音を吐かず、明るい未来を求め続けた立原の対応には、最期までも詩人として生きたいという美意識によってなされたという要因のほか、立原自身が江古田の療養所での医師の楽観的な言葉を信じて、自らの病状を楽観視していたことも影響していたものと思われる。

また、注目されるのは、江古田の療養所の医師が、患者本人のみならず患者家族や友人にも、結核末期の病状を正確には説明していなかったという当時の結核に関する医療事情である。立原の場合からも、結核が不治の病であった頃は、結核は現在の癌以上に恐れられていた（深津要、1975）という状況がうかがわれる。

なお、結核の感染という問題に関して、小山正孝は、立原に痰壺を渡そうと手を伸ばしたところ、立原は、「いけない」といって制した（小山正孝『詩人薄命』、2004）というから、それまでは結核の感染に比較的無頓着だったように見える立原も、最期の病床では感染の危険性に配慮していた様子がうかがえる。

第 6 章 研究 6 : 詩への影響

1、目的

本章では、立原道造が昭和 12 年 10 月に肋膜炎と診断されてから昭和 14 年 3 月に亡くなるまでの全期間に発表した詩に、彼の病がどのような影響を及ぼしたかについて、結核患者としての側面や、立原の死生観、疾病観の変遷などを念頭に置いて、検討する。

2、対象と方法

対象：立原が肋膜炎と診断されてから亡くなるまでの 1 年 5 カ月の間に発表された全詩 19 編。

方法：研究 1 ～研究 5 までの結果を踏まえつつ、詩の中から立原の結核が彼に及ぼした影響と思われる表現を抽出して検討を加える。

なお、『立原道造全集 1』（角川書店版、1973）の解題に、創作時期が明記されている詩は、『夜に詠める歌』（昭和 13 年 1 月）、『草に寝て…』（昭和 13 年 6 月）、『風に寄せて』（昭和 13 年 8 月）、『麦藁帽子』（昭和 13 年 8 月）、『唄』（昭和 13 年 10 月）、『魂を鎮める歌』（昭和 13 年 11 月）の 6 篇であるが、この他に、中村真一郎（「立原道造論」1968）は、立原が昭和 13 年 8 月に『優しき歌』と題する詩集を刊行する予定でいたとしているため『優しき歌』は、昭和 13 年 8 月頃書かれたものと推定している。

また、角川書店版の『立原道造全集』の編者である鈴木亨は、「国文学解釈と鑑賞別冊『立原道造』」の中の、「やさしい春の歌」という論考（2001）の中で、『メヌエツト』の創作時期を、昭和 13 年 10 月と推定している。

すなわち、立原が昭和 12 年に肋膜炎と診断された後に発表された詩 19 篇の中で制作時期がほぼ確定しているのは 8 篇であるが、以上の詩の創作推定時期と発表雑誌については、表 3 に示した。

3、結果

まず、昭和 13 年の『四季』1月号に発表された『初冬』には、「けふ 私の中で ひとつの意思が死に絶えた…」、「やがてすべては諦めといふ絵のなかで 私を拒み 私の魂はひびわれるであらう」と、これまで立原を支えていた「意思」が「死に絶え」、「魂はひびわれる」など、油屋火災で九死に一生を得たことを友人たちに訴えていた当時の暗い想念が表現されている。

また、立原はこの詩の中でハイダーという画家の『諦め』という絵に言及しているが、この絵は、昭和 13 年 2 月上旬の杉浦明平宛書簡に、「カルル・ハイダアといふ 19 世紀の画家が描いた絵に『諦らめ』といふ絵がある(略)僕は、写真版のその絵を見たとき、突然 何かを告白したい欲望を感じた」とあるため、この時期の立原の精神が諦めをテーマにした絵を詩の題材にしたほど共鳴していたということは、立原が「諦念」を主題とする堀文学にも共鳴していたことを、示唆するものでもある。

次に、昭和 13 年の『文芸』1月号に発表された『晩秋』でも、「おまへが 友を呼ぼうと 拒まうと おまへは 永久孤独に餓えてゐるであらう」と、「永久孤独に 餓えてゐる」と、やはり暗い心情が歌われている。

しかし、昭和 13 年 1 月に『一高同窓会 会報』に発表された『ふるさとの夜に寄す』は、昭和 12 年に手記に記された作品であるが、暗い心情は歌われていない。

昭和 13 年の『四季』2月号に発表された『歌ひとつ』では、「私の生は 一羽の小鳥に しかし すぎなくなつた！」という表現があって、昭和 13 年 1 月 11 日の小高根次郎宛書簡に、「一羽の小鳥に すぎなくなつた 僕のちひさな生命が(略)生きること を かんがへました」と書いた死生観がそのまま表現されている。

昭和 13 年 2 月に発表された『午後に』では、第一連で、「ある

日 悲哀が私をうたはせ 否定が 私を酔はせたときに すべ
てはとほくに 美しい 色あひをして 見えてゐた」と、悲哀や
否定という心情に基づいて美しい色あいが見えていたという、あ
る種の病跡学的な感性が歌われている。

昭和 13 年 2 月に発表された『歌ひとつ』は、実際には、昭和
12 年の前半に書かれた作品だが、元の詩に、「暗い心の夕ぐれに
」という副題が書き加えられて発表されたもので、当時の立原が
、「暗い心」を強調する形で詩を発表した様子がうかがえる。

昭和 13 年に発表された『何処へ?』には、「深夜 もう眠れな
い」という睡眠障害や、「星すらが すでに光らない深い淵を 鳥
は旅立つ—（耳をそばだてた私の魂は 答のない問ひだ）—どこ
へ?」と、深夜に暗闇の中を飛び立つ鳥に自らをなぞらえて、そ
の行き先を「どこへ?」と模索する様子が歌われており、立原の
不眠や精神的な彷徨が表現されている。

昭和 13 年 1 月に制作され、同年の『文学界』3 月号に発表され
た『夜に詠める歌』には、「耳のなかでながくつづく木精のやうに
、心のなかで、おそろしいまでに結晶した『あの瞬間』が、しか
し任意の『あの瞬間』が、ありありとかへつて来る」と、PTSD の
フラッシュバックを思わせる表現がみられるほか、「私はしづか
に死ぬ。そして死んでゐる」と、死を身近なものとして捉えてい
る。

昭和 13 年の『四季』4 月号に発表された『わがまどろみは覚め
がちに』には、その題名や「夜の明け? 断れた眠り…」という
表現に、熟眠障害や早期覚醒を思わせる睡眠障害が歌われている
。

昭和 13 年の『新潮』4 月号に発表された『或る晴れた日に』で
は、「おそろく すべての生は死だ」と、生と死とを同一視するよ
うな死生観が歌われている。

昭和 13 年の『四季』8 月号に発表された『初夏』では、「私の
まはりに 傷つきやすい 何かしら疲れた世界が ただよつて

る」という、傷つきやすい倦怠感が歌われている。

以上のように、昭和 12 年 10 月から昭和 13 年 8 月までに発表された詩の 11 篇中 8 篇に抑うつ的な心情が描かれていて、これは、当時の立原の精神状態が継続的に暗かったことを、書簡とともに、うかがわせる現象である。

また、この時期の立原は、暗澹とした詩を描くことで、自らの内面的な苦しみを表現しているが、これらの詩には、肋膜炎という言葉はもとより呼吸器症状についての記載がないことも、特徴的な所見である。

他方、研究 1 で示したように、昭和 13 年 4 月に水戸部アサイと交際を始めた後の書簡は明るく前向きなものに変化しているが、こうした精神状態を反映してか、昭和 13 年 6 月に制作されて『むらさき』8 月号に発表された『草に寝て…』という詩では、水戸部アサイと軽井沢に旅行をしたことを題材に、「私たちの心は あたたかだつた 山は 優しく 陽にてらされてゐた 希望と夢と 小鳥と花と 私たちの友だちだつた」と、それまでの詩とはうって変わって、明るい心情が歌われるようになる。

しかし、その後昭和 13 年 7 月中旬に血痰を喀出して結核と診断された立原が、8 月頃、友人たちに向けて、それとわからないような形で死の予感を書簡に書くようになったことは研究 3 で示した通りだが、結核と診断された後に書かれた作品をみると、昭和 13 年 8 月に制作されて、『コギト』9 月号に発表された連作『風に寄せて』の「その二」では、「僕らは すべてを 死なせねばならない なぜ？ 理由もなく まじめに！」と、おそらくは戦争を想定した不条理な死の運命を歌っている。

一方、昭和 13 年 8 月に制作されて、『映画朝日』9 月号に発表された『麦藁帽子』では、「八月の金と緑の微風のなかで 眼に沁みる爽やかな麦藁帽子は 黄いろな 淡い 花々のやうだ 甘いにほひと光とに満ちて それらの花が 咲きそろふとき 蝶よりも 小鳥らよりも もつと優しい愛の心が挨拶する」と、

美しい風景の中で「優しい愛の心が挨拶する」と歌われているが、これは、「最後の幸福な日々」であった追分での生活で、友人たちに「お別れの挨拶」をしていたことの暗喩とも考えられる。

また、昭和 13 年 8 月に制作されて、『四季』10 月号に発表された『優しき歌』の『一、朝に』は、水戸部との愛を歌った連作であるが、そこには、「傷ついた 僕の心から 棘を抜いてくれたのは おまへの心の あどけない ほほえみだ」とあって、これは結核という診断に傷ついていた立原の心を癒してくれた水戸部への感謝を歌った詩と思われる。

事実、7 月末頃に書かれたと推定される手記『火山灰』には、「僕はおまへとこの部屋にいて、あの日以来すっかり僕をめちやめちやにした出来事を語りあひながら、あの傷からやうやくのがれ出る。(略)おまへがいなかつたら 僕はどうなつていたかわからない」と、水戸部への感謝が記されている。

その後、昭和 13 年 9 月 15 日から 10 月 19 日まで盛岡に旅した立原は、そこで「豊穰の美」に触れ、文学者として新しく生きたいと書簡に記していたが、昭和 13 年 10 月に制作されて、『こをとろ』(11 月 15 日)に発表された『唄』という詩には、「林のなかで 一日中 私は うたをうたつてゐた 《ああ 私は生きられる 私は生きられる……私は よい時をえらんだ》」という表現がある。

これは、盛岡で生命力に満ちた豊穰の美に触れて、詩人として新しく生きられると思った期待をそのまま詩に表現したような表現である。また、この詩の中で、「よい時をえらんだ」というのは、立原が、戦時下という時代を生きていることを、自らが結核を病みそれと闘いながら創作をする上で、「よい時をえらんだ」と表現しているとみることできる。

立原が最後に発表した詩は、昭和 14 年の『文芸汎論』1 月号に発表した『メヌエツト』で、鈴木亨は立原がこれを書いたのは雑誌の締め切り前の昭和 13 年 10 月と推定しているが、その内容は

次の通りである。

まず、第一連では、「やさしい鳥 やさしい花 やさしい歌 私らは 林のなかの 一軒家の にほひのよい春を 夢みてゐた 鄙びた 古い 小唄のやうに」と、やさしい鳥や花に囲まれた林の中での春を夢みていたという状況が歌われている。

次に、第2連では、「青い魚 光る果実 ながれる雲 星のにほひ ちひさい炎」と、立原がこれまで好んで題材にしてきたものを列挙して、第3連で、「風が 語つて 忘れさせてゆく 淡い色のついた春を 夢みてゐた ひとつの 古い 物語のやうに…」と、それらを「風」が「忘れさせてゆく」と歌われている。

そして、最終連では、「夜窓の星と 置洋燈の またたきが 祝つてくれた ひとつの ねがひ 優しい鳥 優しい花 優しい歌」と、東大で建築科を選ぶ以前は天文学科志望だったという立原が好んだ夜空と星やランプが、優しい鳥や花や歌への願いを「祝つてくれた」という優しさに溢れた夢が歌われている。

この詩は、全4連からなるソネット形式の作品で、素直に立原の願いが歌われているものの、結核による生の終わりを予感してか、それらのすべてが過去形で書かれているため、「風が 語つて忘れさせてゆく」という喪失感を歌った詩とも解釈することができる。

4、考察

以上のように、立原が肋膜炎を病んでからの詩では、友人宛の書簡等に記されていた死生観や暗い想念、幸福感や満足感などがほぼそのまま表現されており、そこに、一見結核とは無関係に見える詩にも、結核の影響が現れていることがわかる。

つまり、この時期の立原の詩には、咳嗽や喀痰といった症状や病名などを直截的な形では表現することはないものの、病によって得られた死生観や心情を歌にしているという特徴がみられる。

なお、肋膜炎と診断される前の立原の詩でどのような死生観が

歌われていたかを、昭和12年9月以前に発表された詩を時系列に沿ってみていくと、立原が詩を発表し始めた昭和10年に『四季』第4号に発表された『小さな墓の上に』では、「その頃、僕には死と朝とがいちばんかがやかしかつた（略）死は飾られた花たちの柩のなかに、しづまりかへつてめいめいの時間を生きてゐたから」と、死をかがやかしい肯定的なものと捉えている。

その後、立原の従妹にあたる立原婦志子の死を歌った詩で、昭和11年2月号の『ゆめみこ』に発表された『葬送歌』には、「死ぬとき うつすら笑つたといふ一」とあることや、昭和11年7月号の『未成年』に発表された『みまかれる美しきひとに』では、「あなたのしづかな病と死は 夢のうちの歌のやうだ」と歌われるなど、虫垂炎で急逝した従妹のイメージに基づいて、死は静謐で美しいものとして歌われている。

このことは、昭和11年7月11日の猪野謙二宛書簡に、「幻像とこの村と結びつけていた明るい美しい死」とあるように、立原が詩作の心象風景とした追分村には、彼に「明るい美しい死」というイメージをもたらしという側面もあったようである。

また、昭和11年の『四季』21号に発表された『逝く昼の歌』という詩では、「どうして生きながらへてゐられるのだらうか 死ぬのがただ私にはやさしくおそろしいからにすぎない」と、例外的に死の恐ろしさを歌っているものの、同時に死を「やさしい」ものとして捉える死生観も示している。

さらに、肋膜炎と診断される直前の昭和12年『四季』8月号に発表された『不思議な川辺で』でも、「おまへは死んでゐる。外の昼間の光で甘い死のなかに休む姿は美しくかがやく」と、死は甘美なものとして描かれているほか、ここでは、「おまへの死」という二人称の死として自分自身とは距離を取って歌われている。

このように、肋膜炎と診断される以前の立原の詩では、死はおおむね美しい他者のものとして描かれていたのに対して、今回検討したように、油屋火災に遭遇して以降に書かれた立原の詩では

、一転して、死は暗いものとして描かれるようになる（肋膜炎と診断後、昭和12年12月頃までは安静のためもあってか、詩は発表されていない）。

つまり、肋膜炎という診断や油屋火災という体験をしてからの立原の詩は、それまでのように「美しく明るい死」とは異なる、生を希求し死を畏れる想念や死生観を詩に描くようになっている。

ただし、昭和13年6月に制作された『草に寝て…』以降、すなわち水戸部との交際後に制作された詩は、それ以前の詩より明るくなっていることには、水戸部アサイという存在の大きさがうかがえる。

また、昭和13年7月中旬に結核と診断された影響という点では、結核と診断されて建築事務所を休職せざるを得なくなったことが、結果として各地への旅行や旅行中の『ノオト』などの創作を可能にさせたという側面もあって、詩の数も、休職前の10ヶ月間に書かれた作品は、草稿詩5篇、発表詩10篇だったのに対し、休職してから長崎から帰京して絶対安静を命じられるまでの5ヶ月間に書かれた詩は草稿詩40篇、発表詩7篇に及んでいる。

すなわち、創作された詩の数は単純計算で、結核診断前の月平均1.5篇から診断後の9.4篇へと急増しているのである。

これは、休職によって自由な時間を与えられたことのほかに、生田勉が昭和13年8月の回想(1978)として、「死ぬと決まればそれ迄に徹夜を続けて傑作をつくり置かねばならぬ」とあるような、結核診断によって死に直面したことによる創作意欲の向上という要因もあったのではないかと考えられる。

これに加えて、立原は、『古典の親衛隊』の中の「危険のある所、救ふ者又生育する」という言葉に自らの創作の拠り所を見出しているため、この言葉に触発されるような形で、人生の危機的な体験こそが創作の源になりうるという病跡学的な考え方に促された側面もあるように思われる。

一方、立原は長崎で未発表の詩『南国の空青けれど（仮題）』を書いていて、この絶筆詩について、須藤松雄（1979）は、立原の理想に叶った詩と評し、吉田繁（1985）も、立原の最高傑作とするなど、この作品は高い評価を受けているが、その全文を引用すると以下の通りである。「南国の空青けれど 涙あふれて やま
ず 道なかばにして 道を失ひしとき ふるさと とほく あ
らはれぬ 辿り行きしは 雲よりも はかなくて すべては夢
にまぎれぬ 老いたる母の 微笑のみ わがすべての過失を
償ひぬ 花なれと ねがひしや 鳥なれと ねがひしや ひと
りのみ なになすべきか わが渴き 海飲み干しぬ かなたに
は 帆前船 たそがれて 星ひとつ 空にかかる」。

この詩は、新生への希望に溢れて長崎へ旅立ったものの、長崎で病が悪化して入院したため、それまでの彷徨を否定する形で、母親への思いや自らの悲しみを率直に歌った詩であり、南国での悲しみや心の渴きが率直に歌われていて、立原自身が長崎で感じていた強い悲哀の情が伝わってくる作品である。

第7章 研究7：エッセイへの影響

1、目的

昭和12年10月に肋膜炎と診断された後に書かれた詩以外の作品で、結核との関連で興味深いのは、昭和13年に、雑誌『四季』の4月号（3月20日）に発表された『風信子（三）』と、『四季』の6月号（5月20日）、7月号（6月20日）、12月号（11月20日）に発表された『風立ちぬ』と題するエッセイである。

このうち、『風信子（三）』は、立原と同じ結核患者で、やはり堀辰雄の弟子でもあった野村英夫への書簡と、「正君」という相手に宛てた書簡という書簡形式をとったエッセイであるが、この作品には、堀辰雄の結核についての立原の認識が記されている。

また、この時期に書かれたもう一つのエッセイ『風立ちぬ』は、全体で約16150字、原稿用紙にして約40枚程度の作品で、立原はこの作品について、昭和13年5月29日の笹川美明宛書簡で、「この頃『風立ちぬ』のそばにいて 毎日 ちひさい対話をこころみています」と書いた後、11月22日の山崎剛太郎宛書簡に、「僕は四季で〈風立ちぬ〉と対話していたが、途中でやめてしまひました」と記すまで、書簡だけで9回もその創作状況に触れているため、晩年の立原に重要な位置を占めていたエッセイであることは、間違いない。

なお、最初の『風信子（三）』を、結核という観点から論じた先行研究は見当たらない。一方、『風立ちぬ』に関しては、菅野昭正（1971）、大城信栄（1973）、江頭彦造（1973）、小川和佑（1972年）、菅谷規矩雄（1978）、浜野卓也（1978）、谷田昌平（1983）、小泉美佳（2001）、野村聡（2006）ら多数の論者が堀辰雄からの離別という視点から論じているものの、立原が、昭和13年7月に結核と診断されたことが、執筆中の『風立ちぬ』にどう影響したかを検討した研究は見当たらない。

そこで、本章では、立原の『風信子（三）』と『風立ちぬ』という二つのエッセイに、結核という診断がどのような影響したかを

中心に検討する。

2、対象と方法

対象：立原道造が昭和 13 年に発表したエッセイ『風信子（三）』と『風立ちぬ』。

方法：上記 2 つのエッセイを、結核診断前に書かれた部分、すなわち『風信子（三）』（『四季』昭和 13 年 4 月号）ならびに『風立ちぬ I～VI』（『四季』昭和 13 年 6 月号、7 月号）と、結核診断後に書かれた部分、すなわち『風立ちぬ VII、VIII』（『四季』昭和 13 年 12 月号）二つに分けて、立原の結核に対する捉え方の変化を分析する。

3、結果

1) 結核診断前

立原が結核と診断される 3 カ月前の昭和 13 年 4 月号の『四季』に発表された『風信子（三）』には、「堀さんは、病気の国に旅行しているといふ考への方がひよつとしたら、しつくりする。病気が旅行のやうに見える、そこに堀さんの美しい秘密がありさうだ」と記されていて、立原は、堀の病気は旅行のようなものであるとして、それを堀の「美しい秘密」と呼んでいる。

それに対して、「僕たちは、南と北にそれぞれ旅行はしていないやうだ。たとひ君はそこに行つていよう」とあることから、この時既に鎌倉という南へ旅していた同じ堀の弟子たる野村を含めて、自分たちは「旅行はしていない」つまり、堀のような創作態度を弟子はいまだ身に付けることができずにいると考えている。

このように、『風信子（三）』を書いた時点では、立原は堀の病をテーマにしたような創作のあり方を旅行に例えて、「美しい秘密」と呼んでいるものの、自分の方法はそれとは異なると考えている。

こうした病に基づく創作という堀の考え方は、昭和 13 年 6 月から 7 月に発表された『風立ちぬ』の I～VI でも理想視されていて、特に『風立ちぬ』第 IV 章では、堀の創作について、「この感謝と信頼にみちた饗宴が行はれるために、どの位の深い淵と、寂寥とが、あつたかの問ひはすでに無力である。なぜならば、僕らは涙の築かなかつた饗宴を知らない」と、堀辰雄の結核患者としての悲しみこそが文学を創作する基盤となっていると考えている。

また、『風立ちぬ』第 VI 章では、堀の文学者としての役割についての立原の理解が、次のように記されている。「『人はどんなに世を離れてくらしても、知らない間に、他の人に役立ついたり、おかげを蒙っていたりするものだ。』と。(略)僕らの詩人もまた、今はそのことを言ひたいのではなからうか。—『あつちにもこつちにも、殆どこの谷ぢうを掩うやうに、雪の上に点々と小さな光の散らばっているのは、どれもみんなおれの小屋の明りなのだからな』とつぶやくときには。(略)非常に感傷的な感想として、ここに詩人が、他の人に役立つていることを、自分の満足といつしよに、弱々しい微笑で告白しているのを見る」。

これは堀の『風立ちぬ』の最後の場面に基づいて、堀は、孤立した生活をしているようでありながら、文学者として人々の役に立っているという自覚を持っているとする見解であるが、さらにここには、「大きな暗い夜、しかしランプがともされている。そして堀辰雄のランプのかなしい光がなぜ共感的なのか、と。慰さめに光がみちるとは、どういふことなのか、と」と、堀の結核患者としての悲しみが、戦時下で死を間近に控えた立原たちには共感的で慰めになるというぐあいに、結核と診断される前の立原は、基本的に堀の文学を評価する立場に立っている。

2) 結核診断後

昭和 13 年の『四季』12 月号に発表された『風立ちぬ』の第 VII 章と第 VIII 章は、山本康治(2000)の執筆原稿の分量に基づいた分

析により、昭和 13 年 11 月中旬、すなわち、立原が結核と診断されて 4 カ月後の東京滞在期に執筆されたと推測されている。

この時期の立原は、結核と診断された後、盛岡滞在中に生命力に満ちた豊穡の美に触れて、「南へのあたらしい旅は夢から実現へ歩みいらうとします。南方で僕は北方で得たものを完成させることが出来るでせうか」(11 月 19 日加藤健宛書簡)と、南方で新たな美を完成させようと長崎行きを計画していた頃である。

そのような背景を踏まえて、立原の『風立ちぬ』を読むならば、第 VII 章の冒頭近くに、「或る晴れた午後に、僕らはふたたび出会った。全く異った仕方で。その日以後、僕らの対話の意味が途絶えたやうに思ふ」という表現があつて、堀辰雄の『風立ちぬ』との対話が中断したという趣旨のことが書かれている。

その理由として、立原は、「僕には、新しい見馴れない力が訪れている。それが僕を、この一冊の本から距離をおき、更に僕が近づくのを妨げている。(略)僕は失なはれたものへの嘆きや悲しみよりも先に、この見馴れない新しい日々を愛する」と、堀の『風立ちぬ』への訣別と、自らに訪れた「新しい見馴れない力」を強調している。

ここでいう「新しい見馴れない力」とは、前記の如く、盛岡で得られた豊穡の美に基づく力、すなわち生の意思に溢れた力と考えるのが自然であり、それは、それまでの「不毛の美」とは異なる新たな文学の可能性と考えられる。

さらに立原は、「ただ僕を救ふために堀辰雄が必要ではなかつたのだらうか。しかし、つひに堀辰雄は僕を救つたか。僕は自分のために突然にこの本が必要になつたあの初夏の午前をおぼえている。おそらく一生涯それを忘れまい。美しい危機が眼のまへに深い淵を開いた」と記しているが、ここで、立原が、堀が自分を救ったか否かにこだわっているのは、『古典の親衛隊』の中の「危険のある所救う者また生育する」という言葉に文学の理念を求めていたためと考えられ、ここでは、堀の『風立ちぬ』が、実際

に人の精神を救う作品たりえていたことが重視されている。

また、ここで立原が言う危機が開けた初夏の午前とは、7月21日の生田勉宛書簡に、「たいへんに自然に、僕のまへには危機がひらけている」、「なんかの理由は健康のこととなっている」と記された肺結核診断時以外とは考えにくいため、結核と診断された後の立原は、堀の文学は結核患者たる自分を救わなかったとして、それまでとは一転、堀文学を否定しはじめている。

そして、これに続く第Ⅷ章では、「『行き止まりだと信じているところから始まっているやうな』(略)あの牧歌的な不毛な美しさのあちらに、僕らの風景のホリゾントの全円があり得るだらうか」と、堀辰雄が『風立ちぬ』のテーマとしているような結核による死を前提とした「行き止まり」から始まる文学を、「不毛」なものとして否定し、自分たちのホリゾント、つまり生の地平はそこには収まらないと、堀の文学的なテーマ自体に疑問を呈している。

さらに立原は、「《風立ちぬ》とは、ためらひなしに発音されない」として、堀の『風立ちぬ』は、「ながれの岸のほとりに立つてながれる水のあとを眼で辿るかほりにながれる水の上に浮かべばいい、とをしえる智恵だらうか。(略)そしてそれは、焔のなかに飛び入ってみづから焼け死ぬ蛾の美しい高まりとも結びつき得る諦念だらうか。僕らの別離の瞬間に不思議に対話はこの言葉の上にためらっている」と、堀文学の底に流れる「諦念」への違和感と堀的世界への別離の気持ちを記している。

つまり、結核と診断される前に書かれた『風信子(三)』では、病や死を前提とする堀の創作態度を「美しい秘密」として憧れ、また、やはり結核診断前に書かれた『風立ちぬ』第Ⅵ章までは、生への諦めを基盤とする堀の『風立ちぬ』を肯定的に評価していた立原であるが、結核と診断された後に盛岡で生命力に溢れた豊穡の美に触れたことによって、堀の諦念とは相容れない気持ちを強めた結果、堀同様に死を前提に書いてきた立原自身の『風立ちぬ』も、「行き止まり」になったと考えられる。

そして、立原の『風立ちぬ』は、「僕らは今はじめて新しく一步を踏み出す。《風立ちぬ》とするしたひとつの道を脱け出して。どこへ？　しかしなぜ？　光にみちた美しい午前に」と、堀的な世界とは異なる新たな創作への出発を宣言して結ばれるのである。

4、考察

以上が立原が結核と診断された前後の創作内容の変化である。こうして見てくると、立原と堀の訣別とは、結核による死を不可避なものとして諦めた地点に立って創作していた堀に対して、結核と診断された後に行った盛岡で、「文学の新生」への希望を新たにした立原は、「生きたい」という思いが強く現れたことによるものと思われる。

なお、『風信子(三)』の中で、「堀さんの作品についてといふより、僕は堀さんの今度の病気を通して、何かそのやうな考へにつきあたっているのだ。病気は聖化だといふ言葉の理解のために」と評するなど、立原は、この時代の結核の一般的なイメージである「貴人病」という捉え方は堀にこそ当てはまると考えているが、「君（注；野村英夫）が半島のはづれでいたはつている病気は決して、それとはちがふ」ともあって、野村や自分の結核は堀の結核とは異なるということも記している。

池田功（2002）は、森鷗外、正岡子規、石川啄木、国木田独歩、長塚節、梶井基次郎などの作家の例を挙げて、結核のロマン化は、結核を患ったこれらの作家にはみられず、堀辰雄にだけ例外的に出現したと指摘しているが、立原は堀の自らの病のロマン化という特殊性を、当時から感じ取っていて、しかもそれは自分とは異なると考えていたことになる。

もう一つ、立原の『風立ちぬ』からは、立原自身の病跡学的な創作観の変遷もみてとることができる。

立原は、昭和6年に『恢復期』を書いた頃の堀の創作を、「自分自身の肉体を風景化する。病の風景画から出発した詩人が初夏の

午後にする美しい責任のない営みである」(『風立ちぬ』第Ⅱ章)と評するなど、病を純粹に風景画として感じて詩を作るという堀的な態度から出発して、第Ⅵ章の死ぬ運命を慰めるレクイエム的なものとしての創作へ、そして、結核と診断された後の第Ⅶ、Ⅷ章では、死ぬ運命を拒否して、あくまでも生を希求する創作へと変化しているが、このように、立原の『風立ちぬ』は、病期の進行に伴う結核患者としての創作観の変遷を示した作品ということもできる。

一方、立原の『風立ちぬ』の中の、病跡学的な表現として注目されるのは、度々、「深い淵」という言葉が使われていることである。たとえば、『風立ちぬ』第Ⅳ章では、「この感謝と信頼にみちた饗宴が行はれるために、どの位の深い淵と、寂寥とが、あつたかの問ひはすでに無力である。なぜならば、僕らは涙の築かなかつた饗宴を知らない」と、堀辰雄が他者を癒すために営む饗宴には涙の築く「深い淵」が必要であったと記しているし、この第Ⅳ章で、「僕らのあの清い液体のふるさとに、すべての者をこはしつくす深い淵を持つ」とあって、清い液体すなわち涙は、「すべての者をこはしつくす深い淵」のために流される、と記している。また、第Ⅴ章には、「ここはもうをはりだ、ここから先は惨落だといふところから始まるゆえに僕らの言葉は橋となる。深い淵の上に架け渡されねばならない」とあるなど、戦争や結核によって死ぬ運命を持つために「深い淵」の上に言葉が橋となって架け渡されねばならない、すなわち悲しみや苦しきという深淵の上にこそ立原たちの言葉や創作が成り立つと記している。

ここで立原が用いている「深い淵」という言葉は、『古典の親衛隊』の中に

、「僕は、自分の深淵の中に飛び込んで、其の暗黒の中より、他の光りを奪つて、君達に捧げねばならない」という表現があることから、自分の深淵こそが他者へ捧げる光の源となるという『古典の親衛隊』の思想の反映とも考えられ、立原の創作の病跡学的

な側面として注目される。

結論

第 1 章：総合考察

1、結核患者としての実態

今回の研究を通じての最も大きな成果は、立原道造の書簡や『ノオト』、立原の友人でもある医師・秋元寿恵夫の講演録などの中に、立原の結核に関わる記述や証言が数多く残されていることに着目して、これまでその実態が詳らかでなかった立原の結核患者としての側面を、具体的な論拠に基づいて、明らかにすることができたことである。序論でも述べたように、従来の立原の年譜や研究では結核に関わる記述自体が乏しく、また、その乏しい記述も不正確か根拠のはっきりしないものが少なくないというのが、実情であった。

しかし、今回の研究では、立原の書簡をはじめとする数多くの一次資料に記されている立原の健康状態やそれに伴う当事者の心理や対応などを分析・検討した結果、従来の年譜や研究には記されていない、以下に示したような事実や可能性を明らかにすることができた。

なお、これらの結果を年譜風に表わしたものが表 4 であるが、今回の研究を通じて明らかになったこれらの結果は、今後、立原の研究や年譜の作成にあたって考慮されるべき基本的な事項と考える。

研究 1：肋膜炎から結核まで

1) 立原は、肋膜炎と診断される約 1 カ月前の昭和 12 年 9 月初旬には既に自らの体調に不安を感じているため、立原の結核患者としての人生は昭和 12 年 9 月に遡る可能性がある。

2) 肋膜炎と診断された昭和 12 年 10 月上旬から 1 カ月間、立原は、多くの友人に病気の様子を伝える書簡を書いているが、肋膜炎という病名や臥床に伴う心理的動揺については書かれておらず、軽い一時的な病として記されている。

3) 肋膜炎という病については、当時の一般常識に従う形で、予後

良好な疾患として楽観的に考えている。

4) 昭和 12 年 11 月 19 日に信州・油屋で火災に遭遇した後、睡眠障害やフラッシュバックなどの PTSD を思わせる症状が出現するとともに、肋膜炎による身体症状は改善した様子が見える。

5) 昭和 12 年 12 月上旬に復職後は、身体症状が悪化し、死を厭って生を願う気持ちが書簡中に表現されるようになるとともに、自らを「生と死の間者」と規定したり、生と死を同等のものともみなすなど、死との心理的な距離を縮めている。

6) 昭和 13 年 1 月下旬に芳賀檀の『古典の親衛隊』を読んだ後は、死を肯定し、死から始まる生という概念を打ち出すことで、死を受容するようになる。

7) 立原は、『古典の親衛隊』の中の「危険のある所救ふ者又生育する」という言葉により、人生における危機的な状況が「救ふ者」としての文学者を生み出すという病跡学的な見解を持つことで、油屋火災の体験を肯定的に捉えようとしている。

8) 昭和 13 年 4 月に同じ職場の水戸部アサイとの交際を始めてからは、死に関わる記載はほとんどなくなり、新しい仕事や旅、健康な肉体を持つ夢想など、現実の中で生きる喜びが記されるようになる。

研究 2：結核診断時の医師の回想

1) 昭和 13 年 7 月上旬に血痰を喀出したが、病院にも行こうとせずに自宅で憔悴しているところを、友人で医師の秋元寿恵夫に見された。

2) 秋元の説得により東大病院を受診し、昭和 13 年 7 月中旬に秋元の東大医学部の同期生である長畑一正と吉利和に診察されて、レントゲン検査と喀痰検査が施行された。

3) 検査の三日後、左肺葉と右肺上部に大きな空洞がある結核という診断が下されたため、秋元は入院を勧めたが、立原はそれには従わずに日本縦断旅行を強行した。

研究 3：結核診断から長崎旅行まで

1) 結核と診断された直後のショックが昭和 13 年 7 月 21 日の生田勉宛書簡に書かれているものの、そこでも結核という病名は書かずに曖昧な表現をしたこともあって、親友の生田勉ですら立原が結核と診断されたことは知らずにいる。

2) 昭和 13 年 7 月下旬の東京・大森滞在中も、結核という言葉避け、病は 2～3 週間で治ると医師に言われたと記すなど、周囲には回復への期待に満ちた明るい書簡を送っている。

3) 昭和 13 年 8 月から 9 月までの信州・追分滞在中も、書簡には風邪や疲労と書く程度で、やはり事実と反して体調の良さを強調している。

4) 追分滞在の終わり頃、生田勉には生の危機をほのめかす悲観的な記述をしているものの、ここでも曖昧な表現に留まっているため、この時点でも生田は事態の深刻さを理解していない。

5) 追分滞在中の立原は、15 人以上の友人を追分に集めて、それとは悟られない形での別れの儀式をしている。

6) 昭和 13 年 9 月から 10 月までの盛岡滞在中も、書簡には体調が良くなっていると書き続けているが、堀辰雄には、疲労感と呼吸困難感を訴えている。

7) 盛岡では生命力に満ちた豊穡の美に触れて幼児のように新しく生まれ変わったと記して、それまでの作品を「いつもの花」とみなし、これからは「ほんとうの自分」や「内部にながれているもの」が存在するような作品を書くことを目指すことを決意している。

8) 帰京後の 1 カ月は身体症状に関する記載は減り、実際の会話でも、結核という言葉避けているが、11 月 11 日の小山正孝宛書簡には、「死に近いのかも知れない」と、死の予感を記している。

研究 4：長崎旅行中

1) 昭和 13 年 11 月 24 日に東京を出発して 12 月 4 日に長崎に到着するまでの 10 日間に書かれた『ノオト』や書簡には、呼吸器症状は一カ所しか記されていないが、疲労感、頭重感、睡眠障害、

覚醒時の不快感、不安、虚無感、焦燥感などの抑うつ的な症状や、周囲に対する被害妄想的な不信感が記されている。

2) 長崎到着後の『ノオト』には、発熱、喀血、便秘、痔ろうなどの深刻な身体症状が記されるようになるが、この時点に至っても「結核」、「肺病」、「喀血」などの言葉は使っておらず、病にはあくまでも強気に立ち向かう姿勢を示している。

研究 5 : 長崎旅行以後

1) 昭和 13 年 12 月 26 日に江古田の療養所に入院後も、友人には楽観的な見通しを述べて未来に希望を掲げる姿勢を貫いているが、唯一、堀辰雄には死を前にした苦しみを口にしている。

2) 亡くなる一週間前にも、「五月のそよ風をゼリーに」という、美しい詩のような言葉を遺すなど、最後まで詩人として生きようとしている。

研究 6 : 詩への影響

1) 肋膜炎と診断される前の詩では、死が「明るく美しい静かなもの」として描かれていたのに対して、肋膜炎と診断された後の詩では、死は暗澹としたものとして描かれるようになる。

2) 全期間を通じて、立原の詩に、「結核」、「肺病」、「血痰」、「喀血」など、結核という病名及びそれを想起させる言葉が使われることはない。

3) 昭和 13 年 1 月以降に発表された詩には、死に対する様々な思いや認識が記されるようになる。

4) 水戸部アサイと交際を始めた昭和 13 年 4 月以降の詩には、水戸部による精神的な救済が表現されている。

5) 昭和 13 年 7 月中旬に結核と診断されて休職する前の 10 ヶ月間に書かれた詩は、草稿詩 5 篇、発表詩 10 篇だったのに対して、休職してから絶対安静を命じられるまでの 5 ヶ月間に書かれた詩は、草稿詩 40 篇、発表詩 7 篇と、顕著な増加が認められる。

研究 7 : エッセイへの影響

1) 結核と診断される以前に書かれた『風信子(三)』や『風立ちぬ

』第VI章では、堀辰雄のような病や死を前提とした創作態度を「美しい秘密」として憧れるなど、結核による生への諦めに基づく堀の『風立ちぬ』を肯定的に評価している。

2) 昭和13年7月に結核と診断され、その後訪れた盛岡で「生きたい」という気持ちが強くなってからは、結核による死を不可避なものとして諦めて自らの病をロマン化するような堀的な創作態度から離別するなど、立原の病に対する態度は、彼の創作態度にも影響を与えている。

立原の結核に関する伝記的な事実や結核患者としての特徴は以上の通りであるが、個々の事項についてはそれぞれの章で検討を加えたので、以下では、今回の研究で明らかになった、結核やそれに関わる言葉の忌避、病と創作の関係に関する病跡学的な側面、自らの死に対する認識と受容の過程という三点を中心に、考察する。

2、結核という言葉の忌避

今回の研究で明らかになった伝記的な事実の中で特に注目されるのは、第一に、立原がその全経過を通して、結核や咯血など、自分が結核であることを示す言葉を使っていないことである。それは、作品のみならず、書簡や創作ノートに至るまで徹底したもので、立原は、忌み言葉のようにこれらの言葉の使用を避けている。

我が国の近代文学史上、結核に倒れた作家は少なくないが、今回、治療薬が開発されていなかった戦前に結核を病んだ作家、すなわち、正岡子規、国木田独歩、長塚節、石川啄木、堀辰雄、梶井基次郎、新美南吉、宮沢賢治の8名について、その書簡や作品における結核や咯血など、自分が結核であることを示す言葉の使用状況を調べてみたところ、立原以外の作家は皆、何らかの形でこれらの言葉を使っているだけでなく、自分が結核であることを直接的な題材として創作活動を行っていた(表5)。

立原ほど、病の全経過を通じて、結核及びそれに関わる言葉を

忌避していた作家は、見当たらないのであり、それがまた、これまで結核患者としての立原に関わる研究が少なかった理由の一つでもあろうかと思われる。

こうした他作家と比較しても、いかに結核が不治の病として恐れられていた時代とはいえ、書簡・作品を通して徹底的にこれらの言葉の使用を避け、また、結核患者としての自分を題材にした創作もしなかった立原という詩人の特異性が痛感されるが、これは、一体どう考えたらいいのだろうか？

1) 時代背景

まず考慮しなければならないのは、当時の時代背景である。結核に対する有効な治療薬の無かった頃の日本の結核患者の心理に関する先行研究を概観すると、結核患者の精神状態に関して数多くの論考を発表している深津要（1975）によれば、戦前の結核の治療は自然療法が主流をなしていたため、転地療法、とりわけ林間のサナトリウムでの治療が重視されていたという。

また、当時は、結核については不治で死に至る病という考えが絶対的で、強い感染力と衛生知識の不足から現在の癌以上に恐れられていたとしながらも、結核患者は、「精神主義的な思想で療養生活をのりきろうという積極的な姿勢」が強く、『精神力』というもので、結核菌に立ちむかい結核をねじふすという考えが主流をなしていた」とも指摘する。

深津によれば、こうした精神力を重視する闘病姿勢は、終戦から数年後の昭和 23 年頃まで観察されるのであって、当時の結核患者が「最後まで希望をもって結核と闘っていたことは極めて印象的」と語っている。

このように、深津は戦前・戦中の我が国の結核患者が、不治の病とされていた結核に最後まで希望を捨てずに、「精神力」で立ち向かっていたと、その精神主義的な特徴を指摘しているが、当時の戦争によって多くの人々が命を落とすという状況の中では、結核患者として療養できる環境が、一概に悲惨とは言いきれなかつ

たという社会情勢も考えなければならない。

また、この「精神力」重視の考え方は、当時の我が国の軍国主義的な雰囲気とも一致するもので、立原も結核との闘病を戦地へ向かう友人の危機と結び付けて考えているが、この時代の国民意識としては、そうした精神主義的な考え方を持つことは、それほど珍しいことではなかったのではないかと推測される。

特に、昭和 12 年 10 月に肋膜炎、昭和 13 年 7 月には結核と診断された立原の場合は、昭和 11 年に起った二・二六事件や昭和 12 年に始まった日中戦争も考えなければならない。たとえば、立原が肋膜炎と診断される 3 カ月前の昭和 12 年 7 月の盧溝橋事件に端を発した日中戦争は、翌 13 年 4 月の国家総動員令の公布、同年 10 月の国民精神総動員運動を経て、昭和 16 年 12 月の太平洋戦争の開戦へと突き進む直接的な契機となっているが、立原は、我が国で国家主義・軍国主義が台頭し、戦時体制へと向かう最中に肋膜炎を病み、結核と診断されているのである。

文学史的に見ても、この昭和 12 年から 13 年にかけての時期は、プロレタリア文学が弾圧されたり、文学者の戦地への従軍が相次ぐなど、作家や文学者にも戦争の影が色濃く影を落としはじめた時代であり、中村真一郎の回想（1946）によれば、立原はそんな世相を、「巷には軍歌ばかり。詩は死んで了ったよ」と、嘆いていたという。

実際、立原自身も、肋膜炎と診断される直前の昭和 12 年夏に徴兵検査を受け、検査官から「こんなやせた壮丁は初めてだ」と言われて、丙種不合格になっているし（岸田日出刀、1939）、昭和 13 年 10 月 27 日には武漢三鎮陥落の提灯行列に参加して、皇居前で万歳を唱和している（中村稔、2010）。

高橋正雄（2016）は、昭和 20 年から 21 年にかけて太宰治が発表した『パンドラの匣』の中には、戦時下に結核を患った若者の心情が、「お国のために役立つという価値観が支配的だった戦時下にあって、自己嫌悪にかられた主人公は、『一日も早く死んでし

まったほうがいい』と自暴自棄になり、喀血した翌日に畑仕事をするといった無茶もする」と記されていると指摘している。

すなわち、戦時下の日本において、本来はお国のために戦地に赴かなければならない若者が結核を病むということは社会的な「負い目」を感じさせる状況でもあり、周囲に結核であることを知らせなかった立原の対応には、こうした時代背景も影響していたものと考えられる。

このように、立原の結核に対する対応には、戦時下という時代背景や当時の時代精神の影響も考慮しなければならないが、当時の作家が皆立原のような態度をとったわけではないことから、そこにはやはり、立原の個人的な事情も影響していたものと考えられる。

2) 個人的な要因

第一に考えられるのは、結核という社会的な偏見の強い病に罹患したことを公表することで生じる世間の差別や偏見を恐れた可能性である。これについては、今回の調査では、立原自身の発言としてはそれを裏づける記述は見出せなかったものの、当時は、長塚節が旅先の旅館で結核患者であることを理由に宿泊を断られたというエピソードがあること（長塚節、1976）を見ても、結核であることが知られば、旅行もままならないというような状況があった。そのため、結核であることが周囲に知られることで、旅行をはじめとする様々な行動に対する制限が生じることへの恐れが、日本縦断旅行を考えていた立原に、自分が結核であることの公表を躊躇させたという側面はあるのかもしれない。いや、結核に対する差別的な感情は別にしても、結核であることが知られば、病状の悪化を心配する周囲の人々から旅行や創作を止められ、自分が思うような生き方ができなくなるという懸念もあったことが、立原をして、結核に関する言葉の使用を避けさせたという可能性は想定しうる。

第二に考えられるのは、自分が結核であることを知ることで、

周囲の人々が感じるであろう不安や心配を回避したいという心理である。こうした他者の心情を慮る立原の他者配慮性は、長崎時代に書いた『ノオト』の中に、水戸部に宛てて、「おまへを悲しませたり心配させたり、そんなことをおぼえさせた僕は、おまへにわるいことをしたのではなからうか」（昭和 13 年 12 月 14 日）といった記述があることから、立原の性格に起因する内在的な要因として考えられる。

事実、立原の、他人の心情を思いやる傾向は、「人は自分のための存在なのでせうか。他人のための存在なのでせうか。自分が生きるといふことの根源の意味は、他人のためではなかつたかとおもひます」（昭和 13 年 11 月 19 日加藤健宛）といった記載にもうかがうことができる。また、堀辰雄にだけは、病のことを打ち明けて、本音に近い思いを語っていたという事実も、結核患者としての先輩にあたる堀には、そうした気遣いをしなくて済むというような事情もあったのかもしれない。

第三に考えられるのは、いわゆる障害受容の過程における否認の心理機制である。立原の場合は、結核に関わる言葉の使用を避けただけでなく、咯血した後もすぐ病院を受診しようとしておらず、また、結核と診断されてからも、医師である友人・秋元寿恵夫の制止を無視するような形で全国各地へ旅行していることなどを思うと、立原は言葉と行動の両面で、結核という事実を否認しようとしていたようにも見える。

また、否認という観点からすれば、言葉に対する感性が人一倍強かった立原は、結核やそれに関連する言葉を使えば、自分が結核であることを認めてしまう、もしくは結核患者であることが現実化してしまうというような言霊的な懸念を抱いていたために、結核関連の言葉の使用を避けていた可能性もある。

さらに言えば、立原が結核と診断されたのが 23 歳 11 カ月と比較的若く、結核と診断されてから亡くなるまでの期間もわずか 8 カ月、肋膜炎と診断されてから亡くなるまでの期間でも約 1 年半

と短かったことも、こうした態度に影響していた可能性がある。というのも、若くして結核に罹患し、しかも、結核と診断されてから亡くなるまで1年足らずだったために、自らの病や死というものを受容するだけの時間がなかったのではないか、そのために結核を否認するような心理や行動が目立ったとも考えられるからである。

ちなみに、他の作家では結核と診断された時期が不分明なことが多いため、肋膜炎と診断された年齢と亡くなるまでの期間と死亡年数を比較すると、正岡子規 13年4カ月（34歳）、長塚節 3年5カ月（36歳）、国木田独歩 1年6カ月（36歳）、石川啄木 1年2カ月（26歳）、堀辰雄 29年（48歳）、梶井基次郎 11年11カ月（31歳）、新美南吉 9年（29歳）、宮沢賢治 5年3カ月（37歳）などとなっていて、立原の肋膜炎診断から亡くなるまでの1年半という期間は、石川啄木や国木田独歩に並んで際立って短く、また、死亡年齢も他の作家に比べて若かったことがわかる。

すなわち、結核を患った年齢の低さや罹病期間の短さなどから、立原は、自らが結核であることを否認する傾向が強く、そのことが彼をして、結核に関わる言葉の使用を忌避させただけでなく、医学的に見れば無謀もしくは不適切と言わざるを得ない行動に走らせ、結果として、彼の命を縮めた一因ではないかと、推測される。その一方で、立原が日本縦断旅行を行い得たのも、彼の若さゆえの胆力、気力によるものであったと思われる。

第四に考えられるのは、立原の詩人としての言葉に対する独特の感性が、結核に関わる言葉の使用を避けさせた可能性である。これは、特に詩について言えることだが、立原の詩の中の死や病に関わる表現をみると、「あなたのしづかな病と死は 夢のうちの歌のやうだ」（『みまかれるうつくしき人に』）、「死ぬ朝は、母が彼のためにうたつてきかせた。（略）母が、うたひやめたとき、窓かけが風に揺れてゐた。少年は死んでゐた」、「かなしみはしづかであれ」（『初冬』）、「外の昼間の光で甘い死のなかに休む姿は美し

くかがやく」(『不思議な川辺で』)などと表現されていて、死はあくまでも静謐な美しいもので、しかも漠たる病によってもたらされるものとされており、そこに具体的な病名などは出てこない。

したがって、立原には、病や死というものを描く際にも具体的な病名を挙げないという特徴がうかがえるのであって、そこには、結核に関わる病名を書くことが詩の純粹性を汚すことになるという、立原特有の美意識が働いたのではあるまいか？また、そうした抽象的な表現を使うことが、彼の詩に、一結核患者の詩ではなく、より一般的に病める者の詩としての普遍性を持たせたとも考えられる。

第五に考えられるのは、立原が、自らの病や病者としての生き方そのものを美化しようとした可能性である。立原は、昭和 11 年 5 月号の『四季』に発表した『黒手帳』に、「『芸術家はその生涯がおのづからひとつの美しいロマンを織るものでありたい』といふ言葉が僕の記憶のどこかにある」と記しているほか、肋膜炎と診断される半年前の昭和 12 年 4 月 1 日の神保光太郎宛書簡には、「僕が 詩人でありたいとねがふ日に 僕は詩人だと信じますいかなる意味でも この志向が決める世界こそ詩人の場所だと信じます(略)僕はその場所で 詩人でなしに死ぬ日にさへ詩人であつたと信じ得ます」と、詩人として死にたいという思いが記されている。

また、亡くなる直前の江古田療養所の病床でも、「五月のそよ風をゼリーにして」といった詩的な表現をしていたことから考えても、彼はいわば、結核で亡くなる自分自身の姿や人生全体を詩のように表現したい、あるいは詩人として最後まで美しく生きたいと思っていたからこそ、結核やそれにまつわる言葉をできるだけ排除しようとしたのではあるまいか？

それは、堀辰雄のようないわば結核を売り物にするような生き方とは正反対の生き方で、それが堀の文学的な営みに対する批判的な姿勢へもつながっている。その意味では、自らの結核を公け

にしようとしめない態度自体、立原によってなされた間接的な堀批判と見ることもできるし、立原は自らの結核体験を通じて、それまで兄事していた堀辰雄からの心理的・文学的な独立を果たしたとすることもできるのである。

なお、こうした立原の結核に対する態度を考える際に忘れてならないと思われるのは、経済的な背景である。石川啄木をはじめとする結核に倒れた多くの作家は、病の経過を通して貧窮にも悩まされ、それが彼らの苦悩を一層甚だしいものになっているが、中村稔の年譜(2010)によれば、立原の母がとりしきっていた立原家は、大正12年の時点で、「分家や雇い人など50人余」を抱える大商家であったという。また、伊達嶺雄の『立原の生家のこと』(1980)には、「立原が何不自由なく日本全国歩きまわったり、毎年のように軽井沢へ行ったり何かする、そういう活動の支えになった力です。これを忘れてはいけません」として、立原が「貧乏のどん底でもって苦勞してこしらえたというんじゃないで、そういった辺りは何も心配なしに詩を作ることができた」と、金銭的な苦勞をしないで療養・活動ができたのも、「御自分から進学の道を断って、小学校だけでもって、あとは自分の家業の木箱屋さんに専念した弟の達夫さんの、兄さんを思う美しい心の賜物」であったと、立原の弟の尽力を指摘している。

花沢成一(1957)は、肺結核患者の心理に与える要因として、病状よりもむしろ生活的な面の状態が大きな力となり、家族も生活が安定していれば親和的であり、病人も生活が安定していれば、明るい傾向が見られると指摘しているが、立原が結核の療養の全過程を通じて明るい精神を持ち得た背景には、生活の安定や経済的な余裕という要素も大きく影響していたものと思われる。

3、病跡学的な認識

今回の研究を通じてもう一つ注目されるのは、立原のいわゆる病跡学的な認識である。

そもそも、結核と創作に関しては、立原の死後1年後の昭和15

年に、式場隆三郎（1940）が、結核と創作に関連して、「結核に冒されると身体的なことは諦めねばならぬために、精神的な意気込は一段と燃えさかることは事実である。身体は段々蝕ばまれ、寿命がもういくばくもない、といふことを自覚した場合、病者の頭は非常に鋭敏になり、生への執着にしる、人生との闘ひにしる、悲壮なまでに熱中的になることによつて、自分の仕事が輝しく立派になるといふことは事実である」と指摘している。

また、大西信正も、『精神科医からみた結核』（1960）のなかで、結核と創作に関して、次のような見解を示している。「死の恐怖に、患者を偉大な創作の世界へとかりたてることも、注目しなければならぬ。死が毎日鼻先にぶらついていると、死ぬ前に一冊でも多く立派な労作を書き残そうという気にもなるし、もう身体的なことは全然あきらめねばならぬから、精神的な方面へ精一杯うちこめることができることにも関係している。結核になると頭がよくなるか、結核は秀才のなる病気だとかいわれたのも、これらの人たちが他をあきらめて、その道に生命を打ち込んだからに過ぎないのである」。

以上のように、病により様々な制約を受けた結核患者が、苦悩を昇華させる形で生産的・創造促進的な状態にあったというのが、これまで、様々な論者によって指摘されてきているが、立原が、病と創作の関係という病跡学的な認識を持っていたことは、従来の研究では指摘されてこなかった特徴である。

我が国近代文学史上の結核で倒れた正岡子規をはじめとする上記8名の作家・詩人の記録を調べてみると、多少なりとも結核という病と創作の関係を語っている者としては、正岡子規、梶井基次郎、堀辰雄の3名がいる。

このうち、正岡子規は、昭和29年3月にカリエスとの診断を受けた直後に書いた高浜虚子宛書簡の中で、「貴兄驚き給ふな僕ハ自ら驚きたり 今日夕暮ゆくりなくも初対面の医師に驚かされね 医師ハ言へり此病はリュウマチスにあらずと」、「しかも一

日も精神の不愉快を感じたることなし 詩を作り俳句を作るには誠に詭へ向きの病気なりとて自ら喜びぬ」と書いているように、結核性のカリエスを創作に向いた病気として積極的に捉えようとしている。

また、梶井基次郎は、大正9年4月に「肺病になりたい。肺病にならんと、ええ文学はでけへんぞ」(『梶井基次郎全集』、2000)と、結核罹患以前に、結核が文学的な創作を促すという病跡学的な見解を語っているし、堀辰雄は昭和5年に雑誌の取材に、自らの創作について、「今日までは、僕の病気に気に入るために、そしてそれがますます僕の病気をひどくすることに気もつかないで」と語っている。

したがって、結核の創作に及ぼす影響を語っていた作家は立原のみではないが、今回の研究で明らかになった立原の病跡学的な特徴をまとめると、下記の通りである。

1) 危機的状況における美意識や創作意欲の高まり

立原の病と創作の関係では、まず第6章でも述べたように、昭和13年7月に結核と診断されてから長崎で喀血して絶対安静を命じられるまでの4ヶ月間に書かれた詩は、それ以前の月平均1.5篇から9.4篇へと増えたという、病による量的な増加という現象が目される。立原は、結核と診断されてからの方が、それまでよりも旺盛な創作活動を行っているのである。

これは、休職することで創作に使える時間が増えたという物理的な要因や、「死ぬと決めればそれ迄に徹夜を続けて傑作をつくり置かねばならぬ」(生田勉、1978)といった死を前にした創作意欲の高まりによると思われるが、立原の場合に注目されるのは、心理的に危機的な状況において自然の美を感じたり創作意欲が高まるという記述で、それに類した事象を時系列にそって整理すると、以下のようなになる。

(1)昭和13年6月15日の武基雄宛書簡には、「君の病ひがあのように美しい日々を君に与へていること、僕もうれしくおもふ」、

「幼年といふ時間の位置が君にいまどんなにはたらきかけているか。(略)君の場合のやうに、心が深い淵をひらく。そのとき、キラキラする幼年、その秘密に僕はたいへん近い」と、病める日々こそが幼年時代のような美しい感受性を与えてくれると、病に肯定的な意味を見出している。

(2)結核と診断されたショックが「たいへんに自然に、僕のまへには危機がひらけている」と書かれた7月21日の生田勉宛書簡には、「けふの夕映はほんとうに、旗のやうに赤く美しかった。僕の頬には涙がすぢをひいていた(略)追憶がみなこはれて、ただ、ゆくすえが約束もなしに、とほくまで見渡せる」と、悲しみの中で夕映を美しく感じるという、悲しみゆえの感受性の高まりが記されている。

(3)8月6日の柴岡玄佐雄宛書簡に、「僕は病気するとき、空や雲にこんなに親しい」とあり、8月16日の神保光太郎宛書簡にも、「病ひと回復の日にはいつも世界が無力になり、美しく高められます」とあるなど、病によって自然に対する親和性が増し、世界が美しく高められて感じられるという特徴が記されている。

以上のように、立原には、精神的・肉体的に危機的な状況にある時に美に対する感受性や創作意欲が増すという傾向が認められるのであって、立原自身も、そうした傾向を自覚している。

立原にとって、病やそれに伴う危機意識は、自らの感受性や創作意欲を増すものとして捉えられていたのであるが、そこには彼が愛読していた芥川龍之介の『或旧友へ送る手記』の影響も想定しうる。というのも、この手記の中で、芥川は、「自然はかう云ふ僕にはいつもよりも一層美しい」、「自然の美しいのは僕の末期の眼に映るからである」と、自殺を決意し、死を間近に控えた「末期の眼」には、自然が美しく見えると記しているからで、立原自身、昭和13年3月下旬の土井治宛書簡に「このごろ芥川龍之介を久しぶりによんでいて なかなか面白い 何十ぺんめかに歯車や河童をよみかへしている」と記して、肋膜炎と診断された後も、

芥川の晩年の作品を読んでいた様子がかがえる。

2) 病跡学的な思想

もう一つ、病跡学的な観点から重要と思われるのは、芳賀檀の『古典の親衛隊』(1937)の影響である。

立原は『古典の親衛隊』の中の、「危険のある所救ふ者又生育する」というヘルダーリンの言葉を、自分自身が直面した油屋火災による命の危機こそが、「救ふ者」、つまり文学者を作り出すと解釈することで、自らの病や危機的な状況を肯定的に捉えることができるようになっていく。その結果、立原は、油屋火災以降のPTSDに伴う死の恐怖や、その後直面せざるを得なくなった結核に伴う死の恐怖に直面する中で、そうした自分が置かれている危機的な状況を、「たたかひはどこでもいまはある。北京の方にも、こちらにも」(昭和13年10月1日深沢紅子宛書簡)というように、当時戦地で戦っていた同世代の若者が置かれた状況とオーバーラップさせる形で、共に死に直面しながらも戦う若者としての連帯感を通じて創作するようになっていく。

なお、『古典の親衛隊』の中では、「危険のある所救ふ者又生育する」という言葉がヘルダーリンの記した言葉であることは記されているものの、この言葉について、それ以上の特別な説明がなされているわけではなく、どちらかと言えば唐突に現れているのであるが、それを上記のように病跡学的に解釈して、病と創作の関係で捉えたのは、あくまで立原自身の解釈であり、そこに立原の独創性もある。

その後の立原の病跡学的な見解の変遷をみると、昭和13年7月19日の矢山哲治宛書簡に、「僕もまたあの無限な豊かな途への信頼を、心から言ひたいとおもひます。mitleidenといふ言葉の美しさを背にして。そして、あるひは更にmitfreudenにまで」とあるように、「苦悩を共に」(mitleiden)という言葉から「喜びを共に」(mitfreuden)という言葉へと、苦悩の共有から喜びの共有を創作の基盤にするといった考え方を示している。

また、同年7月下旬の小山正孝宛書簡には、「さびしいうたをフルウトでうたひたいやうな気がします（略）僕はそれとおなじことをこの紙の上に音色のやうに早くあらはれ早く消えることの出来ない文字で出来たなら！とおもひます」、「君がさびしいよりも僕はきつともつとさびしいそして悲しい だけれども僕の悲哀は君の悲哀を慰める……そんなメエルヘンを考へています」と、病気を患った自分の淋しさや悲哀が、創作を通じて人を慰める力になりうると記している。

さらに、盛岡滞在期の『ノオト』には、「けふ『皇帝』の アダジオをきいた あのやうな美しいアダジオを 僕の言葉はうたふことは出来ないだらうか」と記しているが、このアダジオというのは、『古典の親衛隊』の中に「あの秋の素晴らしいアダジオーベートーヴェンの様に苦難した人だけが、あの様な美しいアダジオを歌ふことが出来る」という表現があることから、苦難した人だけが美しい創作ができるという病跡学的な考えを示した文章と考えることもできる。

長崎で咯血した後の12月7日の『ノオト』には、「いつも『暗闇をとほつて』光を得るといふあのひとつの救ふ者の地盤をさへ失つたことは暗黒だ」という記載があり、ここには、暗闇こそが光を作り出すという信念が「ひとつの救ふ者の地盤」であるという病跡学的な思想が記されている。

以上のように、立原は、他の作家に比しても数多くの病跡学的な見解を語っている作家であり、そうした事実からも立原を病跡学的な観点から研究することの重要性が改めて認識されるが、立原にあつては、病跡学的な思想を自らの病気に立ち向かうための糧として用いているという点に特徴がある。

すなわち、立原は、病と創作の関係という病跡学的な認識を持ってただけでなく、精神的・肉体的に危機的な状況が美に対する感受性や創作意欲を増すという傾向を自覚し、それに基づいて自らの病を積極的に捉えようとしていたという点でも、注目に価

する作家なのである。

4、死の認識と受容

もう一つ、今回の研究を通じて明らかになったのは、肋膜炎→PTSD→結核という一連の過程を通じて、立原の死というものの認識が変化し、それが彼の死の受容や創作態度にも微妙に影響していることである。

以下では、その変遷の過程を肋膜炎診断後、油屋火災後、結核診断後の三つの時期に分けて、検討を加える。

1) 肋膜炎診断後

昭和12年10月に肋膜炎と診断されてからの立原は、同じ昭和12年10月に発表したエッセイ『追悼』の中に、「人に知られないやうに秘められた辻野さんの死の瞬間は、『詩人の死ぬや哀し』と何かはつきり予前した芸術人の最後の美しい姿勢ではなかつたらうか」と、自己の死を予知しながらそれを他者へ伝えない姿勢こそが詩人として美しいという価値観を記している程度で、肋膜炎という病をそれほど重篤なものとは受け止めていなかったこともあって、この時点では、それほど死に関わる記述を残していない。しかも、この『追悼』の記載自体、実際に書かれたのは肋膜炎と診断される以前である可能性が高いから、実質的に肋膜炎と診断されてから死に関する記述はないと言ってもよく、それはまた、肋膜炎を死と結びつけて考えていなかったことを示唆するものでもある。

2) 油屋火災以後

しかし、昭和12年11月の油屋火災で死の恐怖に直面してからは一転、様々な死に関する記述が残されていて、たとえば、昭和12年12月上旬の丸山薫宛書簡には、「どんな意味でも、死にたくはありません。この夏以来、死が、大気のやうに僕をひたしています。そんなときに、僕は、ただ生きたいとばかりおもひます」と、死を厭い、あくまでも生きたいという思いが綴られている。

また、12月15日の猪野謙二宛書簡には、これから出版する2

冊目の詩集に触れて、「中間者の書・暁と夕の詩を 僕を愛するすべての人（しかし僕はすでに彼らを拒絶した）に献ずる。『暁と夕の薄明の それぞれの中間としての夜と昼と、 生きたる者と死したる者との それぞれの中間としての 死人と 人間と』」と、自分を生者と死者の中間にある者として位置づけている。

さらに、12月16日の小場晴夫宛書簡では、「生への決意は 死にひたされて僕らを包みつくして 永遠にながれる（略）かかる時間のうちに住む人間は おそらく 生きたる者と死したる者の中間者であらう」と、生への決意は生者と死者の中間にある者にこそ強いという持論を展開している。

翌昭和13年1月11日の小高根二郎宛書簡には、「一羽の小鳥に すぎなくなつた 僕のちひさい生命が 夜にだけ それを 明るい夜にする ランプのそばで 生きることが かんがへました しかし それは 死なのではないでせうか」と、生と死を同等のものとみなすような死生感も表明しており、そこには、生も死も同一のものと考えることで、死を受け入れやすくしたいという思いが働いていたものと思われる。

2月12日の神保光太郎宛書簡では、「ここに 僕の生はあたらしい端緒をひらかななくてはなりません すでに限界は出口であり 死は生であつたのでした」、「限界のなかで勇敢さを勝ち得、そして限界がひとつの深みにかはるとき、飛翔のうちに不死が得られると おまへはいふのか」と、限界は出口であり、死は生であるから、限界の中で勇敢さを得られるなど、死を肯定的に捉えるようになっている。

このように、油屋火災による死の恐怖を体験した後の立原は、昭和13年1月下旬から2月にかけて、死に関する思索を深めていて、最終的には死を肯定的なものとして受け止めるという形で、障害受容的な価値観の転換を行っている。立原は、肋膜炎という診断ではそれほど死を意識しなかったものの、油屋火災とそれ以降出現した PTSD 的な症状を契機に、自らの死というものを強

く意識するようになったと考えられるが、昭和 13 年 2 月中旬の深沢紅子宛書簡には、『古典の親衛隊』から受けた影響が、次のように記されている。「美しいもののためには、もう、たたかひをおもはねばなりません。僕らの一人が、それを古典の親衛隊と名づけました。いちばん美しいもののためには、死ななければならない、その光栄と誇りのために！」。

これは、立原が、『古典の親衛隊』の影響下に、美しいもののために死ぬという形での死の受容に至ったことを示唆する記載で、ここで立原がその光栄と誇りのために死ぬ美しいものとは、「いつか見た『ファウスト』や『群盗』」のようなすぐれた創作を意味している。

3) 結核診断後

昭和 13 年 7 月に結核と診断されてからの書簡を見ると、8 月 22 日の水戸部宛書簡に、「僕の 生きていることは こんなときにはつきりとふたしかだ（略）僕が 危いことをえらんだのでもない この風景自体が危いのもない しかし ここに僕がこの風景のなかにいるとき それは 危険なことになる」とあり、8 月 25 日の小場晴夫宛書簡にも、「君と この高原で 僕の生涯のひとつの 危機に 美しくされた風景のなかで 対話し得なかつたことはもう 悔いまい 何者にも癒されない哀愁の淵は この光のなかに ひらけはしない」とあるように、自分の命が不確実で危機的な状況にあつて、誰にも癒すことができない哀愁を抱えていると、漠然とした表現ながら自らの危機意識を伝えている。

また、9 月 1 日の水戸部アサイ宛書簡には、「僕たちの、この朽ちてゆかねばならない日々。僕たちの たつたひとつの日々。（略）僕は 心のふるへなしには、おまへに告げることが出来ない。僕の漂泊の たうとう 最後の意味を」と記すなど、水戸部との日々が滅びゆく運命にあるとも伝えている。

このように、立原は、結核と診断されて 2 カ月足らずの間に、

結核という言葉を使わない形で、自分の生の危機をほのめかす 3 通の書簡を書いているのである。

そして、追分で過ごした最後の夏を振り返った 9 月 4 日の水戸部宛書簡には、「僕に信じられないくらいの 不思議な美しい夏。それは、もうふたたびはくりかへしも出来なければ語ることもできないだらう」「では、けふよ、僕の夏よ、さよなら！」とあり、9 月 7 日の深沢紅子宛書簡にも、「こんなにたのしくうれしく過ぎた日はなかつたといまではとりかへしのつかない日々のやうにおもはれます。たのしかつたし、美しかつた風景や気候や人たちの心ばえなど僕の夏がこの夏で最後であったとしても、もう悔いることはありません」とあるように、立原は、「もうふたたびはくりかへしも出来なければ語ることもできない」とか、「僕の夏がこの夏で最後であったとしても、もう悔いることはありません」などの言葉を使って、今年の夏が最後の夏であることを覚悟したよな表現をしている。

ただし、その後の盛岡滞在中に書かれた書簡には、新たな生の喜びを感じたよな希望に満ちた記述が目立つよになる。たとえば、9 月 27 日の小場晴夫宛書簡に、「こちらに来て僕は全体に非常に肯定的になつている たとへば不毛の美しさよりも もつと多く fruchtbarkeit(注；豊穰の)の美しさを信頼する(略)ただその美しさは僕にとって全く異質であり あたらしい誕生だ、おそらくこんな生き方の信頼が僕をつくりかへる」とあり、9 月 28 日の猪野謙二宛書簡にも、「僕はこちらへ来て毎日、夢のなかでのやうに自分を感じている。しかし、僕はこの小さい丘の麓にあたらしく生れたのではないだらうか。昨日でないならば、けふたつたいま！ そのためには僕の一切の過去を抹殺するがよい。僕は生れ出たばかりの幼児のやうに、ここにあたらしい日をきづく」と、それまでの過去を捨てて、新たな人生を生きるという意思が記されている。

それまで自らの生の終わりを覚悟していた立原は、盛岡の生命

力に満ちた豊穡の美に触れて、幼児のように生まれ変わって、新しい人生を始めると記しているのである。

その後小山正孝に宛てた 11 月 11 日の書簡で、立原は、「僕は自分の身体をこつそりとひとりでひどくいちめてそれに酔ふやうなときがある」、「ひよつとしたら、僕は死に近いのかも知れない。そんなことは考へも信じもしない事だが！　僕はむしろ、ジョルダノ・ブルノオや小林多喜二の死に方が美しく僕を誘惑するのを感じる」と、これまでよりもはっきりと死の予感を表明しながら、自分には自虐性があつて、火刑に処されたルネサンス期の自然哲学者ジョルダナーノ・ブルーノや、昭和 8 年に拷問死した小林多喜二の死の方に魅力を感じると記している。

あるいは、立原が友人で医師でもある秋元寿恵夫の制止を無視する形で日本縦断旅行を企てた背景には、こうした自虐的な要素もあつたのではないかと思わせるが、立原はまた、こうした死の予感に関連して、同じ書簡の中に、「僕は純粹に光のなかで、美しい花でありたい。花でありたいといふねがひが人間の僕にどんな意味があるのか。ひよつとしたら死ぬかも知れない、といふことばはおそらく僕を殺さない。人間が花になる。人間が小鳥になる」とも記している。

ここでの立原は、自分は「ひよつとしたら死ぬかもしれない」が、それでも美しい花や小鳥になることを選びたいと、メルヘンのような思いを語っているのである。

以上が、病の経過に伴う死生観の変化であるが、立原の場合は、こうした死生観がそのまま各時期の創作に反映しているのが特徴である。

たとえば、昭和 13 年 1 月 11 日の小高根二郎宛書簡では、「生きること　かんがへました　しかし　それは　死なのではないでせうか」と、生と死を同等のものとみなす死生観を表明しているが、それと同様に昭和 13 年 4 月号に発表された『或る晴れた日に』の中にも、「おそらく　すべての生は死だ」という表現がみ

られる。また、友人たちに漠然とした危機感を示していた追分時代に書かれた9月1日の水戸部アサイ宛書簡には、「僕たちの、この朽ちてゆかねばならない日々。僕たちの たったひとつの日々。(略) 僕は 心のふるへなしには、おまへに告げることが出来ない。僕の漂泊の たうとう 最後の意味を」と、自分と水戸部との日々が滅び行く運命にあると記しているが、同時期に制作された『風に寄せて』でも、「僕らは すべてを 死なせねばならない」と書簡と同様にその危機を歌っている。

さらに、盛岡滞在期の9月28日の猪野謙二宛書簡には、「僕はこの小さい丘の麓にあたらしく生れた」という新生の希望が書かれているが、これは『四季』10月号の『優しき歌』でも、「あたらしく すべては 生れた!」と歌われている。同様に、同日の深沢紅子宛書簡には、盛岡で豊穡の美に触れた感動が、「僕は涙をながして、『僕は生きられる、生きられる』とつぶやいていました。それほどにあの町が美しかったのです」と記されているが、それと同じ感動が、『こをとろ』11月号の『唄』の中で、「林のなかで一日中 私は うたをうたつてゐた 《ああ 私は生きられる 私は生きられる… 私はよい時をえらんだ」と表現されるなど、立原晩年の詩では、書簡の中で展開された死生観がそのまま詩の中で表現されているという特徴が認められる。

なお、こうした死に対する認識や受容の過程を考える上で注目されるのは、立原が幼い頃から身内や友人の死に接してきたという事実である。たとえば、大正8年、満5歳の時には父を亡くしているが、その父親への思慕を、10年後に、「父上は生きて居ませば 幾つかと母にききたり。 涙ぐみつつ」(『硝子窓から抄』昭和4年)、「ちちのみの父のなき子は 今日もまた枯草山に ひとり涙す」(『葛飾集』昭和4年)などの歌にしている。

また、昭和4年3月には、従妹である立原婦志子が虫垂炎で急逝しているが、それから2年後の昭和6年に書かれた中学英熟語ノートの断片には、「三年の日が経つても、どうしても 死んだと

はまだ思へない」、「何故死んだ？ さうは問へない」と、亡くなって2年以上の歳月が流れているにもかかわらず、未だに親しかった従妹の死を受け入れられずにいる様子が記されている。

それから5年後の昭和11年、すなわち肋膜炎と診断される前年には、『未成年』の5月号に、「みんな死んでしまった。僕だけ生きている。わがままにものを書いている。やりきれないやうな気がする。僕だけ生きているのではないのだが、みんな死んでしまった。『風が物語を生むのかと私は思ふ』と少年の憶ひを書きこして三月はじめに高等学校頃の友人が死んでしまった。去年の早春にも、親しい従兄が死んでいた。三月に僕に親しかつた人はみんな死んでいる。僕も三月に死ねばいい」（『いろいろなこと（三）』と、高等学校の友人や従兄を相次いで亡くして、自分に親しい人はみんな死んでいるのだから自分も死ねばいいという、ある種の死に遅れ感を持つなど、幼い頃から死に対する親和性が人一倍高かった人であるが、13歳で「神経衰弱」になる直前に書かれた『勝敗』という、芥川龍之介の自殺を肯定するような作品でも、「この嬉しさうな死顔、ああ何といふ嬉しさに満ちて居るのだらう」と、死に対する親しみの感情が記されている（木山祐子、2013）。

また、立原の大学生時代について、山岸外史は、『立原道造』（1939）の中に、生を肯定することが大切だと語る山岸に対して、立原が「いいことを聞いた。さうなのか。僕は、死を肯定することの方が、ずっといいことなのかとばかり思っていた」と言ったと記している。

幼い頃から相次ぐ近親者の死に直面した立原は、肋膜炎や結核と診断される以前から、死に対する親近感や死を肯定するような思いを抱えながら生きていたように思われるのであって、そうした死を身近に感じて、自分も早く死にたいと考えていた立原は、少なくとも結核と診断された当初は、仮に旅行をして死期が早まったとしてもそれほど大したことではないと考えていたのかも

しれない。

以上の考察をまとめると、立原は、自らの結核患者としての側面については最後まで否認したような行動をとっていたのに対して、自らの死すべき存在としての側面は受容していたように思われる。結核という言葉は、それを想起させるような言葉を含めて一切使っていないのに対して、死という言葉は頻繁に使っていることからわかるように、立原にとっては、死ぬことよりも結核であることの方が受け入れがたかったようである。

そんな立原は、最終的には美しく詩人らしく死ぬことを目標としたのであって、そこには、結核であることよりも死ぬことの方が受け入れやすいといった当時の時代背景や、立原特有の価値観も影響していたように思われるのである。

第2章：本研究の限界と今後の課題

本研究では、全集に掲載されている立原の書簡を中心に、彼が遺した手記やエッセイ、周囲の証言などに基づいて実証的に検討するという方法をとった。そのため、立原に関わる資料がすべて明らかになっているわけではない現在、今後、今回参照した以外の資料が発掘されれば、今回の結果を修正しなければならない部分が出てくる可能性がある。

たとえば、立原の親友の生田勉の日記（1983）にしても、立原が江古田の療養所に入院している昭和14年1月から3月までの記載がない形で刊行されているなど、現時点で未発表・未公表の資料が存在する可能性は否めない。事実、今回筆者が発掘した秋元の講演録も、これまではほとんどその存在が知られていなかった資料であるため、今後、立原に関わる資料の発掘と、それに基づく実証的な研究の必要性が痛感されるところである。

また、今回は書簡や手記などの資料の分析を中心に検討したため、そうした資料に乏しい幼少期や思春期についても十分な検討を加えることができなかった。特に、立原が思春期に陥った「神経衰弱」との関連や母親との関係は、結核療養中の精神変調を考える上でも重要と思われるが、現時点では、立原の思春期の「神経衰弱」や母親に関する資料が乏しいため、実証的な検討をするまでには至らなかった。

さらには、結核患者としての立原の行動を考える際には、彼が結核の感染という問題をどのように考えていたかということも考慮しなければならないが、これについては、江古田の療養所で痰壺に手を伸ばした小山正孝を制したという事実が回想されている程度であるため、現時点では不明な部分が残る。しかし、この問題は、一般に当時の結核の伝染性がどのように捉えられ、本人及び周囲の人々はどのように対応していたかにも関わる問題であるため、今後の検討課題としたい。

表

執筆者	発表年	論文題名	掲載誌
小川和佑	1978	『立原道造の世界』	講談社
山上栄子	1982	立原道造論(2)	日本病跡学雑誌
宇佐美斉	1982	『立原道造』	筑摩書房
吉田繁	1985	立原道造と長崎旅行	日本医事新報
吉田繁	1987	立原道造と二人の少女	日本医事新報
小川和佑	1989	『立原道造詩集』	明治書院
福田真人	1995	『結核の文化史』	名古屋大学出版会
木山祐子	2009	結核患者としての立原道造	聖マリアンナ医学研究誌
木山祐子	2011	医師からみた立原道造	日本病跡学雑誌
木山祐子	2012	結核患者としての立原道造(第2報)	聖マリアンナ医学研究誌
木山祐子	2014	結核患者としての立原道造(第3報)	聖マリアンナ医学研究誌
木山祐子	2016	立原道造の『ノオト』	聖マリアンナ医学研究誌

表2:思春期の「神経衰弱」に関する研究

執筆者	発表年	論文題名	掲載誌
山上栄子	1981	立原道造論(1)	日本病跡学雑誌
山上栄子	1982	立原道造論(2)	日本病跡学雑誌
宇佐美斉	1982	『立原道造』	筑摩書房
小川和佑	1983	立原道造	国文学解釈と鑑賞
吉田繁	1987	立原道造と二人の少女	日本医事新報
木山祐子	2013	立原道造の『勝敗』	聖マリアンナ医学研究誌

表 3 : 発表詩と推定創作時期

題名	発表雑誌	創作時期の推定	推定の論拠
初冬	『四季』第33号 昭和13年1月号		
晩秋	『文芸』第6巻第1号 1月号		
歌ひとつ	『四季』第34号 2月号		
ふるさとの夜に寄す	『一高同窓会会報』第36号 1月号	昭和12年	ノートの内容と一致
午後に	『セルパン』第85号 2月号		
歌ひとつ	『しゆい』第10輯 2月号	昭和12年	ノートの内容と一致
何処へ?	『新日本』第1巻第3号 3月号		
夜に詠める歌	『文学界』第5巻第3号 3月号	昭和13年1月	明示せず(角川版『立原道造全集1』による)
わがまどろみは覚めがちに	『四季』第35号 4月号		
或る晴れた日に	『新潮』第35年第4号 4月号		
初夏	『四季』第39号 8月号		
草に寝て…	『むらさき』第5巻第8号 8月号	昭和13年6月	副題に付記
風に寄せて	『コギト』第76号 9月号	昭和13年8月	末尾に付記
月の光に与へて	『新生』第7巻第3号 初秋特輯号		
麦藁帽子	『映画朝日』第15巻第9号 9月号	昭和13年8月	詩中に記されている
優しき歌	『四季』第40号 10月号	昭和13年夏	中村真一郎の回想(1971b)
唄	『こをとり』第2輯 11月号	昭和13年9月	9月28日深沢紅子宛書簡と内容が一致
魂を鎮める歌	『コギト』第79号 12月号	昭和13年11月	明示せず(角川版『立原道造全集1』による)
メヌエツト	『文芸汎論』第9巻第1号	昭和13年10月下旬	雑誌の締め切り時期による

表 4：結核の年表（本研究による発見には下線を引いた）

昭和 12 年 8 月	この夏、徴兵検査を受け、丙種、不合格となる。身長 175 センチ、体重 49 キログラム。
9 月	<u>3 日、体調の不安を書簡に記している。</u>
10 月	<u>肋膜炎で発熱、安静を命じられ、以後 11 月上旬まで約 1 カ月間、自宅で静養する。この 1 カ月間は、多くの友人に病気の様子を伝える書簡を書いているものの、「肋膜炎」という診断や臥床に伴う心理的同様などは書かれていない。</u>
11 月	<u>15 日、予後を養うため、追分油屋に滞在、19 日、油屋で火災に遭遇した後、睡眠障害やフラッシュバックなどの PTSD を思わせる症状が出現するとともに、肋膜炎による身体症状は改善した様子が見える。</u>
12 月	<u>月上旬に復職。復職後は、身体症状が悪化し、死を厭って生を願う気持ちが書簡中に表現されるようになるとともに、自らを「生と死の中間者」と規定したり、生と死を同等のものとみなすなど、死との心理的な距離を縮めている。</u> 20 日、風信子叢書第二詩集『暁と夕の詩』を自費出版。
昭和 13 年 1 月	年頭、風邪のため数日病臥。この頃、立原が「心身ともに疲れている」という噂があったようである（1 月 4 日杉浦明平宛書簡）

2月	<p>下旬、芳賀檀の『古典の親衛隊』を献本され、その内容に感銘を受ける。</p> <p>上旬、風邪や左頬の脂肪瘤除去の手術のため、10日ほど事務所を休む。</p> <p><u>『古典の親衛隊』の中の「危険のある所救ふ者又生育する」というヘルダーリンの言葉に触発される形で、人生の危機的な体験を創作の源と考えることで油屋火災という外傷体験を乗り越えようとしている。</u></p> <p><u>中旬、美しいもののために死ぬという形で死の受容が行われるようになる。</u></p>
3月	<p>微熱と疲労に悩みながら勤務を続ける。</p>
4月	<p><u>上旬頃から同じ職場の水戸部アサイとの交際を始めて後は、死に関わる記載はほとんどなくなり、新しい仕事や旅、健康な肉体を持つ夢想など、現実の中で生きる喜びが記されるようになる。</u></p>
7月	<p><u>上旬、血痰を喀出したが、誰にも相談せず、病院にも行こうとせず自宅で憔悴しているところを、友人で医師の秋元寿恵夫に発見された。</u></p> <p><u>中旬、秋元の説得により東大病院を受診し、秋元の東大医学部の同期生である長畑一正と吉利和による診察を受けて、レントゲン検査と喀痰検査が施行された結果、検査の三日後、左肺葉と右肺上部に大きな空洞がある結核という診断が下された。</u></p> <p>21日、石本喜久治所長に申し出て事務所を休むことにする。同日の生田勉宛書簡で知らせている。8月1</p>

8月	<p>日の深沢紅子宛書簡によれば、当時医師から肺尖カタルという診断をうけていたので、申し出は唐突であったかもしれないが、それ以前に十分に考えていた期間をおいた上での決心であったと思われる。この休職の理由について生田宛の書簡では、健康上の問題から婚約の破棄も考えていたようにみられる。<u>この生田宛書簡は結核と診断されたショックが記されたものである。この時の立原の書簡は、曖昧な表現をしたこともあって、親友の生田ですら立原が結核と診断されたことは知らずにいる。</u></p> <p>27日、大森の室生犀星邸で留守番をかねて静養。<u>結核という言葉</u>を避け、病は2～3週間で治ると医師に言われたと記すなど、<u>周囲には回復への期待に満ちた明るい書簡を送っている。</u></p> <p>9日、一旦、日本橋の自宅に戻った後11日に出発して、9月6日まで、信濃追分の新築された油屋旅館に転地。<u>この間も結核については「すこしかぜの気味でうつらうつらとくらしています(略)おちついたらすこし疲労が出たけれどこちらに来てすっかり調子はいい」(昭和13年8月14日武基雄宛書簡)</u>など、「風邪」や「疲労」と書く程度で、やはり事実と反して体調の良いことが強調されている。追分滞在中の立原は、15人以上の友人を追分に集めて、それとは悟られない形での別れの儀式をしている。追分滞在の終わり頃、親友の生田勉には、<u>生の危機をほのめかす悲観的な記述をしているものの、ここでも曖昧な表現に留まっているため、この時点でも生田は事態の深刻さを理解していない。</u></p>
----	--

<p>9 月</p>	<p>6 日、追分から帰京。</p> <p>15 日、<u>医師である秋元寿恵夫の制止を振り切って、離京して盛岡へ行く。この間、手記「盛岡紀行」を書く。盛岡滞在中も、体調が良くなっていると書き続けている。</u></p> <p><u>盛岡では生命力に満ちた豊穡の美に触れて幼児のように新しく生まれ変わったと記して、それまでの作品を「いつもの花」とみなし、これからは「ほんとうの自分」や「内部にながれているもの」が存在するような作品を書くことを目指すことを決意している。</u></p>
<p>10 月</p>	<p>19 日、<u>堀辰雄にだけは、疲労感と呼吸困難感を書いている。</u></p> <p>この日、結核が原因の痔ろうが悪化したため盛岡を発ち、翌 20 日朝、帰京。</p>
<p>11 月</p>	<p><u>身体症状に関する記載は減り、実際の会話でも、結核という言葉を避けているが、11 月 11 日の小山正孝宛書簡には、「死に近いのかも知れない」と、死の予感を記している。</u></p> <p>25 日、離京して長崎へと旅立つ。12 月 15 日、帰京までの間、手記「長崎紀行」を書く。<u>長崎に到着するまでの 10 日間に書かれた『ノオト』や書簡には、呼吸器症状は一カ所しか記されていないが、その一方で、疲労感、頭重感、睡眠障害、覚醒時の不快感、不安、虚無感、焦燥感などの抑うつ的な症状や、周囲に対する被害妄想的な不信感が記されている。また、こ</u></p>

<p>12月</p> <p>昭和 14</p>	<p><u>の間の書簡にも、呼吸器症状は記されていない。この時期の『ノオト』には、抑うつ的な症状や、一時的ながら周囲への被害妄想的な不信感が記されている。</u></p> <p>4日午後3時、長崎着。</p> <p>5日、過労と発熱をおして、大浦天主堂の近くに用意されていた下宿を見に行く。夕方、医師である武の父親の経営する医院に入院。6日、血痰を繰り返した後、夜中に激しく咯血。8日、多量の血痰と高熱。11日、武医師と東京の母のすすめにより、帰京を決意。13日午後、長崎を発ち、14日東京駅着。<u>長崎到着後の『ノオト』には、発熱、咯血、便秘、痔ろうなどの深刻な身体症状が記されているが、この時点に至っても「結核」、「肺病」、「咯血」などの言葉は使っておらず、病にはあくまでも強気に立ち向かう姿勢を示している。</u></p> <p>15日、東大病院で診察を受け、絶対安静を命じられ、読書も執筆も禁止される。</p> <p>26日、秋元寿恵夫の意見で中野区江古田の東京市療養所に入院する。長谷川淵医師が担当、すでに結核菌が咽喉から腸まで冒しており、病状はきわめて重篤であった。</p> <p>転院当初は祖母が看病していたが、29日から代わって水戸部アサイが泊り込みで看病にあたった。読書は禁じられ、なるべく話もしないように、命じられていた。</p> <p>30日頃、室生犀星が津村信夫と共に見舞った。</p> <p>1月になって以降、友人たちの見舞いが相次ぐ。水戸</p>
-------------------------	--

<p>年 1月、2月</p>	<p>部アサイは付添婦と交替した後、日曜日ごとに見舞いに訪れていた。</p> <p>病床にある間、2月13日、第一回中原中也賞受賞。</p> <p><u>この時期になっても、友人には、病について楽観的な見通しを述べて未来に希望を掲げるような姿勢を貫いているが、唯一、堀辰雄に面会した時には、死を前にした苦しみを口にしている。</u></p>
<p>3月</p>	<p>29日午前2時20分病状急変し、永眠（24歳8カ月）。</p>

表5：結核を患った作家の比較

	享年	結核罹患年数	「肺病」「結核」等の使用	作品中の使用、結核を題材にした作品名	戦争と死の受容を関連させる	結核の病跡学的認識
正岡子規	34歳	13年4カ月	「小家父上杯に肺病之すじ有之候哉 御報奉願候」(明治22年5月11日大原恒徳宛書簡)	『病』、『墨汁一滴』、『病床六尺』、『仰臥漫録』など	無し	「死はますます近きぬ。文学はやうやく佳境に入りぬ」(明治28年12月五百木良三宛書簡) 「貴兄驚き給ふな僕自ら驚きたり 今日夕暮ゆくりなくも初対面の医師に驚かされぬ 医師ハ言へり此病はリュウマチスにあらずと」「しかも一日も精神の不愉快を感じたることなし 詩を作り俳句を作るには誠に詠へ向きの病氣なりとて自ら喜びぬ」(昭和29年3月17日高浜虚子宛書簡)
国木田独歩	36歳	1年6カ月	「余の病疾は悪性の肺結核なり」「肺患を以て不治の病症なりとするは、何人も否定すること能はざる所なり。肺結核菌は、極めて弱き植物にして、少量の薬液を以てするも撲滅する事を得。故に肺結核菌に直に薬液を投ずる事を得れば之を撲滅せむ事極めて易々たる所なるべけれど、如何せん肺に繁殖する病菌なるを以て、直接薬液を投ずる事能はず、漸く血液に混合して、之を逐ふのみ。故に薬液の効は極めて微弱なるものなり」(『病床録』)	小説『窮死』、『渚』、自叙伝『病床録』など。	無し	無し
長塚節	36歳	3年5カ月	「喉頭結核といふ恐しき病ひにかかりしに知らざれば心にも止めざりしを打ち捨ておかば余命は僅かに一年を保つに過ぎざるべしといへばさすがに心はいたくうち騒がれて」(『病中雑詠』)	『病中雑詠』、『鍼の如く』	無し	無し
石川啄木	26歳	1年2カ月	「私がかうして一年も直りかねていたのも、つまりは結核性の体質だったからでせう」(明治45年1月24日佐藤真一宛書簡)	『悲しき玩具』	「君の入宮を悲しむ。一君のためにも、僕の主張の上からも悲しむ。しかし仕方のない事だ。僕は君がああいふ世界へはいつても、決してその二年間を無益に費やさない人だと信ずる。」(明治44年12月13日高田治作宛書簡)とあり、反戦の意思。	無し
宮沢賢治	37歳	5年3カ月	「私の病気もお陰でよほどよくなりました。(略)病質はよく知りませんが、肺尖、全胸の気管支炎、肋膜炎の古傷、昨秋は肺炎、結核も当然あるのでせう。(略)何でも結核性のものは持久戦さへやる覚悟でいればどうにかなるといふよりは他に仕方がないやうです」(昭和7年10月5日森佐一宛書簡)	『眼にて云ふ』	無し	無し

梶井基次郎	31歳	11年11カ月	「僕もこちらへ帰って から小さい町の人達が どんな風に結核にやら れてゆくかをいくつも 見聞いたしました。あ る若い独り者は首を吊 りました（略） これが結核だからいけ ないのです ほかの病 気ならどんな病気でも みな結核よりはましで す 世のなかといふも のへ結核が冒してゆく のを考へると全く眼に 見えるやうで苦しくな ります」（昭和4年8月 20日川端秀子宛書簡）	『のんきな患 者』、『檸檬』等	無し	大正9年4月「肺病になりたい。肺病 にやらんと、ええ文学はでけへん ぞ」と怒鳴った翌5月から、発熱、咳 嗽を呈し、肋膜炎と診断された。
堀辰雄	48歳	29年	「僕の骨にとまつてい る 小鳥よ 肺結核よ おまへが嘴で突つくか ら 僕の痰には血がま じる」（詩）「僕はた だ、ひどい苦痛の中 で、彼女の結核菌が少 しずつ僕の肺を犯して 行く空想を、一種の変 な快感をもつて、しは じめる」（『不器用な 天使』）	『恢復期』、『風 立ちぬ』、『菜穂 子』、『美しい 村』など多数	堀辰雄は戦争に対して 「沈黙的抵抗」を貫いて いた（杉野要吉 （1964））、即ち反戦の 作家。	「昭和5年に発表せる創作・評論 に就て（註；ルウベンスの戯 画、聖家族）何故詩を書くか 「少なくとも今日までは、僕の 病気に気に入るために、そして それがますます僕の病気をひど くすることに気もつかない で。」」
新美南吉	29歳	9年	「こんどの病気は咽喉 結核といふ面白くない やつで、しかも、もう 相当進行しています。 朝晩二度の粥をすす るのが、すでに苦痛な のです。」（昭和18年2 月12日巽聖歌宛書簡）	『父』、『帰 郷』、『朱に交わ れば』	無し	無し

本論文を構成する研究の発表状況

査読付き論文；

木山祐子：結核患者としての立原道造—最晩年の書簡を中心に—
聖マリアンナ医学研究誌 9(84), 14-17, 2009

木山祐子：立原道造における心的外傷体験—油屋火災の体験を通じて—
聖マリアンナ医学研究誌 10(85), 44-47, 2010

木山祐子：医師からみた立原道造—秋元寿恵夫『三つの出会い』より—
日本病跡学雑誌(81), 72-76, 2011

木山祐子：結核患者としての立原道造（第2報）—診断後の書簡を中心に—
聖マリアンナ医学研究誌 12(87), 64-68, 2012

木山祐子：立原道造の『勝敗』—死の肯定の文学— 聖マリアンナ
医学研究誌 13(88), 68-70, 2013

木山祐子：結核患者としての立原道造（第3報）—「肋膜炎」から「結核」の診断まで—
聖マリアンナ医学研究誌 14(89), 43-48, 2014

木山祐子：立原道造の『ノオト』—長崎旅行における二つの病—
聖マリアンナ医学研究誌 16(91), 30-34, 2016

引用文献

- 秋元寿恵夫（1987）：「三つの出会い」『風信子；立原道造を偲ぶ会
会報第6，7輯』pp21~26、麦書房
- 朝井清（1971）：「長塚節年譜」『現代日本文学大系10』pp498-500、
筑摩書房
- 伊達嶺雄（1980）：「立原道造の生家のこと」『風信子；立原道造を
偲ぶ会会報第1輯』pp11-17、麦書房
- 江頭彦造（1973）：「立原道造の世界」『立原道造の文学—『解釈』
所収論文集、pp35~40、教育出版センター
- 郷原宏（1997）：『立原道造詩集』小沢書店
- 芳賀檀（1937）：『古典の親衛隊』富山房、
- 芳賀檀（1958）：「リルケと立原道造」『立原道造全集月報3』角川
書店（『立原道造研究』所収pp99-101、思潮社、1971）
- 浜野卓也（1978）：『いはれなき哀しみの歌』右文書院
- 花沢成一（1957）：「肺結核患者の心理に関する一考察—戸川氏ら
のTAT日本版による—」日本大学文学部研究年報7(2)、151-161
- 本多浩（1970）：「国木田独歩年譜」『現代日本文学大系11』pp450-
453、筑摩書房
- 堀多恵子（1983）：「立原さんの思い出」『風信子；立原道造を偲ぶ
会会報第3輯』、pp19-27、麦書房
- 堀多恵子（1959）：「たつた一年のおつき合ひ」『立原道造全集月報
5』、角川書店（『立原道造研究』所収pp475-479、思潮社、1971）
- 堀辰雄（1977~1979）：『堀辰雄全集1~8』筑摩書房
- 深津要（1975）：「結核患者の心理」、結核50;596~600
- 深澤紅子（1950）：「風立ちぬ」『南北』、南北社（『国分学解釈と鑑
賞別冊立原道造』所収pp305-309、至文堂、2001）
- 福田真人（1995）：『結核の文化史』名古屋大学出版会
- 池田功（2002）：「日本近代文学と結核—負の青春文学の系譜—」、
明治大学人文科学研究所紀要（51）1-24

- 生田勉（1978）：「立原道造の建築」『現代詩読本』pp124~126、思潮社
- 生田勉（1983）：『杳かなる日の一生田勉青春日記』麦書房
- 石川啄木（1979～1980）：『石川啄木全集 1～8』筑摩書房
- 神保光太郎（1939）：「立原道造の生涯」『四季』7月号、四季社（『立原道造研究』所収 pp380－385、1971、思潮社）
- 梶井基次郎（1999～2000）：『梶井基次郎全集 1～3』筑摩書房
- 岸田日出刀（1939）：「立原道造君のことども」『四季』7月号、四季社（『立原道造研究所収』 pp359－361、1971）
- 木山祐子（2009）：「結核患者としての立原道造」聖マリアンナ医学研究誌 9(84)、14－17
- 木山祐子（2010）：「立原道造における心的外傷体験」聖マリアンナ医学研究誌 10(85)、44－47
- 木山祐子（2011）：「医師からみた立原道造」日本病跡学雑誌(81)、72－76
- 木山祐子（2012）：「結核患者としての立原道造(第2報)」聖マリアンナ医学研究誌 12(87)、64－68
- 木山祐子（2013）：「立原道造の勝敗」聖マリアンナ医学研究誌 13(88)、68－70
- 木山祐子（2014）：「結核患者としての立原道造(第3報)」聖マリアンナ医学研究誌 14(89)、43－48
- 木山祐子（2016）：「立原道造の『ノオト』」聖マリアンナ医学研究誌 16(91)、30－34
- 小場晴夫（1973）：「立原のこと」『立原道造全集第6巻月報6』pp1－3、角川書店
- 小場晴夫（1983）：「詩人・建築家・立原道造」『風信子：立原道造を偲ぶ会第3輯』p3~18、麦書房
- 小場晴夫（1939）：「大学時代の友として」『四季』7月号（『立原道造研究』所収 pp349－352、1971、思潮社）
- 小林義雄（1931）：「「ツベルクリンアレルギー」ト肋膜炎（肋膜炎

- ノ結核感染早期発病論)」結核 9(10),1291 - 1395
- 小泉美佳 (2001):「見開かれた眼」『国文学解釈と鑑賞別冊立原道造』 pp199～210、至文堂
- 小山正孝 (2004):『詩人薄命』、潮流社
- 隈部英雄 (1949):『結核の正しい知識』保健同人社
- 国木田独歩 (1995):『定本国木田独歩全集 1～10』学習研究社
- 正岡子規 (1975～1977):『子規全集 1～22』講談社
- 松原一枝 (1971):「立原道造さんと矢山哲治さん」『立原道造全集 第4巻月報3』 pp3-4、角川書店
- 三上一治ら (1987):「結核患者における心理検査の検討」心身医学雑誌 27-7;645,
- 水戸部アサイ (1939):「療養所にて」『四季』7月号 (『立原道造研究』所収 pp336-338、1971、思潮社)
- 宮沢賢治 (1973～1979):『校本宮沢賢治全集 1～14』筑摩書房
- 室生犀星 (1958):「立原道造」『我が愛する詩人の伝記』中央公論社 (『立原道造研究』所収 pp13-30、1971、思潮社)
- 長塚節 (1976～1978):『長塚節全集 1～6』春陽堂書店
- 名木橋忠大 (2012):「立原道造と芳賀檀 - 「変様」の詩学」紀要・言語・文学・文化 109(239), 127-151
- 名木橋忠大 (2005):「立原道造『中間者』の帰趨」文芸と批評 10 (2) 58-70
- 中村稔 (2010):「年譜」『立原道造全集 5』 p631～734 筑摩書房
- 中村真一郎 (1946):「優しき歌」『午前』5号 (『立原道造研究』所収 pp31-44、1971、思潮社)
- 中村真一郎 (1968):「立原道造論」『立原道造』、審美社 (『立原道造研究』所収 p144~162、1971、思潮社)
- 成田孝昭 (1973):「立原道造年譜」『現代日本文学大系 67』 pp443-445
- 新美南吉 (1980～1983):『校定新美南吉全集 1～12』大日本図書
- 西丸四方、西丸甫夫 (1949):『精神医学入門』南山堂

- 野村聡（2002）：「立原道造の評論『風立ちぬ』：踏み出しの行方」
弘前大学国語国文学 23, 81-94
- 帯金充利（2001）：『新美南吉紹介』、三一書房
- 小川和佑（1978）：『立原道造の世界』、講談社
- 小川和佑（1989）：「立原道造年譜」『立原道造詩集』 pp255-271
明治書院,東京
- 小川和佑（1972）：『立原道造論』、五月書房
- 小川和佑（1989）：『立原道造詩集』明治書院
- 岡西順二郎（1951）：「肺結核診療と患者の心理」日本臨床結核 10
（12） 641-645
- 恩田逸夫（1969）：「宮沢賢治年譜」『現代日本文学大系 27』 pp431-
434、筑摩書房
- 大西信正（1960）：『精神科医からみた結核』医学書院
- 大城信栄（1973）：『風立ちぬノオト』思潮社
- 佐藤実（1979）：『立原道造ノート』教育出版センター
- 須藤松雄（1979）：『立原道造風景』笠間書院
- 菅野明正・大岡信・中村真一郎・長田弘（1971）：「立原道造の美
学」『ユリイカー詩と批評 増頁特集立原道造』 pp100-119、青
土社
- 菅谷規矩雄（1978）：「幸福な詩人の不幸な詩」『立原道造 現代詩
読本』思潮社
- 杉野要吉（1964）：「昭和十年代の堀辰雄」国文学研究 29、117-126
- 杉浦明平（1950）：「立原道造における進歩性と反動性」『南北復刊
号』 pp18-21、南北社
- 杉浦明平（1988）：『立原道造詩集』岩波書店
- 杉浦明平（1956）：「立原道造の思い出」『現代日本の作家』、未来
社（『立原道造研究』所収 pp122-127、思潮社）
- 鈴木亨（1973）：「年譜」『立原道造全集 6』 pp573-655、角川書
店
- 鈴木亨（2001）：「やさしい春の歌」『国文学解釈と鑑賞別冊立原道

造』 pp108～118、至文堂

立原道造（1957～1959）：『立原道造全集 1～5』角川書店

立原道造（1971～1973）：『立原道造全集 1～6』角川書店

立原道造（2006～2010）：『立原道造全集 1～5』筑摩書房

高橋正雄（2016）：「太宰治の『パンドラの匣』」総合リハビリテーション 44（3）、pp254

田代俊一郎（1989）：『抒情の光芒』本多企画

田代俊一郎（2008）：『立原道造への旅一夢はそのさきにはもうゆかない』書肆侃侃房

田澤鏝二、西川義方、佐藤秀三（1930）：『肺結核の最新療法・肺結核の転地療法・肺結核の最新知識』、東西医学社

坪井秀人（1994）：「中間者と言霊：立原道造の晩年の詩に関する美学的考察」金沢美術工芸大学紀要 38, 1-18

宇佐見斉（1982）：『立原道造』筑摩書房

宇佐見斉（2010）：「解題」『立原道造全集 5』 pp509 - 621、筑摩書房

若林つや（1939）：「野花に捧ぐ」『四季』7月号（『立原道造研究』所収 pp333—335、思潮社）

谷田昌平、佐々木基一（1983）：『堀辰雄』、花曜社

山上栄子（1981）：「立原道造論（1）」日本病跡学雑誌,22; 68—74

山上栄子（1982）：「立原道造論（2）」日本病跡学雑誌,24;69-76

山上栄子（1984）：「立原道造論（3）」日本病跡学雑誌,27;59-67

山岸外史（1939）：「立原道造」『四季』8月号、（『立原道造研究』所収 pp83—98、思潮社）

山本康治（2000）：「立原道造 晩年の認識—評論「風立ちぬ」の成立過程をめぐって」四季派学会論集（9）、45—59

矢山哲治（1987）：『矢山哲治全集』、未来社

吉田繁（1985）：「立原道造と長崎旅行」日本医事新報 3177;59—61

吉田繁（1987）：「立原道造と二人の少女」日本医事新報,3275;59-61,

謝辞

8年間という年月を経て、ようやく、私の立原道造の博士論文が完成いたしました。

私は、高校生の時に立原の詩を読んで初めて、立原の言葉でいう芸術による「美の陶醉」というものを知り、それ以来、立原のファンになりました。

また、私の両親も、立原道造には良い印象を持っていて、まだ研究を始める前の大学時代に、古本屋で全集や研究書を買ってくれましたし、私自身も立原道造記念館に足を運んだりして、私の身の周りにはいつの間にか立原関係のグッズが増えていきました。特に文学愛好家というわけでもなかった私にとって、立原道造はまさに異例の存在でした。

おそらく、周囲にとっても私自身にとっても、「立原道造の詩が大好きな木山祐子」というのは、立原への良いイメージも手伝って、何かしら、私にあっていちばん良いところを表していると感じる部分があったのかもしれませんが。

その後、金沢大学の医学部を卒業して、医学の知識を生かした道を模索するに際して、偶然、高橋先生の病跡学に出会い、その面白さと世界観に魅了され、弟子入りを願い、受け入れていただくことができました。

病跡学の研究を始めるにあたって、高橋先生から「自分だけの特別な存在は無いか」と、聞かれて、私が立原の名前を挙げると、「それだよ、木山さん。それこそが、君の研究対象に最適な人物だ」と、たった二言三言で、立原道造の病跡学的研究をすることが即決したのでした。

その時以来、大好きな立原道造の研究を、最愛にして最高の師匠・高橋正雄先生の下で始めることになりました。

その後、私が博士課程で過ごした8年という時間は決して短い時間ではありませんが、ただ、私にわかるのは、ひたすら幸せだった

この8年間の意味です。

高橋先生が私の面倒を見てくださったのは、精神科医として、当時、少し心が疲れていた私を癒してあげたいという義務感や、行き場の無い私に居場所を作ってあげようという高橋先生ならではの御配慮などももちろん大きかったと思います。

しかし、それらの理由の根本にあるのは、高橋先生が、私という人間を純粋な好意と愛情をもって受け入れて下さったという疑いのいれない事実です。

高橋先生に会うまでの私は、他者からのいちばんの愛情というものをなかなか実感できない性質でした。しかし、高橋先生の人間性に基づく無条件の師弟愛については、はっきり明確に信じてことができました。そして、その信頼が、私を根底から作り変えたのでした。

高橋先生は、厳しい経験よりも、ずっと幸せな経験によって、私を、これから先どんなことがあっても生きていけるように育てて下さいました。

この先の人生、ネガティブな思いに苛まれることも、多々あることでしょう。

けれど、私には、高橋先生の下で確かな信頼と愛情でもって、大好きな立原道造の博士論文の完成に全力を注げた、この上もなく幸せな8年間がある。そしてそれは、何物をも奪うことのできない事実であり、さらに、その日々が、リハビリテーション科学の博士号という形で結実したことは、私という人間が、この世で生を享けたことへの祝福を示す証です。

だから、この先、私は何があっても、人生に絶望しきることは無いでしょう。研究生活でつかんだ、人生とは美しく素晴らしいものだという確信が、私を必ず支えてくれるからです。

そして、この幸せな時間への恩返しとして、これからの人生で、私は、高橋先生から手渡された、いわば愛情という名のバトンを、できるだけ多くの人に渡していきたいと願います。

私の博士課程で努力できた幸福なこの8年間は、そのための、尽きることのない活力の源泉となることでしょう。

なお、言うまでもないことですが、私がこの博士論文を完成することができたのは、高橋先生はもちろんのこと、私をとりまくあらゆる皆様のお力添えがあったからです。

まず、筑波大学に所属したこの期間を通じて、いつも優しく的確に私を御指導してくださった吉野真理子先生や佐島毅先生をはじめとする筑波大学大学院生涯発達科学専攻の先生方、及び専門的な立場から貴重な御指導・御助言を頂いた東洋英和女学院大学教授・日本病跡学会理事長の山田和夫先生、ならびに岡田靖雄先生、今泉寿明先生に心より御礼を申し上げます。

そして、金沢大学時代から現在に至るまで、私を励まし続け、見守り続け、時には個人的な悩み事にまで親切・丁寧なご助言を下された金沢大学医学類血管分子生理学教室教授の多久和陽先生に心より御礼申し上げます。

さらに、論文の別刷りをお送りするたびに、丁寧かつ興味深い御感想・御指導を頂き、博士論文執筆を励まし続けてくださった金沢大学名誉教授・小泉晶一先生に心より御礼申し上げます。

そして、私を暖かく見守り、適切な御助言で励まし続けてくださった東北福祉大学の中村恵子先生、リハビリテーションコースの先輩として私の悩みを聞いて下さり、記念日などにはいつも暖かいお心遣いをいただいた池上雅子様、きめ細かいやさしきで常に私を労わってくださった上松晶子様心より御礼申し上げます。

最後に、私という愚な娘を支えながら、私の願いを理解して励まし、精一杯の助力でもって、恵まれた8年間で過ごさせてくれた私の家族に、心からの「ありがとう！」の気持ちを贈ります。

末尾として、博士論文を書き終えたこれからの私に、新たに文学という世界の扉を開き、人生の悦びと愉しみを見つけてくれた立原道造に感謝を捧げます。

立原道造は、詩とは、「美しい魂の告白」でなければならないと記

しました。私は、この謝辞が「幸せな魂の告白」だと、読んでくださった方々に感じて頂けたなら、私がここで記したかった思いは、十分に伝わったのではないかと考えます。

平成 30 年 3 月 16 日

木山 祐子